
カンピオーネ!
英雄たちの鼓動
Campione XVI
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XVI 英雄たちの鼓動

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
英雄たちの鼓動
Campione XVI


護堂
アレッシア
エリカ
祐理
澤
明日香
宮間


「さあ。どうだ、
我が逆縁の担い手・
草薙護堂よ」
アマゾネスの女王までしたがえて、
パラス・アテナは高らかに告げる。
「これなる軍神たちに加えて、
『風の王』も妾の陣中に控えている。
当代の神殺しどもへ宣戦を布告するにあたり、
十分な戦力だとは言えまいか？」


「も、申し訳ありませんっ。
あなたを救助しやすいようにと思って、
水に入る前、とっさに脱いで
しまいました……」
リリアナは恥ずかしがって、
両腕でうすい胸を隠していた。
銀髪の女騎士は精一杯に身をすくませて、
護堂の目をやりすごそうとしていたのだが……。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

サルバトーレ・ドニ

イタリア最強の騎士たる「剣の王」。

甘粕冬馬

正史編纂委員会のエージェント。

沙耶宮馨

正史編纂委員会東京分室室長。

Contents

イラスト / シコルスキー

丈月 城

Illustration
シコルスキー

カンピオーネ!

英雄たちの鼓動

Campione XVI



第１話　魔王と騎士、現る

【一九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの著書『魔王』より抜粋】

　この恐るべき偉業を成しとげた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

　読者諸賢のなかには、この呼称を大おお仰ぎようなものだと眉まゆをひそめる方がいるかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかもしれない。

　だが、重ねて強調させていただく。

　カンピオーネは覇は者しやである。

　天上の神々を殺さつ戮りくし、神を神たらしめる至高の力を奪いとるがゆえに。

　カンピオーネは王者である。

　神より簒さん奪だつした権けん能のうを振りかざし、地上の何なん人ぴとからも支配されえないがゆえに。

　カンピオーネは魔王である。

　地上に生きる全ての人類が、彼らに抗あらがうほどの力を所持できないがゆえに！

　ある春の朝。空はきれいに晴れわたり、雲もすくない。

　さわやかな五月の青空がアレッシアの頭上に広がっている。しかし、一三歳の彼女は昨夜からの不安で小さな胸をさいなまれ、さわやかとは程遠い心境だった。

「……今日こそ鎮しずまってるといいんだけど」

　修道院への田舎いなか道みちを歩きながら、暗い声でつぶやく。

　アレッシアの住む村は、イタリア中部トスカーナ州の片田舎に位置する。住人の多くが農業や林業を生なり業わいとしている。観光名所もない、小さな農村だった。

　そして、アレッシアはこの村の平凡な中学生女子。

　しかし只ただひとつ、両親にも親友にもないしょにしている才能があった。

　彼女がその才能をささやかに開花させた場所——修道院が見えてきた。小さな石造りの古い建物。一二世紀頃に建てられたらしい。

「おはよう、サンドロ。今、ごはんあげるからね」

　修道院の前で、アレッシアはうずくまっていた犬に声をかけた。

　灰色の毛並みをした大型犬——シベリアンハスキーである。彼はぴくりと耳を立て、身を起こし、『おすわり』の姿勢になる。

　ちなみにひもや鎖くさりでつながれてはおらず、完全に自由の身であった。

　バッグから餌えさの容器とドッグフードを取り出しながら、アレッシアは犬に訊たずねる。

「……地下の様子はどうかな？　やっぱり今までどおり？」

　相手が人であるかのような問いかけ。犬に答えられるはずがない。

　だが、サンドロ——この修道院を守る『使い魔』はふるふると首

を左右に振った。

　否定の仕草。魔術によって、彼は犬という種の限界を超えている。この程度の質疑応答、まさしく朝飯前の仕事なのだ。

「じゃあ、地下の神様は鎮まってくれたの⁉」

　期待を込めて問う。しかし、ふるふる。また否定された。

　つまり逆、昨日よりもさらに強まったのだろう。ため息をつくアレッシアの前でサンドロはがつがつと朝食にかぶりつき、ほんの二分で食べ終えた。

　そのまま彼はふらりと歩きはじめた。散歩にでも行くのだろう。

　アレッシアは止めなかった。サンドロは賢い。『呼び出し』の魔術を使えば、すぐに戻ってきてくれる。

　――そう、魔術。アレッシアが秘密にしている才能だった。

　彼女には常人以上の呪じゆ力りよくがあり、魔道の叡えい智ちを理解するセンスがある。そうと見抜いて初級の術をいくつか教えてくれたのは、この院をあずかる老修道士だった。

　村はずれの小さな修道院で、ひとり暮らしをする奇妙な老人。

　彼はアレッシアにだけ、こっそりと教えてくれた。自分はただの修道士ではなく、世にも珍しい『魔術を身につけた修道騎士』なのだと。

　聖職にある人が〝魔術〟なんて、神さまへの冒ぼう瀆とくじゃないのかな――？

　アレッシアはそう思ったが、口にはしなかった。平凡だと思っていた自分に特別な才能があると教えてくれた恩人なのだ。

　また、彼はあるときこうも語った。

「かつて〝異い形ぎようの獣けもの〟と呼ばれた古き神を祀まつった地下の洞窟……その痕跡を隠すために、この修道院は建てられたのだよ。異形の獣とはもしかしたら、あの恐ろしい〝獣の女神〟そのものを指すのかもしれんね」

「獣の女神？」

「うむ。おまえも彼女の名前くらいは知っているだろうが……彼女を崇あがめるための作法は失われてひさしい。まあ、古く強力な女神の一ひと柱はしらだよ。願わくば、異形の獣とやらには永遠に眠っていて欲しいね」

「その神様、目を覚ますかもしれないの⁉」

　思わずアレッシアは訊ねたものだ。

　天にまします主しゅとイエス・キリスト以外に聖なる神と呼べる存在がいるものだろうかと、ひそかに首をかしげながら。

　老いた修道士――否いな、修道騎士なる謎なぞの身分の持ち主はうなずいた。

「ああ。彼ら『まつろわぬ神』は何かのきっかけがあれば、驚くほどあっさりと地上に降こう臨りんする。そして災いを引きおこし、われわれ人類を苦しめるのさ」

　神が降臨する可能性を語った老人は、三か月前に亡くなっていた。

　老ろう衰すいだった。眠るように死んでいる彼をアレッシアが発見した。日曜日の朝、いつものように修道院を訪ねたときだ。身よりのない彼の葬儀はひっそりと行われた。

　以来、彼女は無人となった修道院を毎日きれいに掃除し、老修道士が形見代わりに遺のこした使い魔のサンドロを世話していたのだが。

　半月ほど前から、修道院の下から不気味な気配を感じるようになった。

　修道院の下――つまり地下である。

　自然と、老人の語った〝神〟の話を思い出した。それでも不安を無視して、いつもどおりの日常を意識的に継続していった。

　だが、一週間前。礼拝堂のマリア像のうしろに隠し扉があるのを見つけた。

このマリア像、なぜか黒一色で塗りつぶされている。そして、その背後にある壁の一部がくるりと回転し、奥へ進めることにアレッシアは気づいてしまった。

……壁の向こうには、地下へ続く階段があった。

階段を下りきると、そこは自然の洞ほら穴あなにつながっていた。アレッシアにはその先へ進む勇気はなかった。ひたすら闇やみの広がる地下空間が怖かったし、何より洞穴の奥から届く獣の遠とお吠ぼえを聞いたからだった。

それは犬の遠吠えに聞こえるときもあれば、馬のいななきに聞こえるときもあった。

鳥のさえずりに聞こえるときもあれば、判別できない猛獣の声のときもあった。だが、一度として同じ声は聞こえない……。

アレッシアはあわてて階段を駆けあがり、礼拝堂に戻った。

そして、ガムテープで隠し扉を厳重に封印したのだが。魔術の感覚を研ぎすますと、わかってしまう。地下にわだかまる、すさまじい呪力の量が。

また、これが日増しに増大していくのである。

明日こそは——明日こそは呪力も鎮まっているはず。

この一週間、ずっとそう信じてきた。いや、信じようとしてきた。だが、この日の朝、礼拝堂に足を踏み入れて、アレッシアは絶望感を味わった。

もう感覚を研ぎすます必要すらない。

礼拝堂に入った瞬間、地下から吹きあがってくる強い呪力の波動を感じて、アレッシアは気持ち悪くなった。こんなに強烈な呪力を浴びたのは、はじめての体験だった。

「これ、やっぱり神様が目を覚まそうとしているのかな？」

心細くなって、アレッシアが声に出してつぶやいたとき。

ウォンウォン！　外で犬の鳴き声がした。サンドロが吠えている

のだ。

　修道院の外に出てみると、散歩から戻ってきた使い魔犬が騒々しく吠え立てている。ふつうの人間なら、ただ落ち着かない犬を見み出いだすだけだろう。だが、見習い以下とはいえ魔術を身につけたアレッシアは、サンドロが伝えようとしている情報に気づいた。

「え？　アルノ川で溺おぼれていた人がいたの？」

　どうやらサンドロ、川沿いを散歩していたらしい。

「男の人と女の人……あ、ふたりとも岸まで泳いでこられたんだ。よかった。え!?　男の人は大おお怪け我がしてる!?　大変、助けてあげなくちゃ！」

　アレッシアはつぶやくなり、駆け出した。

　溺れたうえに怪我までしている誰かを心配したのと、単に礼拝堂から逃げ出したかったからである。

　さわやかな春の朝。見あげれば空は青く、五月の雲がゆっくり通りすぎていく。

　しかし、草くさ薙なぎ護ご堂どうはさわやかとは程遠い心境だった。

　当たり前だろう。一時間前まで得え体たいの知れない怪物を夜通し追いかけ、戦い、そのあげく川に流され、流木につかまりながら数十分も漂流。

　ついさっき、ようやく岸に引っぱりあげてもらったところなのだ。

　しかも、護堂は負傷していた。

　濁だく流りゅうに押し流されるうちに、深い切り傷を左肩と背中に負ってしまった。

　このありさまで長く水につかっていたのだ。傷口から血といっしょに体力と生命力まで流れ出ていくのを漂流しながら実感したも

のだ。

　だが、何はともあれ生還できたのは事実であった。

「だ……だんだんこういうことに慣れてきた気がするぞ……」

「気がするは余計よ、護堂。あなた、こういう冒険にすっかりなじんでるから」

　痛みを堪こらえながら訴えた護堂に、〝相棒〟はあっさりと言った。

　エリカ・ブランデッリ。赤みがかった金髪の美少女である。だが、顔立ちの造形だけが彼女の美を形作るのではない。身にまとう覇は気きと才気がエリカを誰よりも華麗で印象的な少女に仕立てあげていた。

「サルデーニャ島でウルスラグナを倒してから、まだちょっとしか経たってないのに……もうどこに出しても恥ずかしくない魔王ぶりだわ。わたしが保証してあげる」

「そんな保証はしなくていいっ。……まあ、でも」

　ぐったりと川岸にすわりこみながら、護堂は言った。

「おまえのおかげで今度も助かったよ。ありがとうな」

　エリカに向けての礼だった。

　草薙護堂が図らずも『カンピオーネ』とやらになったのは、イタリア南部のサルデーニャ島で古代ペルシアの軍神（！）を倒してしまったため。

　あのとき、エリカがそばにいなかったら護堂は絶対に死んでいた。

　その後、シチリア島で古代地ち中ちゆう海かいの天空神メルカルトと戦い、どうにか退しりぞけた。ミラノではイタリアの同族——同じカンピオーネである青年サルバトーレ・ドニとも戦い、なんとか痛み分けに持ちこんだ。

　これらの戦いを乗り切れたのは、全てエリカのサポートがあれば

こそだ。

　……まあ、今回は彼女の『トスカーナ州に巨大なウナギ型の怪物が出没してるらしいから、見にいきましょうよ。もしかしたら、どこかの神が顕けん現げんしたのかもしれないわ』という提案＆強要が全ての元凶ではあったが。

　それでも、命の恩人である事実は変わらない。

　流された護堂だけでなく、エリカまでずぶ濡ぬれである。それは彼女が〝相棒〟を岸に引きあげる際、自身も川に飛び込んだからだ。護堂を救うために、ためらいもせず。

　目の前をアルノ川が流れていく。

　ちょっと大きめの渓けい流りゆうという風ふ情ぜいの、きれいな川だった。

　トスカーナ州を東西に横切る大河なのだという。だが、このあたりは山間部なので川幅はあまり広くない。ふたりがいる岸辺も大小さまざまな石だらけだった。

　これが日本なら、鮎あゆ釣つりでも楽しめそうな景観であった。

「この川って、フィレンツェとかも流れていくんだっけ？」

「ええ。あのまま流されていたら、百ゆ合りの都フィレンツェまで到達できたはずよ。もっと下流まで行けば斜しゃ塔とうで有名なピサに着いて、ティレニア海に流れ込む感じね」

　エリカが列挙したのは、トスカーナ州でも特に高名な古都たちである。

　聞き覚えのある地名を聞いて、護堂はしみじみつぶやいた。

「そんなふうに観光せずにすんで、本当によかったよ……」

「でも、異常にしぶとい護堂のことだから、途中で水死とかもせずに、旅たび路じをまっとうできたんじゃないかしら？」

　ずぶ濡れのエリカは割とまじめな顔だった。冗談ではないらしい。

護堂はちょっと憮ぶ然ぜんとした。

たしかに「もしかしたら……」と思えるくらい頑丈で、しかも生命力旺おう盛せいな肉体になりはした。が、草薙護堂はれっきとした人間なのだ。さすがにそんな無茶はできまい。たぶん。

ぶるっ。急に寒気を感じて、護堂は身を震わせた。

ずぶ濡れのうえに怪我までしている。体温がかなり下がったのだろう。

「と、とにかく着がえを調達しなきゃだな……。近くに町とかあるのか？」

「かなりの田舎だから、町はないわね。でも、それなりに人は住んでるみたいよ」

「じゃあ服を買うか、誰かに頼んで貸してもらおう」

傷の痛みに耐えながら、護堂は立ちあがろうとした。

だが、足と膝ひざに力が入らない。血と体力を失いすぎているらしい。すると、エリカがくすりと微ほほ笑えんだ。護堂の苦境を楽しんでいるわけではない。むしろ逆だろう。

彼女の考えを悟って、護堂は大いにあせった。

まちがいない。エリカは護堂の傷を『治す』つもりだ。口もとに浮かぶ悪魔的な微笑がその証あかしだろう。ダメだ。彼女の治療行為を受けいれるわけにはいかない！

しかし、護堂にここから逃げ出す力は残されていなかった。

また、エリカがすばやく近づいてきて、護堂の体を自分の方にぐいと引きよせてしまう。これがとんでもないバカ力だった。

エリカの身長は一六〇台なかば。体つきも華きゃ奢しゃなほど細い。

だが『魔術』で筋力を高めており、無差別級の柔道選手をも凌りょう駕がする力持ちだった。そんな剛ごう力りきで抱きかかえられた以上、手負いの護堂に抵抗する術すべはない。

「ふふっ。まずは〝傷を癒いやす〟のが先よ。順番をとりちがえたらいけないわ」

　とろけるような微笑を護堂に向けて、エリカがささやく。

　彼女の顔がおそろしく近い。あと一〇センチ距離を詰めれば、護堂とエリカの顔はぴたりとくっついてしまうだろう。

「い、いやっ。どうせ俺の体、勝手に治るはずだし！」

　そうそうめったに『死ねない体』となった草薙護堂。

　非常識な話だが、かなりの重傷でもしばらく寝こんでいれば治ってしまう。今回の傷も、放っておけば自然に治ってしまうはずだった。

「だからといって、治療が無意味なはずないわ」

　エリカは無む邪じや気きなほど可か愛わいらしく笑って、唇くちびるを護堂の顔に寄せてきた。

「今あなたがすべきことは一刻も早く傷を治し、体をあたためて、濡れた服を乾かすこと。そのために最善を尽くさなきゃ。わたしは草薙護堂の騎士で愛人……あなたのために唇を捧ささげるくらい何でもないことよ」

「そ、それが問題なんだよっ！」

　非常識な生命力と共に草薙護堂が得た体質のひとつ。

　それは『魔術に対する絶対的な耐性』だった。カンピオーネとなった者は、どんな魔獣も魔術師もおよばぬほど強大な呪力を身につける。この体に横おう溢いつする呪力があらゆる魔術を跳ねとばし、無効化させるのだとか。

　敵対的な術も、利益をもたらす術も全ていっしょくたに。

　例外は、同じカンピオーネか『まつろわぬ神』が繰りだす力のみ――。

「でも経けい口こう摂せつ取しゅであれば、わたしたちでもあなたに術をかけられる。ふふ、この抜け道があったことを運命に感謝し

なくちゃ駄目よね。おかげでわたしは護堂を助けられるし、こうしてキスを愉たのしむこともできる……」

　艶つやっぽい口調で言うなり、エリカは護堂の唇を奪った。

　彼女の甘やかなキスで唇をふさがれてしまう。護堂は目を白黒させた。やわらかな唇の感触がたまらなく心地よく、そして慕したわしい。エリカはまずちゅっと護堂の唇をついばみ、それから口全体を包みこむようにキスしてくれた。

　それから濡れた唇で護堂の唇をなぞり、舌を差し入れてきた。

　護堂の舌をエリカの舌がつかまえた。絡からみ合う。舌と舌がもつれ、睦むつみ合う。エリカは愛情深い動きで唇を開き、護堂の口を丹念に味わっていた。さらにラテンの熱烈さで護堂の舌を求め、自分の舌で大胆に舐なめ取ろうとする。

　そして、彼女の口から『治ち癒ゆ』の魔術が吹きこまれてきた。

　これが経口摂取の意味だった。口から口へ、マウス・トゥ・マウスで魔術を送りこむ形であれば、エリカのような人間の魔術師がかけた術もカンピオーネに通用するのだ。

　傷口から急に痛みが引いていくのを、護堂は感じた。

　どうやら治癒の効果が出て、傷が治ったらしい。生命力過か剰じような自分たちにふさわしい、インスタントな治りっぷりである。



「え、エリカ。もう怪我も治ったみたいだし、そろそろやめた方が……」

　護堂は訴えた。だが、金髪の美少女はかまわず護堂の唇をついばみ続ける。

「いいの。今までのはあなたの傷を癒すため。ここからは純粋にあなたとのキスを愉しんで、愛を確認する作業よ」

　というのがエリカの言い分であった。

　もちろん唇は離れない。護堂とキスを交わしたままのささやきだった。

　……結局、そのまま五分ほど口づけを継続してから、ようやくエリカは唇を放した。しかし、その理由はキスに飽きたからではなく。

「そろそろ体をあたためなくちゃね。今、火をつけるわ」

　濡れた服のまま川辺にいたので、ふたりともすっかり冷えてしまったからだった。

　エリカの顔を正視できないほど恥ずかしくなっていた護堂は、無言でこくりとうなずき、うつむいてしまった。

　はじめて会ったのはイタリア半島の南、地中海に浮かぶサルデーニャ島。

　あの島をいっしょに駆けまわっていた間、エリカはずっと護堂に手厳しく、ツンケンした態度ばかりを示していた。だが、今はどうだろう。そのあとも数々の危険を共にくぐり抜けるうち、エリカは護堂への『愛』を公然と口にするようになったのである。

　しかも、言葉だけではない。態度でも行動でも。こうまで熱烈にキスさえしてくれる。

　なんということだろう！　護堂はめまいに似た感覚を味わった。

　まさか、自分のようにつまらない男子がエリカほどの美少女にあらんかぎりの愛と情熱を捧げられてしまうとは！

　もちろん、うれしい。だが、どうにも困惑してしまう。

　自分ごときがエリカにふさわしいはずはないのだから。そして、もうひとつ。

「ねえ護堂。神獣の件も片づいたし、ここからはわたしたちだけの甘いひとときを過ごすために時間を使わない？」

「あ、あま、なんだってっ？」

「甘いひととき。わたしたち、そろそろシチリアでの続きをしてもいい頃よ。わたしね、もう叔お父じさまに言ってあるの。数か月後か数年後かはわからないけど、必ず護堂の子供を生むつもりだから、協力してねって」

「こど──！」

　両親を亡くしたエリカの保護者は、ミラノにいる叔父だという。

　親代わりの人物にもうそこまで申告しているとは……。いや、エリカは誰よりも魅力的な少女だし、今後これほど息の合う〝相棒〟と巡り会える気もしないのだが、護堂はまだ高校一年生の未成年である。

　子供やら結婚やらを考えるには、まだまだ早すぎるような──。

　悶もん々もんと悩む護堂をよそに、エリカはぱちりと指を鳴らした。すると、目の前でいきなり火が燃えあがる。一瞬でたき火を起こす魔術らしい。

「便利でいいなあ……」

　のんきなことをつぶやいて、護堂は火に近づいた。

　エリカも同じようにする。ふたりでたき火に当たり、冷え切った体をあたためる。

　だが二分後、護堂は震える声でエリカに叫んだ。

「こ、こら！　おまえ、なんて格好するんだよ⁉」

　たき火の前で、おもむろにエリカが濡れた服を脱ぎはじめたの

だ。

「何を言うの。こんなものを着たままじゃ、ちっともあったまらないでしょう？」

「たしかにそうだけど！　でも、ここには俺も——男もいるんだぞ!?」

「あなたはもうシチリアで見てるじゃない、エリカ・ブランデッリの一いつ糸しまとわぬ姿を。今さら気にしたりしないわ」

　あでやかに微笑みながら、エリカは大胆な姿を護堂の前にさらけ出す。

　衣服といえば、紅あかい下着の上下をまとっているだけ。

　白い素肌がとにかくまぶしい。また、何よりプロポーションのみごとさが護堂を悩ましい思いに追いこむ。エリカは華奢だが、女性として出るべきところは出て、引っこむべきところはみごとに引っこみ、くびれている。

　どんなグラビアアイドルも霞かすむような肢し体たいを目まの当たりにして、護堂は動転した。

　エリカはどうして草薙護堂をいちいち振りまわし、追いつめるのか。

　困惑する護堂を見守りながら包容力あふれる貴婦人のように微笑む少女。しかし、その悪戯いたずら心ごころと自由闊かつ達たつさが魅力的なのもたしかで——。

「護堂もそれ脱いだら？　冷たいでしょう？」

「冷たくてもいいんだよ！」

　護堂は上半身だけ裸になっていたが、ジーンズをはいたままだった。

　目の前の異性に気を遣つかった結果である。だが、当の彼女がこのありさまとは。護堂の心は困惑と混乱で大いにかき乱され、どきどきと胸が高鳴る。

　まずい。エリカのペースに乗せられっぱなしだ。なんとか立て直さなくては！

　しかし、この直後。

　不意にエリカが顔を引きしめ、『召しよう喚かん』の魔術を使った。

　どこかから所持品を呼びよせる術だ。今回は短いマントのような着衣を呼び出した。紅と黒ロツソネロの縦たて縞じま模様が印象的な衣ころもである。これをエリカは肩にはおり、上半身を隠す。

　護堂も身がまえた。

　エリカには草薙護堂以外に素肌を見せるつもりなどないはず。だから隠す。それはつまり、誰かが近づいてきたという意味でもある。剣術の達人でもある彼女のこと、足音でも聞きとったか気配を感じでもしたのか。

　ややあって、女の子がひとりこちらに歩いてきた。

　一二、三歳か。ちょっと可愛らしい感じの子で、灰色の大型犬を連れている。

「あれ？　川で流されていた男の人、怪我をしてるって聞いたんだけど……」

　女の子は護堂を見て、不思議そうに首をかしげた。

　護堂も不思議だった。この子はどうして俺の怪我を知ってるんだと。また、エリカは大型犬を眺めて、軽くうなずいた。何かに気づいたらしい。

　一方、女の子はさっきエリカが起こした火を見て、大きく目をみはる。

「魔術の火……？　もしかして、あなたたちは魔術を使える人なの!?」

　いきなり訊きかれて、護堂は驚いた。今の質問、自分はともかくエリカに関しては大当たりだ。つまり、この女の子も魔術の心得があるのだろう。

　これが草薙護堂を〝ちょっとした揉もめごと〟に巻きこむ発ほつ端たんであった。

「つまりアレッシア。あなたはこの修道院に住みついていたテンプル騎士団系の魔術師から、かんたんな手ほどきを受けたのね」

　石造りの古い修道院。その庭先でエリカは言った。

　護堂もエリカもすでに着がえている。アレッシアが自宅から服を持ってきて、貸してくれたのだ。そして、アルノ川の岸辺から修道院まで移動してきた。

「テンプル騎士……？」

「剣と魔術のどちらも身につけた、中世ヨーロッパの修道士兼騎士のことよ。あなたのお師し匠しようさまやわたしはその末まつ裔えいなの。ふふ、わからないなら今は気にしなくていいわ」

　怪け訝げんそうなアレッシアに、エリカは微笑みと共に語る。

　ここまでの道すがら、金髪の美少女は歳下の少女にやさしく話しかけ、上う手まいこと『どこで魔術を学んだのか』聞き出してしまった。

　聡そう明めいで弁の立つエリカは、社交術や交渉の達人なのだ。

「本気で魔術を学ぶつもりがあるなら、大きな街に出て新しい先生を探しなさい。古い大学のある都市がおすすめよ。トスカーナ州だと、いちばんいいのはフィレンツェ。それからシエナ、ピサ、エンポリといったところかしら。リヴォルノあたりも悪くないわね」

「そ、そうなんだ……」

「州の外に出てもいいなら、もっと選択肢は広がるわ。ミラノとか永遠の都ローマとか。もちろん名門の魔術結社に加入するには、確固たる才能を示す必要があるけど」

　エリカが一息つくと、アレッシアはいきなり決意の面おも持もちになった。

「あの！　よかったら相談に乗ってもらえる⁉　たぶん、とっても重大なことなの！」

　アレッシアの勢いを見て、護堂は首をかしげた。

「着がえを貸してもらったお礼もしたいし、相談くらいいくらでも乗るけど……。俺たちで力になれることなのか？」

　イタリア語だった。カンピオーネになって以来、異国の言葉も何日か聞いていれば自然と理解できるようになった。話す方も問題ない。とんでもない特技である。

　だが、これでさえカンピオーネの〝体質〟ではおとなしい方なのだが……。

　自分たちの難なん儀ぎさを噛かみしめる護堂に、アレッシアは答える。

「もしかしたら……ううん。たぶんダメかなって思う。でも、ほかに相談できる人もいないし、どうしたらいいか何にもわからないし。私、本当に困ってて……」

「なんか大変そうだな。よし、じゃあ試ためしに言ってみな」

　しゅんとうつむくアレッシアに、護堂は笑いかけた。

　小さな女の子がこんな顔をしているのだ。やはり、力になってやりたい。

　それに、家族や知り合いの大人ではなく初対面の自分たちを頼る。おそらく魔術がらみの問題なのだろう。だったら――

「まじないとか魔法のこと、俺は全然わからないけどさ。そっちのエリカは専門家だし、すこしは力になれると思うぞ」

　言いながら、護堂は目くばせした。

　エリカは『まあ、いいわよ』という感じで肩をすくめ、軽くうなずく。すると、アレッシアはしばらくためらってから、おもむろに切り出した。

「あのね……実はこの建物の地下に神様がいて、もうすぐ甦よみが

えるかもしれないの！」

　衝撃的な情報だった。

　エリカは「まあ」と目を丸くしてから、かすかに苦笑し。

　護堂は「へー」と感情を込めずにつぶやいた。

　そして思い出す。つい数時間前、神様のしもべだという大型生物と戦ったことを。隣でエリカが笑い出すのを堪えていた。その不ふ謹きん慎しんさに護堂は憮然とし、年長者ふたりの対照的な反応にアレッシアはきょとんとしてしまった。

　エリカによる事情調査は、二時間ほどで終わった。

　まず亡くなった修道士（のふりをしていた魔術師？）が遺した文書、資料類をざざっと流し読み。それから礼拝堂におもむき、黒く塗りつぶされた聖母マリアの像に注目。

　最後にマリア像のうしろにある隠し扉を開けて、地下におりる。

　このとき護堂もつきあおうとしたが、エリカは言った。

「まだ来なくていいわ。ちょっと待ってて」と。

　得体の知れない獣の声が充満しているという洞穴のなかへエリカは侵入し、本当に〝ちょっと〟で戻ってきた。そして護堂に訊ねる。

「ねえ護堂。今、身の危険を感じる？　厄やつ介かいな敵が近くにいるとか？」

「いいや、べつに。まあ、下から変な気配は感じるけど」

　カンピオーネは超常現象や怪奇現象に対して、異様に勘かんが利きく。

　礼拝堂の地下から強い呪力が放たれているのを、護堂はなんとなく感じていた。だが、それだけだった。

　するとエリカは深くうなずき、結論づけるようにつぶやいた。

「やっぱりね。『まつろわぬ神』が近くにいたら、カンピオーネの肉体は勝手に戦闘準備をととのえる。でも、神しん性せいの低い存在が相手の場合、そこまでは反応しないんだわ……」

「で、どうなんだよ？　ここの地下に、神様は本当にいるのか？」

「結論から言うと、いないわね」

　これを聞いて、アレッシアは目を輝かせた。だが、護堂はそうしなかった。

　エリカがまだ何か言おうとしていることに気づいたからだ。

「神はいないけど、そのしもべ——神獣が半覚醒状態だったわ。あと三、四日すれば完全に目を覚まして、活動を開始するんじゃないかしら」

「そっちかよ！」

　昨夜から今朝未明にかけて護堂が戦った相手。それがまさに『神獣』である。

　神に仕つかえる聖なる生き物。巨大であったり、空を飛んだり、稲妻や超音波を吐き散らしたりと特徴はさまざまだが、おおむね『怪獣』と呼ぶに足るバケモノたちであった。

「ほら。例の巨大ウナギ……と、うわさの立った恐竜型の神獣。最近、あれがこの一帯をさまよってたわけでしょう？」

　エリカがつらつらと推すい論ろんを語る。

「たぶん、あれの神気や呪力を感じ取って、ここに封じられていた神獣も覚醒状態に近づいたんじゃないかしら。しかも、昨夜は護堂も——神殺しのカンピオーネも近くで暴れていたわけだし」

「つ、つまり、俺のせいかもしれないと？」

「あくまで可能性だけど。でも、十分にありえる事態よ」

　護堂がたじろぐと、エリカはにっこり微笑んだ。

　その悪魔的な笑顔がはっきりと告げている。『こういう事情なん

だから、あなたが処理せざるをえないわよね♪』と。

　そして、話を聞いたアレッシアはエリカに詰めよった。

「か、神様のしもべってことは、やっぱり危険なの!?」

「ええ。地下に眠る神獣は、おそらく月と大地の女神で獣の女王アルテミスの眷けん属ぞくよ。目覚めたら最後、この村どころかトスカーナ全土が壊滅してもおかしくないわね」

　エリカはちらりと護堂の横顔を見ながら、語る。

　少女ではなく、こちらに聞かせるつもりなのは明白だった。

「壊滅――!?」

　息を呑のむアレッシア。うなずくエリカ。そして、護堂は決心をかためた。こうなったら、毒といっしょに皿まで食べるしかないようだ。しかし、その前に。

「ち、ちょっと外に出ていてもらえるか？」

　アレッシアに向けて、護堂は言った。

「お、俺とエリカは作戦会議があるというか……」

「いわゆる、大人の話し合いよね♪」

　エリカがしれっと付け足した。言うにことかいて、なんという表現を。

　護堂がにらみつけても、エリカは素知らぬ顔で微笑んでいた。

　古い礼拝堂でふたりきりになった途端、エリカはうれしそうに言った。

「ふふっ。わたしと護堂の愛をより強くするため、運命が気を遣ってくれたのね。さあ、熱い口づけをもう一度愉しみましょう？」

「そんな運命、あってたまるか！」

　護堂は力いっぱい叫んだ。

「さっきおまえも言っただろ!?　俺や例の怪物が暴れたから甦ったかもしれないって！」

「それでもかまわないわよ。わたしたちがキスすることに変わりないんだし」

　エリカにくすりと微笑まれて、護堂はうなだれた。

「あなたがサルデーニャ島で倒した神は、古代ペルシアの軍神ウルスラグナ。一〇の化け身しんに姿を変える勝利の神……」

　悄しよう然ぜんとするこちらをよそに、金髪の美少女は謡うたうように語りはじめる。

「最強にして、全ての敵を打ち倒す者。彼が最後に見せる十番目の化身は『黄金の剣を持つ戦士』。その輝ける剣を、草薙護堂は彼から奪い取っている……」

　神を神たらしめる、至高の力。これを権能という。

　しかし、只の人間が奇跡に奇跡を重ねて、神を殺害できたとき。その人間は殺あやめた神の権能を奪い取り、超人と化す。カンピオーネの誕生である。

　カンピオーネとは、神に等しい力を所持する戦士のことなのだ。

　だが、力の源みなもとが聖なる神でも、カンピオーネは聖者ではない。逆だ。彼らは神殺しの魔王である。地上の何なん人ぴとにも支配されない埒らち外がいの者だった。

　そして、草薙護堂こそ最も若きカンピオーネ。地上に七人しかいない魔王のひとり。

「黄金の剣を使えば、あなたはどんな神だって切り裂くことができるわ。まして神に仕える下僕程度なら、切っ先で小突くだけでも消滅させられるでしょうね。……でも、あなたはそうかんたんに剣を使えない」

　つぶやきながら、エリカがにじり寄ってきた。

護堂の倫理観は避けなければと訴える。しかし、そうはできなかった。

このとき、護堂は礼拝堂の椅い子すにすわっていたのだが。その膝の上にエリカは腰を下ろしてしまう。そして、しなだれかかってくる。

エリカの肢体を護堂はしっかりと受けとめた。

肌のぬくもりとやわらかさ。驚くほどの量感と弾力を併あわせもつ、ふたつのふくらみ。それらの感触と適度な重みが護堂にのしかかってくる。

えもいわれぬ心地よさと高揚感が、護堂の全身を駆け抜けた。

さらに金髪の美少女はフフッと微笑んで、護堂の頬ほおに軽くキスし、耳元に唇を近づける。

「神格を切り裂く刃やいばの源は、敵とする神についての詳細な知識。日本の学生だった草薙護堂が持つはずのない叡智だわ。何年もかけて学ばなければ、身につけることもできない……」

エリカが小声でささやく。なまめかしくも魅惑的な声だった。

さっき傷を治したとき、彼女は護堂の唇を無理矢理に奪った。だが、今回はちがう。できるのにそうしようとはしない。

待っているのだ。今度は護堂の方から求めさせようと、誘っているのだ。

「でも、魔術師であるわたしが『教授』の術を使えば、必要な知識をすぐに伝えられる。一日くらいしか保もたない即席の知識だけど、戦いを終えるには十分すぎる時間よね？」

ちゅっ。護堂の耳たぶに、エリカはそっと唇でふれた。

「ねえ護堂。あなたは人類を代表して神々と戦う魔王。カンピオーネのひとりだわ。そのあなたに戦えだなんて不ふ遜そんなこと、わたしの口からは言えない。だから命じて。わたしに知識を授けろって。草薙護堂のために唇を捧げろと要求して……」

その気になれば、いくらでも不敬行為をはたらくくせに、しおら

しいことを言う。

　だが、このささやきが護堂の心に火をつけた。

　今にも暴れ出そうとしている神のしもべがいる。対抗できる人間は自分しかいない。そして、エリカにこうまで言われてしまった。彼女の魅力に負けないよう、ギリギリの一線で踏みとどまっている状態なのだ。

　然しかるべき条件がととのえば、たがが外れてしまうのは致いたし方ないところで——。

「……た、頼む。必要なことを俺に教えてくれ」

　これを聞いて、エリカは大輪の椿つばきが花開くように笑った。

　無言で護堂にキスして、そのまま静止。十数秒、唇を合わせたままだった。それからおもむろに口を離し、エリカはささやいた。

「もちろんよ。あなたが勝利するためなら、わたしの持っているものをいくらでも捧げてあげる。護堂のために何度でも剣を研といであげる！」

　とろんとした目つきになって、エリカは微笑む。

　いつもの華麗さや悪魔っぽさを感じさせない、幸せそうな笑顔だった。

「ふふっ。やっぱり自分からキスするのと、あなたに頼まれてキスするのとじゃ、いろいろちがうわね……。どちらも好きだけど、今日は両方愉しむことができて素敵だわ」

　ぎゅっと護堂に抱きつきながら、エリカは言った。

　そして、ふたりは無言で見つめ合う。また唇を合わせて、ふたたび口づけを交わす。片方が片方へキスするというのではなく、ふたりの心がひとつになった結果であった。

「アルテミスは生と死を司つかさどる大だい地ち母ぼ神しんであり、狩猟の神。彼女は獲え物ものを狩るだけじゃない。熊をはじめとする森の獣や鳥たちに女主人と崇められていた……」

　キスをしながら、エリカが神の知識をささやく。

「彼女は変身を得意とし、さまざまな獣の姿に化身したというわ。また、その体には数百もの乳ち房ぶさがあったとも。これはアルテミスが命の母であったことの象徴。いい？　この女神はね、あらゆる生物の母であり、生み出した命を狩る殺戮者でもあったの……」

　耳で聞くのと並行して、大地母神アルテミスのイメージが脳内に送りこまれてくる。

　エリカが使った『教授』の魔術。その効果であった。

　女神アルテミスと彼女に由ゆ来らいする力を切り裂くための刃が護堂の右腕に宿る。これがあれば神の眷属ごとき、一ひと太た刀ちで消滅させられるはずだった。

　このあとの出来事を、戦いと呼ぶことはできまい。

　護堂はただ地下におりて、洞穴の奥に進み、得体の知れない神獣を『剣で小突いて』消滅させただけだからだ。

　地下でまどろんでいた神獣は、なかなかに不気味な姿だった。

　その肉体の大部分は『灰色の粘ねん液えき』であった。不定形のドロドロとした流動体。全て流し込めば、学校のプールをいっぱいに満たせるくらいの量はあったろう。

　それだけの粘液がドロドロ・プルプルと震え、波打っていたのである。

　しかも、この粘液は絶えずあちこち隆りゅう起きする。沸ふつ騰とうした液体の表面にボコボコ気き泡ほうが生じるように。そして、隆起した部分が獣や鳥の姿に変わる。

　護堂が不定形の粘液を見ていた時間は、三分足らずだっただろう。

　しかし、その間にさまざまな鳥獣を見ることができた。粘液の隆起部分は万まん華げ鏡きようの模様さながらに次々と形を変えていったからだ。熊・犬・猫・牛・鹿しか・馬・豚・猪いのしし・

羊・山や羊ぎ・ライオン・虎・豹ひよう・猿・ゴリラ・オランウータン・鳩・カラス・ツバメ・鷲わし・鷹たか・アホウドリ・白鳥・フクロウ・蜜蜂……とまあ、列挙するのが虚むなしいほどだった。

　この無節操な形態変化が、粘液のいたるところで同時進行していくのである。

　見ているだけで気持ち悪くなれる。そういう代しろ物ものへ護堂はおもむろに『剣』を突き立て、一太刀で消滅させた。

　そしてエリカと共に地上へ登り、修道院の外に出たのだった。

「あ、あんなのでも神様のしもべなのかよ……」

「神々とその眷属はとびきり美しいか、とびきり異形であるかのどちらかが多いのよ。今回は後者だったということね」

　説明するエリカも、珍しくうんざりした顔だった。

「願わくば、次に会う『まつろわぬ神』には美しい姿をしていて欲しいものだわ。いっそ美の女神アフロディーテでも出てこないかしら？」

「あー、ギリシア神話の女神さまか。さすがにそれくらいは知ってるぞ……」

「ちなみに彼女、起源をさかのぼるとオリエントの大地母神に行きつくのよ。メルカルトを覚えてるでしょう？　アフロディーテは彼とも浅からぬ縁を持つ古い女神なの」

　エリカの語るうんちくを聞いて、護堂はため息をついた。

　サルデーニャ島でウルスラグナと戦っていた神、メルカルト。もともと紀元前の中東で信仰された天空神で、のちに古代フェニキア人の主神となり、地中海地方で最も権威ある神となった。ギリシア神話の英雄ヘラクレスの原型だともいう……。

　うろ覚えの知識を思い出して、つくづく思う。

　神話というのは、どうしてここまで入り組んでいるのかと。

　ともあれ一仕事終えて、ふたりは修道院の外でアレッシアと落ち

合った。エリカが経けい緯いをはぶいて、簡潔に結果だけ語る。

「待たせたわね。地下で復活しかけていた神獣はこの草薙護堂が滅ぼしたわ。もう心配しなくても大丈夫よ。あとで礼拝堂に行って、たしかめてみなさい」

「——滅ぼした!?」

　アレッシアが『信じられない！』という顔で護堂を見つめる。

　おそらく、その内心を言葉にしようとしたのだろう。アレッシアが口を開きかけた瞬間、エリカは悪戯っぽく微笑み、人差し指を唇に当てた。

「これは忠告だけど、カンピオーネ——神殺しの力を疑うような発言は絶対にひかえなきゃ駄目よ。この先も魔術の世界で生きていくつもりがあるならね」

　護堂の腕に抱きつき、金髪の美少女は〝恋人〟の力を自慢するように語る。

「彼らは覇者であり魔王、王者にして戦士。『まつろわぬ神』が地上に災いをもたらすとき、人類を代表して戦う絶対的な強きよう者しや。姿形はわたしたちと同じだけど、中身は人間とは程遠い怪物なんだから！」

「だ、誰が怪物だよ！」

「もちろん、あなた。草薙護堂が。今回だって、本当は何十人もの魔術師が命がけで神獣の封印に挑まなきゃいけない大事件になったはずだもの」

　異議を軽やかに受け流して、エリカは歳下の少女にウインクする。

「わたしたちとの出会いをすぐ自慢できるようになるわよ。いずれ魔道の世界に名を轟とどろかす七人目のカンピオーネ、草薙護堂。その第一の騎士にして愛人、エリカ・ブランデッリ……あなたはこのふたりに出会うことができたのだから！」

　草薙護堂とエリカ・ブランデッリ。

　七人目のカンピオーネと、紅き十字の筆ひつ頭とう騎士。

　いずれエリカの予見どおり、数々の武功を打ち立てていく両名の武勇伝……というより、ごくささやかな寄り道のひとつであった。

第２話　ローマの休日・深夜版

　エリカによって古都ローマに招待され、心ならずも〝決闘〟した夜。

　いつものごとく草くさ薙なぎ護ご堂どうは命の危機をやりすごし、結果、古代の闘技場であるコロッセオがすさまじいことになってしまった。

　だが、何はともあれ、もろもろの修しゅ羅ら場ばはようやく一段落ついた。

　護堂は惨劇（！）の現場となったコロッセオを離れ、決闘の立会人だった三結社の代表たちとも別れた。あとはホテルに向かうだけだ。

　シャワーを浴びたら、すぐに寝よう。護堂は決意した。

　そして明日の朝、今夜の反省をじっくりとするのだ。二度と〝こういうあやまち〟を犯おかさないように……。

　視線をコロッセオに向ければ、しでかした『不始末』の結果がいやでも目に入る。

　忸じく怩じたる想おもいで、護堂は後悔を噛かみしめた。コロッセオの方角から、パトカーと消防車のサイレンが聞こえてくる。この音によって、良心はさらに追いつめられる。

　だというのに、隣を歩くエリカはひどく愉たのしそうだった。

「ふふっ。今夜の決闘で草薙護堂の威い名めいは決定的なものに

なったわね。いろいろ根まわしした甲か斐いがあったわ」

　深夜のローマ市街を歩きながらエリカは言う。護堂はぎょっとした。

「ね、根まわしだって？」

「ええ。ほら、さっき決闘に立ち会った三人。あの方たちをまとめて招待するの、結構大変だったのよ。『格好の口実』があったのはいいけど、いそがしい方々だから。実はあと三人、招待していたのよね。でもスケジュールが合わなくて」

「俺の力ってやつを見せるためにわざわざ？」

　護堂は眉まゆをひそめた。

「何でそんなことすんだよ。俺なんかのために集まってもらうことないだろ」

「バカ言わないで。魔王カンピオーネの誕生より重大な懸けん案あんなんて、魔術の世界にあるはずないでしょう？　招待状はむしろ、わたしたちからの親切よ」

　イタリアで名門とされる魔術結社は七つあるのだと、エリカは語った。

　今夜の立会人だった三名が所属する《老貴婦人》《雌め狼ろう》《百ゆ合りの都》。そして《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》《蒼そう穹きゆうの鷲わし》《楯たて》。

「最後はわたしたち《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》。護堂はもう我わが結社の総そう帥すいである叔お父じさま——パオロ・ブランデッリと会っているわ。今夜はよその六派の代表にも、七人目のカンピオーネと謁えつ見けんする機会をあげるつもりだったの」

　なんと、あの立会人にそんな意味があったとは——。

　護堂は己おのれを取りまく境遇の異様さに、ため息をつきたくなった。

「でも、護堂ったら期待以上にやってくれたわ。あれだけの破壊力

を名門三派の代表に見せつけたんだから、あなたを偽にせ物ものと疑う声はもうなくなるわよ」

「み、見せつけたんじゃないっ。うっかりやっちまっただけだ！」

「べつにどちらでもいいわ。大切なのは結果だから。ふふっ、今夜は祝しゆく杯はいをあげましょう」

「なんで祝杯!?」

「今夜は草薙護堂が欧おう州しゆうデビューした記念日だもの」

　しれっとエリカから告げられて、護堂は愕がく然ぜんとした。

「実はカメラを用意させておいたの。さっき護堂がコロッセオを蹂じゆう躙りんしたときの映像、いい感じに記録できているそうよ。今ね、この動画を全ヨーロッパの魔術関係者が視聴できる形で準備中なの。さっき立ち会った三人も証人となるし、あと数日のうちにカンピオーネ・草薙護堂の名前は欧州魔術界の隅々まで轟とどろくはずよ」

　そこまで仕込みがすんでいたとは。がっくりと護堂はうなだれた。

　それを見て、エリカがふふっと悪魔的に微ほほ笑えむ。

「そんな顔しないで、胸をはって。神様を殺した人らしくないわよ。あなたにはこれから魔王として、どんどん飛躍してもらうんだから」

「履り歴れき書しよに書けない肩書きを持つ気はないし、ステップアップするつもりもない！」

　大声で遺い憾かんの意を表明してから、護堂はあくびを嚙み殺した。

　すでに深夜二時すぎ。コロッセオで暴れた疲れと時差ボケの影響もあってか、急に眠気が襲ってきた。早く休んだ方がよさそうだ。

「とにかく、早くホテルに行って休もうぜ。もうこんな時間だし」

　今夜の宿は確保してあるとエリカから聞いていた。

それゆえの訴えだったが、しかし、連れはこんなふうに答えた。

「そうね。ワインかシャンパンでも開けて、ふたりでささやかな祝杯をあげなきゃいけないものね。そのあとはゆっくりベッドで臥ふし所どを共にして、愛をたしかめ合って」

「ま、待て。そのスケジュールは明らかにおかしい」

疲れているのに、何でこんなツッコミをせねばならないのか？

理り不ふ尽じんに思いつつも、護堂は言うべきことを口にした。

「まず俺たちのような未成年が飲酒するのは不適切だし、俺とおまえが同じ部屋に泊まってベッドまで共有するのはもっとよくない！」

ましてや、愛をたしかめ合うなど言語道断。男として毅き然ぜんと誘惑を断ち切るつもりで護堂は言ったのだが。

エリカは白い目をこちらに向け、平板な口調で反論した。

「あのね護堂。断っておくけど、今あなたが不適切だと言ったこと……わたしたちは全て経験ずみなのよ？　今さらすぎない？」

「うっ」

護堂は言葉に詰まった。その間にエリカは数えあげる。

「いっしょにお酒も飲んだし、ひとつ屋根の下で夜も明かしたわ。朝まで同じベッドにいたことも一回だけじゃない。それどころかいっしょにお風呂に入って、たがいの全てをさらけ出しもした……」

しかも、さらにエリカは付け足した。

「大体、わたしたちってイタリアでは合法的にお酒を飲める歳よ」

イタリアと日本では飲酒の条件がちがう。この国では一六歳以上から飲酒可能。

ふたりともすでに誕生日を迎えており、条件をクリアしていた。

反論の根拠を失って護堂が硬直すると、エリカは『仕方のない人

ね』と言いたげに肩をすくめ、苦笑を口もとに浮かべた。

「護堂の行きとどかないところをあげつらうのは得えがたい楽しみだけど、度が過ぎると野や暮ぼになるわね。この辺で勘かん弁べんしてあげる。乗り気でないのに愛の営いとなみを強要するのもね」

「そ、そうか」

「ええ。あなたのことだから口ではイヤだと言ってても、気持ちが十分に盛りあがったら、わたしとなるようになるのを踏みとどまれない気もするし」

「…………」

「エリカ・ブランデッリが忍耐強い女なのを感謝して欲しいわ、本当に」

　護堂は悄しよう然ぜんと沈黙した。言いかえすための材料を持たない自分が悲しい。

「でも、我慢するだけじゃ面白くないし、わたしらしくないのもたしかね」

　金髪の美少女はいきなり人の悪い笑みを浮かべた。

「ねえ護堂。ホテルで眠りたいなら、わたしにおやすみのキスをして頂ちよう戴だい」

「お、おやすみの何だって？」

「キス。ほっぺたでもいいし、もちろん唇くちびるでもかまわないわ。それができたら、あなたをホテルまで案内してあげる」

　言われて気づいた。護堂はホテルの場所を知らないのだ。エリカの案内がなければ、たどりつけない。だが。

「べ、べつにいいさ。どうしてもホテルに泊まる必要はないんだし」

　護堂はすぐに要請を蹴けった。

「どこか風をさえぎれる場所でも見つけて、野宿する手だってあ

る。このまま一晩、歩きまわったっていい。俺はもう軽々しくキスとかしない！」

　これが日本なら、二四時間営業のファミレスやサウナ、漫画喫茶という避難場所もあるだろう。しかし、古都ローマにその類の店はない。

　だが、その程度の障害でひるんでたまるものか。護堂は決意を語った。

「やっぱり、すぐにそういうことをするのはよくないと思うんだ！」

「と、何度もわたしと熱い接せつ吻ぷんを交わした口でいうわけね。どうせ、ほかに活路がない状況になったら、しばらく迷った末にわたしとのキスを選ぶでしょうに」

　エリカは軽く肩をすくめた。

「護堂がモラリストぶるのって、喫きつ煙えん常習者の禁煙宣言と同じくらい無駄な行為よ。『できたらいいな』と思うことを宣言して自じ戒かいにするけど、必ず破は綻たんするあたり」

「う……」

「でも、あなたがそういうつもりなら、べつにいいわ。わたしもつきあうから」

　金髪の美少女は、ふたたび悪魔の微笑を口もとにひらめかせた。

「ふたりでローマの街を夜歩きしましょう。たぶんあなたは途中で疲れて、眠ってしまうんじゃないかしら？　そしたらホテルの部屋に運んで、やさしく介かい抱ほうしてあげる。あとは夜明けまで甘い時間をすごしましょう？　ふふっ、愉しみね」

「そりゃ疲れてるけど、一晩徹夜するくらい何とかなるぞ」

　エリカが既き定ていの未来のごとく語る内容に、護堂は異議を唱えた。

「知ってるだろうけど、これでも体力はある方だし」

「ええ。草薙護堂のとてつもないしぶとさはよく知っているわ。結構うかつで、隙すきの多い人であることも。だから一晩あれば、何とかできると思うのよね」

「なんとか？」

「どうにかして薬を飲ませて、しばらく昏こん睡すい状態にさせるとか。隙を見て拘束するのもいけそうだし、あとは車を呼んでホテルまで運べば……ね♪」

「『ね♪』じゃないっ。それは立派な人身拉ら致ちだ！」

　可か愛わいらしく計画を語るエリカに、護堂はつっこんだ。

「わたしだって、そこまでしたくないわ。でも、護堂がささやかなおねだりを無視しようとするから、仕方ないの。恋する乙女は思いつめたら何をするかわからないんだから、気をつけてくれなくちゃ」

　自称恋する乙女は、冗談っぽい語り口で物騒なことを言った。

「大体、おやすみのキスなんて子供でもやるスキンシップよ。そのくらい、べつにいいじゃない？　あなたにはもうすこし大きな器うつわを見せて欲しいところだわ」

「う……」

　護堂は相手の言い分を『もっともだ』と思ってしまった。

　なので言葉に詰まる。それを見て、エリカはくすりと微笑んだ。

「じゃあ、あらためてお願いするわね。やり方はまかせるから、ホテルへ着くまでにおやすみのあいさつをして頂戴。もちろん唇へのキスが第一希望だけど、頬ほおでもかまわないわよ」

「～～～～～っ」

　おやすみのキス。軽く頬にちゅっとやれば十分な行為。

　しかし、うながされて護堂は煩はん悶もんした。いつもの長く濃厚な『儀式』とは全然ちがう。軽い気持ちでやればいいのかもしれない。だが——

「こ、心の準備をするから、すこし時間をくれ！」

　往おう生じよう際ぎわの悪いことを言ってしまった。

　しんと静まりかえったローマ市街。

　深夜の午前二時すぎ。二四時間営業の店がそこら中にある日本とちがって、開いてる店はまったくない。しかも、街灯の明かりも日本よりすくなかった。

　この暗い欧州の夜道を、ふたりは歩いていく。

　先に立ってホテルまでの道案内をするのはエリカ。すこし遅れて護堂も続く。本当なら車を使うべき場面だろう。だが、『心の準備をする時間稼かせぎ』のため、非効率的な移動手段を選ぶことになったのだ。

「あ、でもアリアンナに車で来てもらって、みんなでどこかへ行くのもいいわね。その間、護堂には心の整理をしてもらうの」

「アンナさんに悪いから、絶対にやめようぜ……」

　エリカの助手兼メイド、アリアンナ・アリアルディ嬢。通称アンナ。

　彼女の名を女主人が出したので、護堂は言った。ふつうなら就寝しているはずの時間だ。今から呼び出すなど、あまりに申し訳ない。

「大丈夫よ。わたしが帰るまでホテルで待機するよう指示してあるから。アリアンナに深夜の高速道路を飛ばしてもらうのって、かなり面白い体験になるわよ。すこし前に彼女の運転で夜の海を見にいったの、リリィ——女友達といっしょに」

「あんな運転する人を高速道路に出させたのかよ⁉」

　アリアンナ嬢の運転技術がどれほど危険か、昼間すでに体験ずみだ。

　エリカは『あれで不思議とアリアンナは事故を起こさない』みた

いに言っていたが、次回も絶対にそうだとはまったく期待できない。

　とんでもないことをしやがると、護堂はあきれた。

「なんとなく未知の体験ができそうに思えたのよね。みごとに予想的中。たっぷりと手に汗にぎって、背筋の凍る思いを味わえたわ。スペクタクルって、ああいう体験のことをいうのでしょうね……」

「当たり前だっ。安全装置のないジェットコースターと似たような危険度だぞ！」

　結局、ドライブの案はお蔵入りとなり、ふたりは夜歩きを続けた。

　その間、愚ぐにもつかないことを雑談するときもあれば、何も言わないまま黙々と足だけ動かすときもあった。

　エリカとそういう時間を共有できていることが、護堂は不思議だった。

　いっしょにいることが苦にならない。何か話をしなければと、気を遣つかうこともない。逆に気を遣われているなと、申し訳なさを感じることもない。

　まるで家族か、親しい男の友達とつるんでいるような感覚。

　だが、護堂にとってエリカはどこまでも異性である。自分が知るかぎりでは、最も華麗で魅力的な女の子。ことあるごとにその美少女ぶりを意識して、ドキドキしてしまう。

　なのに、不思議と気楽につきあえる。

　女子に慣れていない護堂としては、これは異例なことであった。

　しかし、そうなのだ。エリカの方から戯たわむれるようにキスを迫ってこないかぎり、護堂にとって彼女は誰よりも気やすくつきあえる女の子なのだ。悪戯いたずら好きで人をもてあそんでばかりという、悪魔のような女なのに……。

「なんだ、あの店？」

　歩いている途中、煌こう々こうと明かりのついた店を護堂は見つけた。

　赤を基調としたカラーリングでにぎにぎしく装飾された食べ物屋——一目で中華料理店とわかる店構えだった。

　時刻は深夜二時。ここはふつうの市街地で、繁華街などではない。

　だというのに、こんなに遅くまで営業しているとは。

「すごい仕事熱心だな。イタリアの店なのに」

　思わず護堂はつぶやいた。

　日本人からすれば、イタリアをふくめた南なん欧おうの『日曜日は街中の店が休業』『二四時間営業、何それ？』『夏休みはたっぷり一か月』という風景はかなり異質だ。なかには『昼休みには帰宅して家族とランチ、そのあとシエスタでぐっすり』な会社員もいると聞くから尚なお更さらだ。

　この日本的感覚に意見したのは、もちろんイタリア人の少女である。

「護堂。言わせてもらうけど、勤勉さは必ずしも美徳じゃないわよ」

　人差し指を振り振り、エリカはえらそうに講釈した。

「大切なのは労働の量じゃなくて質。あとは効率と結果よ。二四時間のうち二〇時間遊んでいても、十分な実績を出していたら、それでいいじゃない」

「いや、日頃の行いって大切だと思うぞ……」

　上から目線での貴族的労働論に、護堂は異を唱えた。

「大体さ。暇ひまを持てあまして遊んでるより、何か仕事してた方が気楽そうだ」

「うわさに聞くジャパニーズビジネスマンの心得ね。どれだけ余よ暇かを有意義かつ優雅にすごすかで、その人の器量がわかるという

のに……」

　まじめな日本男児と奔ほん放ぽうなイタリア美少女の主張は平行線をたどるかに見えたが。

　中華料理屋から、ゴマ油のいい匂においが漂ってきた。

「……入るか？」

「……あなたにしては名案だわ」

　例の決闘で体を動かし、この夜歩き。小腹がすいてきたところだった。

　あっさりと日にち伊い同盟を締結して、ふたりは店内に入る。

　ちょうど入り口のところにいた中国系とおぼしき店員に、何時までやっているのかと護堂は訊きいてみた。答えは午前四時半。

「って、明け方までか!?」

　二四時間営業ではないが、ほぼそれに近い。まるで日本のラーメン専門店だ。

　やはり永遠の都ローマほどの大都市、この時間での需要もあるのかもしれない。感心する護堂の前をウェイターが通りすぎた。

　彼が運んでいたのは大皿に盛った中華饅まん頭じゆう。

　これを見てエリカがひらめいたらしく、質問に答えてくれた店員へ交渉をはじめる。

　そして一〇分後——。店を出て、ふたたび夜歩きをはじめたふたり。護堂の手には大きな紙袋がある。なかに収まっているのは、数個の中華饅頭だった。

　蒸し器から出したばかりで熱々、袋からは熱気が洩もれてくる。

「護堂。ひとつ取って」

「ほら」

　紙袋から中華饅頭をひとつ取り出し、エリカに手渡す。

　このとき指と指がちょっと接触してしまい、護堂は妙に気恥ずかしくなった。エリカがくすりと微笑みかけてくるから尚更だ。

　まあ、今さらこれくらいでと、思わないでもないのだが……。

　尚、この夜食はさっきエリカが交渉した成果だった。

　テイクアウトの制度などない店に頼みこんで、これだけ買って外に出たのである。たしかにホテルへ帰る途中。腰を据えて食べるより、この方がいい。

　中華饅頭は、いわゆる豚まんだった。

　ほおばれば口のなかにジューシーな肉にく汁じゆうがあふれ、美う味まい。これを夜食にパクつきながら、ふたりはのんびり歩きつづける。

　護堂は心のなかで、しみじみと思った。

　まさか遥はるか異国の地ローマで、こんな深夜に、金髪の少女といっしょにのんびり歩きながら、豚まんをかじる日がやってくるとは……。

　数か月前の自分にこんな未来を教えたら、まちがいなく爆笑されるだろう。

　なんとなくエリカの横顔を見つめてみた。すると、視線に気づいたエリカがくすりと微笑んで視線を返してくる。それだけ。特別、何か話したりもしない。

　だが、これで十分だった。

　エリカとの間で育ちつつある『絆きずな』らしきものを実感できた。そして、もうすこし時間が経たったら何と言うべきか、護堂はついに思い定めて『心の準備』を終わらせた。

　結局、ふたりで五〇分ほど歩いて、十数階建てのホテルに到着した。

　エントランスに立つドアマンの方をちらりと見てから、エリカは

訊たずねてきた。

「それで護堂。心の準備はもうできた？」

「ああ。なんとか」

「よかったわ。じゃあ、いよいよ『おやすみ』をしてくれるのね？」

　ふふっと悪戯っぽく笑う金髪の少女。だが、護堂は言った。

「それなんだけど……やっぱり無理だ」

「無理？」

　軽く目をみはるエリカへ、さらに続けて言う。

「ああ。おまえにキスしなきゃいけないのに、気軽にするとか絶対に無理だよ」

　自分の思うところを護堂は無防備に語った。

「なんていうか、日本人の俺にはそこまで開き直れないというか……。もしかしたら、おまえ以外の相手なら大丈夫なのかもしれないけど、エリカにはとてもそんな真ま似ねできないっていうかさ……」

　エリカと超至近距離で接するときのドキドキ。

　それを思い出して、珍しくはっきりしない物言いをした直後。

「そこは国民性じゃなくて、草薙護堂という男の子個人の問題でしょう。もう、本当にこういうところだけ思い切りが悪いのね！」

　エリカはあきれた感じで切り捨て、語気強く告げる。

「あいさつのキス以上に激しい行為をしてきた同士なのに、そんなつまらないことを気にするなんて、ありえないわ。大体ね。あなた、ここに歩いてくるまでの間、わたしの手さえにぎらなかったじゃない？　それも失礼な話よ」

「手!?」

「ええ。せっかくふたりきりでローマの街を歩いていたのに。手をつないだり抱き合ったりして、暫しばしの逢おう瀬せを愉しんでもよかったはずよ」

「そ、そういうのは恋人同士ですることだろ！」

「忘れたの？　わたしはあなたの愛人。この世で最もあなたと近しい女よ」

　あせる護堂に、エリカは誇らしげに言った。

「そうでなかったとしても、女の方がいいってアピールしてたんだから何も問題ないわ」

「う、ウソつくなよ。そんなこと、一言だって言ってなかったし」

「言葉ではね。でも、わたしは全身であなたの手を受けいれるつもりだったし、態度でも示していたわ。気づいてなかったようだけど」

「え……そうだったか？」

　エリカのやつ、そんな意味ありげな態度をしていただろうか？

　愕然とする護堂の前で、情熱的なラテンの美少女はため息をこぼした。

「そうだったの。なのに護堂ったらボーッと歩いてるだけで……。ほんと、あなたって気の利きかない人よね。おまけに野暮で朴ぼく念ねん仁じんで。このイタリアじゃ、小学生の男の子だって護堂より上う手まく女の子を口説くわよ」

「い、いや。そこは俺、日本人だし」

「そういう言いわけも男らしくないわ。やめなさい」

　ぴしゃりと突き放してから、エリカは唐突に「でも」と微笑んだ。

「わたしを特別な相手だと認めていたから、この辺で勘弁してあげる。わたしの寛大さに感謝しないと、そのうち本当に罰が当たるかもしれないわね」

「え!?」

「ふふっ、気づいてなかった？　さっきポロッと口に出していたわよ」

　そんなバカな。いや、でも、もしかして。自分は無意識のうちにまずいことを言ったのだろうか？　動揺する護堂を連れてエリカはホテルに入り、受付で鍵かぎをふたつ受け取る。

　そして鍵の片方を護堂に渡して、エリカは言った。

「じゃあ、今夜はもうおとなしく休みましょうか。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

　うなずきながら、護堂はあくびを噛み殺した。

　部屋でシャワーを浴びたら、すぐに寝よう。とにかく疲れた。さっき決めたように今夜の反省は明日の朝に——。などと考えていたら。

　エリカに唇を奪われた。

　ちゅっと軽いタッチのキス。あいさつ代わりのスキンシップ……と思いきや。

　すぐ二度目のキスに襲われた。

　エリカの唇が護堂の唇をふさぎ、なまめかしくうごめく。

　それから舌を差し入れられた。エリカのやさしく丹念な舌使いが護堂の舌を愛情深く舐なめ取る……。そのまま数十秒。

　ふぅ。唇を放したエリカが小さく息を吐き出した。

「お、おまえ、いきなり何を……」

「おやすみのキス。あなたがしてくれないから、わたしの方からしたの」

　愕然と問う護堂に、エリカは可愛く微笑みかける。

　ホテルのロビーでなんということを！　いや、今は深夜。まわりに人はいない。誰かに見られるのは避けられたか——。

　きょろきょろ周囲を見まわして、護堂は気づいた。

　フロントの受付にいた若いホテルスタッフがこちらに注目していた。

　宿泊客のプライバシーを尊重するプロ意識で『見て見ぬふり』をしてくれるかと期待したら、そんなこともなかった。

　彼は護堂にうなずきかけ、『見たよ』と言いたげにウインク＆スマイル。

　また、そんなホテルスタッフにエリカは軽く手を振って応こたえる。こちらもごく平然としていて、小悪魔風にスマイル。

　だが、只ただひとりの大和やまと民族にそんな余裕はない。

　ラテンの血を持たない草薙護堂、あわててエレベーターに駆け出した。早く自分の部屋に入ってシャワーを浴び、この恥ずかしさを洗い流さなくては！

「今度こそおやすみなさい、護堂。また明日の朝にね♪」

　追い打ちをかけるようなエリカの声。

　それを背中で聞きながら、護堂はエレベーターに逃げこむのであった。

第３話　三人そろえば……？

　その日は土曜日で、ちょうど正午頃だった。もちろん学校は休みである。

　護ご堂どうは都心のまっただなかにある七なな雄お神社を訪ねていた。

「アテナと草くさ薙なぎさんの戦い……あれからもう一週間も経たつんですね……」

　境けい内だいを掃き清めながら、ぽつりと祐ゆ理りが言った。

　身にまとうのは白びゃく衣えに袴はかまの巫み女こ装しよう束ぞく。手には竹ぼうき。万ま里り谷や祐理は七雄神社で奉職する媛ひめ巫み女こ——日本を霊的に守護する巫女集団のひとりであった。

「ああ。早いもんだなあ」

　しみじみと護堂は答えた。こちらも竹ぼうきで境内を掃きながら。

　今日はここで祐理、そしてもうひとりと落ち合う約束をしていた。神社に着いたとき、媛巫女はちょうど掃除中だった。

　終わるのをボーッと待つのも退屈なので、護堂は手伝いを申し出たのである。

　結果、ふたりそろっての清掃作業であった。

　季節は初夏。暑くもなければ寒くもない絶妙の気温。

　そして、鎮ちん守じゅの森にかこまれた神社の境内。都心とは思えないほど静かで、風と空気もさわやかだった。ひどくすがすがしい。

　しかし、ふたりの会話はあまり明るくはなかった。

「あのときの被害総額……概がい算さんのようなものを甘あま粕かすさんがおっしゃっていました」

「え!?」

　できれば聞きたくない。しかし、聞かないままでいるのは許されない情報。

　護堂は覚悟を決めた。約束の時間より早めに七雄神社まで来たのは、まさにそのあたりを祐理に訊たずねるつもりだったからだ。あの戦いの影響はどのような具合だったのかと……。

「一体どれくらいなんだ……？」

「は、はい。甘粕さんはいつもの感じでこのように——」

　正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのエージェントいわく。

『もう細かいことを気にしても仕方ないですから、ざっと数百億の被害でいいんじゃないですかね。いま適当に言いましたけど、どうせそんなものですよ！』

　彼は不ふ真ま面じ目めというより達たつ観かんした面おも持もちだったとか。

　話を聞いて、護堂はうなだれた。その額の何割くらいが俺のせいなのだろうと。

「なんていうか本当に申し訳ない……」

「草薙さん。私に謝罪されても意味はありません……」

「だよなあ……。悪い」

　困ったように祐理から言われて、護堂はさらに落ちこんだ。

　だが、すぐ思いを新たにする。いや。今、落ちこんでいいのはあの騒動で迷惑をこうむった人々だけだ。元凶のひとりである自分がすべきは反省と自じ戒かいだろう。

　二度とこんなことを起こさないよう、かたく心に誓うのだ！

　護堂はキッと顔を上げ、力強く祐理に言った。

「万里谷、頼みがある。いつもの調子で俺を叱しかりとばしたり、俺のダメなところを言ったりしてくれないか！」

「えっ？」

「頼む。俺がまたあやまちを犯おかさないために、心に残るようなやつを思い切り！」

「そ、そんな……急に言われましても……」

　ひかえめな大和やまと撫なでし子こはおろおろと言葉を濁にごし、とまどった。

「私が草薙さんに申し上げたいことは、先週からひととおり伝えていますし、今さらそれを繰りかえしてもと、思うのですが」

　祐理に困り顔で意見された。そうなのだ。

　彼女はただのおしとやかなお嬢さまではない。媛巫女──『媛』の称号にふさわしい、高貴な責任感の持ち主だった。不ふ手て際ぎわばかりが目立つ『魔王』草薙護堂に対しても、勇気を持って諫かん言げんしてくれる貴重な友人であった。

　アテナと戦ったときの問題行動についても、すでにお小言をいくつも頂ちよう戴だいしていた。

　護堂にはそれが逆にありがたい。

　何の因いん果がか『神様を殺した男』になった結果、草薙護堂を分ぶん不ふ相そう応おうに持ちあげ、王様あつかいする人間がやけに増えた。思い上がって、バカげた勘かんちがいをしないためにも、祐理にはいつでも苦言やお説教を口にして欲しいと思う。

　だから、今朝も護堂はまっすぐ祐理の目を見つめ、重ねて頼ん

だ。

「喉のど元もとすぎたら、とか言うだろ？　俺がしちゃいけないのはそういうことなんだと思う。何度繰りかえされても言われすぎってことはないはずだからさ！」

「で、ですが草薙さん。あなたのお振る舞いには、明らかに『喉元すぎれば熱さ忘れる』の傾向が見られます」

　おずおずと祐理に言われて、護堂は「う！」とうめいた。

「たしかに草薙さんはまじめで誠実な方だとは思います。でも、ご自分の行いを深く反省される割に、何度も同じあやまちを繰りかえされて……。あ、もしかして——」

　不意に祐理が何かに気づいた表情をした。

　護堂は緊張した。彼女は千せん里り眼がんのごとき霊れい視しの力を持つ巫女。なんとなく感じたことが、誰にもわからなかった真実を解きあかすことも多いという。

　そんな少女がいきなりハッとしたのだ。やはり何か視みえたのだろうか？

「も、もしかして……何だろう？」

「なんとなく思ったのですが、草薙さんは反省が足りないとかではなくて」

「なくて？」

「その場の勢いとか感情に身をゆだねすぎなのではと……。たぶん頭ではご自分のまずいところをおわかりなのでしょうが、心に火がつくとそれが全て棚たな上あげになって、激情のおもむくまま行きあたりばったりに行動されてしまうとか——」

「！」

　今までの人生を振りかえると、結構思いあたる節ふしがある。

　護堂は顔がこわばるのを自覚した。それを見て、祐理があわてて言う。

「な、なんとなく感じたことですので、当たっているかはわかりませんがっ」

「い……いや。すっごく図星を指された気分だ。たしかに、俺にはそういう部分があるのかもしれない……」

　暗あん澹たんたる口調で護堂はつぶやいた。

「妹の静しず花かがよく言うんだけど、うちの一族の男は代々そんな感じだし……」

「そうなのですか？」

　目を丸くした祐理に、護堂はうなずいた。

「ああ。火がついたら止まらない〝ろくでなし〟ぞろいというか。出来心でブラジル移民になって、アマゾン川の奥地で失しつ踪そうしたり。戦後の闇やみ市いちで大金持ちになった直後に墓ぼ穴けつを掘って一いち文もん無しになったり。出しゅつ家けするつもりで山寺に入門したはずがいつのまにか上シヤン海ハイに流れ着いていたり。息を吸うように女の人と仲よくなってる女たらしだったり……」

「まあ……」

　人聞きが悪いのでめったに語らない草薙一族の不品行を明かすと、祐理が驚いた。

「なんかそういう面子メンツがそろってるんだよな……。無駄に生命力がありあまっていて、そのせいでいろんな迷惑をまわりにかける、みたいな」

「言われてみると、草薙さんにも当てはまるかもしれませんね……」

「ぐっ！」

　正直に思うところを語ったのであろう感想に、護堂は心を抉えぐられた。

　これがエリカあたりの発言なら『俺より傍はた迷めい惑わくなやつがそういうことを言うな！』で軽くあしらえる。しかし、今回の

発言者は祐理である。

　言葉を偽いつわることも飾ることもないお嬢さまの素そ朴ぼくな感想は、したたかに痛かった。

　どんよりと落ちこむ護堂を見て、祐理は同情のまなざしになった。

「く、草薙さん。深く反省されているのはわかりましたから、その辺にされてはいかがでしょう？　こう言ってはなんですが、終わってしまったことですし……」

「い、いや。まだだ。俺はいいかげん、こういう悪あく循じゆん環かんから卒業しなきゃいけないんだ」

　護堂は歯を食いしばって、決然と顔を上げた。

「万里谷。もっときつく言ってくれ。前みたいに怖いくらいの迫力で！」

「そ、そう言われましても……あ」

　困り顔でうつむいた祐理がハッと顔を上げたので、護堂は目を輝かせた。

「何かあるのか!?」

「はい。大切なことを忘れていました」

　祐理の口調が凜りんとしたものにあらたまっていた。ついに本調子を取りもどしたらしい。

　護堂は背筋を正して、媛からの叱しつ責せきを待つ——どころか、自みずから催さい促そくする。

「わかった。何でも言ってくれ。俺は全てを受けいれる！」

「では遠慮なく。エリカさんのことについてですが」

「え、そっち!?」

　予想外の方向から攻撃されて、護堂はぎょっとした。

「い、今はアテナとの戦いでまずかったところを反省すべきじゃないかな？　エリカのことは本筋じゃないっていうかさ」

「全てを受けいれるとおっしゃったばかりですよ、草薙さん」

　怜れい悧りなまなざしで護堂を見み据すえて、祐理が言う。

　その表情・視線・物言いの全てに高貴な姫君の威いと気品が満ちていた。

「それとも心にやましいところがあって、女性問題や愛人関係についての意見は虚きよ心しんに聞くことができないとでも？」

「いや、そもそも俺には問題になる女性も愛人もいないしっ！」

「でしたら、どうして避けようとされるのですか⁉」

　というわけで――。

　梅つ雨ゆがはじまる前のよく晴れた休日。護堂は『この一週間、学校内で愛人を称する女性からの身体的接触を毅き然ぜんと退しりぞけることができていない問題』を凛りん然ぜんといさめる祐理の言葉に鞭むち打うたれながら、罪滅ぼしのように神社の境内を掃除するのであった。

　結局、掃除とお説教は三〇分ほどで完了した。

「あ、ありがとう万里谷……。いろいろと心にしみたよ……」

「い、いえ。私の方こそ失礼なことをぶしつけに言ってしまい、申し訳ありません」

　疲れた口調で護堂が礼を言うと、祐理は恐縮してしまった。

「それにお礼でしたら、私の方こそ。どうもありがとうございます」

「え？　俺、何かしたっけ？」

「お掃除を手伝ってくださったじゃありませんか」

祐理に言われて、護堂はきょとんとした。

礼を言われるほどのことではないと思っていたからだ。そんな護堂を見て、祐理がかすかに微ほほ笑えむ。さっきまでの迫力はすでになく、小さな桜の花がほころぶような笑みと可か憐れんさだ。

護堂のうかつさを逆に微笑ましく思ってくれたらしい。

そのやわらかな表情を護堂はまぶしく思い、照れくさくなった。

心こころ映ばえのやさしい少女なのだ。たしかに説教くさいし世間知らず。草薙護堂のような悪あく行ぎよう三ざん昧まいの輩やからには手厳しいお嬢さま。だが、それは責任感と持って生まれた高貴さゆえ。

まだ、つきあいは短い。

だがアテナとの戦いを通して、護堂は十分にそれを実感していた。

だからだろうか。祐理の厳しさとやさしさ、どちらも不思議なほど心にしみいる。

「……ところでさ。ちょっと不思議なんだけど」

祐理といっしょに掃除道具を作さ務む所しよまで運びながら、護堂は言った。

「ふつう神社って、巫女さん以外にも神かん主ぬしさんとかいるよな？　でも俺、ここでは万里谷としか会ったことがないんだ。ときどき誰かが通りがかるのをチラッとは見たりするけど」

七雄神社を訪ねること、すでに数回。ふと気づいた疑問点であった。

この問いを受けて、祐理は気まずそうに口ごもった。

「あ……それは」

「訊きいちゃまずいことなら詮せん索さくしないけど」

「い、いえ。そんなことはありません。すこし言いづらいだけ

で……。実はですね、私以外の方々は草薙さんがいらっしゃると遠慮して隠れてしまうんです」

「へ？」

「なんといっても神を殺あやめた魔王の君きみ……カンピオーネである方の御ご来らい臨りんですから。みなさん畏おそれ多いとおっしゃって」

「そうだったのか……」

　護堂はまた軽く落ちこんだ。畏れ多いだけでなく『怖い』『さわらぬ何とかに祟たたりなし』なんて理由もありそうな気がしていたのだ。

「あ！　私はもちろん、そんなことはありませんっ」

　あわてて祐理がフォローしてくれた。

「お会いする前はいろいろ想像して、恐ろしい方だと思いこんでいましたが。はじめてお会いしたとき、なぜかそうではないとすぐにわかりましたし」

　祐理との初はつ対たい面めんを護堂は思い出した。

　はじめはやたらと畏かしこまり、丁てい寧ねいすぎる態度だった。だが、ある瞬間から急に遠慮のない厳しさを示すようになったのだ。もしかすると、祐理は霊視の力で護堂の人間性をわずかな時間で直観したのかもしれない。

　そして道具の片づけも終わり、護堂は携帯電話の時計を見た。

　まだ午後一時前。護堂と祐理、そしてもうひとりの三人で今日はこれから出かける予定だった。待ち合わせの時間は午後二時なので、まだまだ余裕はあるのだが。

　護堂はふと不安に思った。

「エリカのやつ、ちゃんと起きてるだろうな？」

「もうお昼をすぎていますし、ふつうは大丈夫だと思いますよ？」

　祐理が苦笑いする。しかし、護堂はかぶりを振った。

「いや……あいつ、めちゃくちゃ朝に弱いんだ。しかも聞いた話だと、休みの日は昼すぎまで寝てすごすことも珍しくないっていうし」

　エリカの助手兼専属メイドから聞いた情報なので、まちがいないだろう。護堂と祐理が待ち合わせている相手はエリカ・ブランデッリなのだ。

　こうなった原因は数日前、エリカが発した要請にある。

「ねえ護堂。日本は初めてのわたしをどこかにエスコートしてくれる気き遣づかい、あなたに期待しても大丈夫よね？」

　これを聞いて、護堂は驚いた。

「おまえ、それだけ日本語ペラペラなのに？」

「魔術師の基礎教養として学んだだけよ。この世のあらゆる言語に親しむことは、ヘルメスの弟子にとって必ひつ須す事項ですもの。中国本土には何度か行ったし、香港ホンコンには長期滞在したこともあるけど、日本は初めてね」

　もちろん、ふたつ返事で引き受けたのだが。

　彼女とふたりきりになれば、情熱的なアプローチをされるのは目に見えている。

　できれば三人目の同行者が欲しかった。それが祐理ならエリカも鷹おう揚ように受けいれるのではないか。何せ、エリカ自身が護堂に『万里谷祐理とはなかよくしておきなさい』などと言ったぐらいだから……。

　というわけでエリカ・祐理の双方に話を持ちかけた結果、今日の約束になった。

「ま、いいわよ。今回はふたりきりのデートから逃げた不ふ甲が斐いなさより、両手に花を実じつ践せんする甲斐性しようがあなたにあったことを尊重してあげる」

「おふたりだけで観光というのも、たしかに心配ですね。東京にまた予期せぬ危険が降りかかるかもしれませんし、草薙さんがエリカさんの誘惑に屈してしまうのも不安ですし……」

　片方からはあきれ半分からかい半分、もう片方からは地元の平穏＆草薙護堂の素行不良を憂ゆう慮りよするコメントが発信されたりもしたが……。

　まだ約束の時間には間がある。

　しかし、不安に思った護堂は携帯電話で連絡を取ってみた。エリカにではない。ブランデッリ家を管理する女性の携帯へ、である。

『あ、護堂さんですか？』

　アリアンナ嬢の声が応こたえてくれた。エリカの助手兼専属メイドをつとめる女性だ。

「すいません。念のための確認なんですが、エリカのやつ起きてますか？」

『申し訳ありません。まだお目覚めになっていないんです。昨日の晩、かなり遅くまで外出されていて、寝たのは明け方頃だったみたいで』

「……ったく。約束の前日に何をやってんだか、あいつは」

　不安が的中したので、護堂はため息をこぼした。

　しかし、アンナことアリアンナの声が朗ほがらかに応えてくれた。

『ふふっ。ご安心ください。今日の待ち合わせは二時でしたよね？　大丈夫です。エリカさまがこのまま起きられなくても、寝たまま車に乗せて、そちらへお送りしますっ。時間までにはバッチリお届けしますので、待っていてくださいね』

　エリカを起こすのはなかなかにむずかしい。

　起き床しよう前後はいつもの才気もなりをひそめる。代わりにわ

がままな幼児っぽいことを言うようになり、起きるのをこばむのだ。

……ちなみに、護堂がなぜそれを知っているのかというと。

学校に行く前、毎朝迎えにいくからである。アリアンナではわがままな女主人を起こせないため、エリカの遅刻を阻そ止しすべくそうなった。

今の『寝たままでも車で送る』発言は、それを踏まえたものだろうが。

「それにはおよびませんっ。今からそっちへ行って、俺がエリカを起こしますから！」

護堂は叫ぶように宣言した。

電話の相手はとびきり明朗な好感の持てる女性。しかし、できるかぎり公道を走らせたくないドライビング技術の持ち主でもある。それを知るゆえの代案であった。

電話を切り、ふと顔を上げる。祐理と目が合った。

「やっぱりエリカの方がもたついてるみたいだから、俺、迎えにいってくるよ」

「でしたら、私もいっしょに参ります」

「え？」

「どうせ、あとでいっしょに出かけるのですから、そうした方が時間も無駄にならなくていいと思いますよ？」

祐理の微笑みながらの申し出。護堂はありがたく受けることにした。

本当は芝しば公こう園えんの七雄神社から東京タワーや明めい治じ神じん宮ぐうあたりへ行くつもりだったが。

こうなったら、行き先も変える方が賢明だ。エリカのマンションは文ぶん京きよう区くの本ほん郷ごう。そこから近い観光地へ行くことにして、護堂は祐理ともどもエリカ宅に向かった。

これが墓穴を掘ることにつながるともつゆ知らず……。

「まさか、草薙さんが毎朝エリカさんを起こしに行かれていたなんて……」

祐理がため息と共に言うのを、護堂はすぐ隣で恐縮しながら拝はい聴ちようしていた。

いっしょに七雄神社を出てから二時間が経過している。

ふたりとエリカが今いるのは台たい東とう区く浅あさ草くさは浅せん草そう寺じの仲なか見み世せせだった。小さな露ろ店てんが数十以上も軒をつらね、おみやげや小物、ちょっとした食べ物を売っている。日本は初めてという外国人を案内するに当たって、文京区から近いベタな観光地を選んだ結果である。

仲見世をならんで歩く護堂と祐理。

休日の午後なので人が多い。混雑していた。

そのなかをエリカは軽やかな足取りであちこち見てまわり、ベタすぎる日本情じよう緒ちよを楽しんでいるようだった。露店で売っている新しん撰せん組ぐみの羽織を着てみたり、おもちゃの日本刀を抜いてみたり、芸者さんのかつらをかぶってみたり。

そのうしろについていく日本人二名。

祐理はすこし嘆なげかわしげ、護堂は恐縮気味であった。

「エリカのやつ、ほっとくといつまでも寝てるから、遅刻させないようにと思ってさ」

「そこは草薙さんらしいと言いますか、親切な気遣いだと私も思います。でも呼ばれたからといって、女性の寝室に躊ちゆう躇ちよなく入るのはいかがなものでしょう？　しかも、エリカさんはああいう格好をされていたのですから……」

ふたりでマンションを訪ねたとき、部屋の主あるじは午後のまどろみを優雅に楽しんでいた。

　アリアンナが早速ベッドへ行って起こそうとしたところ、

『ダメ。護堂が耳元でやさしく愛をささやいてくれなきゃ、ずっとこのままでいる～』

　なんてエリカはムニャムニャつぶやいたらしい。

　そこで護堂は『人が待ってるのになんて言いぐさだ』と寝室へ押し入り、祐理は『く、草薙さん、ここはエリカさんの——女性の部屋ですよ！』と、あわててついてきた。

　エリカはうすい羽は毛ね布ぶ団とんにくるまって、幸せそうに眠りこんでいた。

　そして、護堂は彼女への憤いきどおりを胸に布団を引っぺがし、知ったのである。寝るときは薄着を好むエリカが昨晩はパジャマ代わりのＴシャツを脱ぎちらかし、ショーツ一枚で就寝していたことを——。

「本当に……草薙さんは〝ついうっかり〟がひどすぎます！」

「あ、あそこまで何も着てなかったのは、今日がはじめてだったんだよ！」


祭

「つまり、エリカさんが毎晩すごい薄着でいらっしゃることはご存じだったのですよね？　でしたら、草薙さんのあの振る舞いは軽率もいいところです」

「そ、それについては返す言葉もない」

　叱責を受けて護堂は悄しよう然ぜんとした。こうするのは今日何度目だろう？

　すると祐理も同じことを思ったのか、小さくため息をついてから表情を和やわらげた。

「そろそろやめておきましょうか。せっかく遊びに来たわけですし」

「そ、そうか。申し訳ないっ」

「ふふっ。今日のお説教はもうおしまい？」

　タイミングよくエリカが戻ってきた。こちらをさりげなく観察していたらしい。

「じゃあ、そろそろ只ただたわいなく楽しむだけの時間にしましょうか。エリカ・ブランデッリの日本駐在と、わたしたち三人の奇くしき縁を記念して、ね」

「縁、ですか？」

「ええ、そうよ祐理。わたしたち本当なら、こんなふうに巡り会うこともなかった組み合わせのはずよ。出会いを記念するくらいの真ま似ねはしてもいいと思わない？」

　きょとんとする祐理に、エリカは朗らかに言った。

　いつもの華麗で明めい晰せきな話しぶり。起床直後の子供っぽさはもう微み塵じんもない。エリカはくすりと微笑んで、貴婦人の手を取る騎士のように祐理の手を取った。

「向こうに面白いお店があったから、祐理に合いそうな衣装を見つくろってあげるわ」

　と、外国人観光客向けの貸衣装屋に視線を向けながら、エリカは言った。

「え!?　私も着がえるんですか!?」

「写真を撮ってくれるそうだし、ちょうどいいと思って。記念を形にして残すのも、たまには悪くないはずよ」

　エリカがすこしだけ強引に、しかし、強引すぎないよう実は配慮してそうな勢いで、ひかえめな大和撫子を人ごみの方へ引っぱっていく。

　祐理はとまどいつつも、エリカと手をにぎりながらついていく。

　ちなみにふたりとも、城じよう楠なん学がく院いん女子の制服を着ていた。祐理は午前中、茶さ道どう部ぶの会合に出るため学校に寄ってきたからだという。

　それを見てエリカが「じゃあ、わたしも」とそろいの制服姿を選んだのだ。

　彼女たちをうしろから見ながら、護堂はふと思った。修学旅行でグループを組んだ、仲のよい二人組にも見えるなと。

　奔ほん放ぽうすぎるエリカとまじめすぎる祐理。

　ふたりの相性、その点では悪いように思える。

　しかし、自分勝手に見えて意外と包容力があるエリカと、消極的に見えて意外と言うべきことはしっかりと言う祐理。こちらの点では、むしろ相性はいいのかもしれない。

　――エリカと祐理、はたしてどんな関係に落ち着くのか？

　思わず考えこむ護堂の耳に、ふたりの会話が飛び込んできた。

「でも、護堂に正しい道を教えさとそうだなんて……祐理ってば意外と不屈の精神の持ち主なのね。心から賞賛させてもらうわ」

「わ、私はただ草薙さんにすこしでも慎つつしんでいただければと……」

「そうは言っても、相手は護堂よ？　アテナとの戦いで大体わかったでしょうけど、火がついたら決して止まらない人よ？　しかも、細かいことは全部棚上げにするおまけ付きで」

「それは……本当にそうですね……」

「よくいえば、すばらしく臨りん機き応おう変へん。言葉を飾らずにいえば、そうね――」

「行きあたりばったり、でしょうか……」

「ええ。まさにそれ」

「で、でも、たしかに仕方のないところもある人ですが、私は草薙さんを信じますっ」

「性せい善ぜん説せつを信じたいのね、祐理は。そういう純粋さ、嫌いじゃないわよ。ただ、問題の当人が草薙護堂の場合、どうなのかしらね……？」

　女子たちはいつのまにか草薙護堂の人格にケチをつけはじめていた。

　傍はた目めには仲なか睦むつまじく会話しているように見える。しかし、護堂は心配になってきた。

　もし、あのふたりが仲良くなったら。あんなふうにいい呼吸で連携しながら、俺への文句やツッコミをあれこれ言いたてるのではないかと。

　……近い将来、あと二名加わる形で予想が現実になるとは、夢にも思わない護堂であった。

第４話　囚われのカンピオーネ

　草くさ薙なぎ護ご堂どう。国籍は日本、年齢一六歳、性別は男性。

　私立城じよう楠なん学がく院いんの高等部に通う彼は、自分が特に目立つタイプだとは思っていない。

　性格はまあまあ温厚な方だ。

　クラスの中心で騒ぎ回るような、良くも悪くも声の大きな生徒ではない。かといって、人づきあいが苦手だったり偏屈だったりするわけでもない。

　容姿も平凡な方だろう。

　口うるさい妹などに言わせれば「ちゃんと努力して磨けばもっとマシになるはずなのに、怠なまけてるせいで全然イケてない」らしい。もはや腐くされ縁えんとも言える〝相棒〟エリカ・ブランデッリに言わせれば「造りは悪くないけど、カリスマ性と威厳に欠けているわね」らしい。

　成績も中の上。文系は得意だが理系はいまいちだ。

　体力には割と自信がある。だが、天才と持てはやされるようなアスリートでもない。

　実を言えば天地がひっくり返っても常人とは自己紹介できないプロフィールも所有しているのだが、この学校のなかでは完璧に凡ぼん庸ような一生徒だと断言できる。

　だから『中ちゆう庸よう』『平凡』……そんな表現が適当なのではないだろうか。

　――なあ草薙。自分のこと、どんな人間だと思ってるよ？

　ある日の休み時間、一年五組の教室。

　同級生に質問されて、護堂が口にした返答がこれであった。

　そのとき居合わせたのは高たか木ぎと名な波なみ、そして反そり町まち。

　三人とも同じ一年五組に在籍する男子である。そして彼らは皆、妙にギラつく目で護堂の顔を眺めていた。……何だろう、この異様な目つきは。

　重税と圧政に苦しむ領民が、気ままな暴君へ向ける憤ふん怒ぬの目。敵意を心底に秘めた、怒りと忍耐の眼光。切れ味の鈍にぶそうな刃物にも似た、剣けん呑のんなまなざし――。

　そんな表現が似つかわしく思えた。

「……なあ、聞いたか？」

「……ああ、聞いた。こいつ、自分の立場を全然理解してねえ。この王様野郎が！」

「……例の計画、やっぱり実行に移す必要がありそうだな」

　そして、何事かひそひそとささやき合っている。

「なあ、隠れて何話してるんだ？　あと今の質問、何か意味があるのか？」

「そんなつまらんことを気にするなよ、草薙。この恨うらみ晴らさでおくべきか！」

「ははは、何言ってやがる。今のは忘れろ、草薙。月のある晩だけだと思うなよ！」

「おいおい、本音を口走っているぞ。もうちょっとだけ我慢だ。因いん果が応おう報ほう、外げ道どう死すべし！」

「……大丈夫か、みんな？　おまえら様子がすごく変だぞ」

　心配して護堂は訊たずねた。

　だが彼らはその質問には答えず、暗い面おも持もちでおのおのの席へと帰っていったのだ。

　――そんな一幕があった日の放課後。

　草薙護堂は、唐突に拉ら致ち監禁されてしまった。

「――というわけで第一回、草薙護堂は学園の二大美少女を独占するクズ野郎だ審議会をはじめたいと思う。皆の衆、準備はいいか？」

「問題ない！　非モテの敵・草薙護堂に正義の裁さばきを下くだしてやろうぞ！」

「有う無む！　我々は恋愛共産主義の平等思想に基もとづいて、不当に富を独占するブルジョワジーを糾きゆう弾だんしてくれるわ！」

　この日、護堂は日直の当番だった。

　今日提出のプリントを集めて職員室の担任の机に提出しておく仕事があったため、それを済ませた帰途。職員室から一年五組教室への移動途中に。

　その拉致劇は敢かん行こうされた。

　人のいない辺りを通りがかった護堂に、大きな麻あさ袋ぶくろが頭からかぶせられる。

　手足をばたつかせて抵抗するも、通用せず。数人がかりで持ち上げられて、そのままどこかへ連れていかれた。おまけにガムテープで手足を縛しばられ、拘束までされた。

　そして今、麻袋をはぎ取られた護堂の眼前にあるものは――。

　黒いカーテンで窓を隠して陽光を遮しや断だんした、どこかの教

室だった。明かりもつけていないので、かなり暗い。

　唯ゆい一いつの照明は、誰かが手に持っているらしい懐中電灯だけであった。

　これだけでは周囲の状況も把握しづらいところである。

　だが護堂は、フクロウ並みに夜目が利きく体質だったので、じっくりとまわりを見回すことができた。おそらく、普段は使われていない空あき教室のひとつだろう。

　机が置かれていないことから、それは推すい察さつできた。

　そして、眼前に立つ三つの人影——。

　頭に紙袋をかぶり、顔を隠している。目のところにだけ穴を開けていた。

　これでは顔も正体もわからない。一体、誰だ？　自分を捕らえ、監禁したがる者たち。心当たりはないが、身に覚えがありすぎる。ついに学校にまで、どこぞの魔術結社とやらが乗り込んできたのか。

　だが、一応とはいえ草薙護堂は『王』なのだ。

　そんな相手にここまで大胆な真ま似ねをするとは、余よ程ほどの実力者たちなのか？

　用意周到なことに彼らは、高等部の制服である学ランまで着込んでいる。その上に紙袋をかぶっているのだ。ふたつの目と口元の部分にだけ穴を開けている。これでは彼らの正体もわから——な……。



　護堂はさっきの声を思い出し、彼らの背格好を眺めながら醒さめた声で言った。

「何してんだよ、高木。そっちにいるのは名波と反町か？」

「バ、バカ者！　我われ々われはそんな名前ではない！」

「う、うむ。貴様の同級生などでは断じてないのだ！」

「そう、我らは国を憂うれえ、民たみを慈いつくしむ正義の徒！　変な誤解はしないでもらおうか！」

　あからさまにあわてた声で三人が口々に言う。

「何て言うか……おまえらがこんなにバカだったとは思わなかったよ。今ならまだ罪は軽い。おとなしく俺を解放しろ」

　呆あきれと同情を込めて、護堂は勧告した。

　それにしても、自分がなぜこんな目に遭あうのか見当も付かない。

「ケッ！　こいつ、まるで自分は無実の罪で囚とらわれているとでも言いたげな目つきをしてやがる！」

　三バカのひとりが護堂の顔を懐中電灯で照らしながら、口汚く言った。

　この声はやはり、高木のものだ。

「まあ落ち着け。時間はたっぷりとある。じっくりと、この不ふ埒らちな野郎にてめえの罪深さを教えてやるとしようぜ！」

　せいぜい時代劇に登場する悪役の三さん下したＡという風ふ情ぜいの声。これは名波か。

「ああ、目にもの見せてくれるぜ。神に代わって、オレたちがこいつを裁く！」

　今度はえせヒーローっぽい決めぜりふ。反町の声だろう。

「……よくわからんが、おまえたちの決意は何となくわかったよ。

まずはこのテープをほどけ。落ち着いて話し合おうぜ、な？」

「ククク。貴様、自分の立場がまだわかってないようだなァ」

　おそらく反町らしき三バカのひとりが宣告する。

「オレたちが求めているのは、貴様との話し合いではない！　これは断罪なのだ！」

「……だ、断罪？」

「草薙護堂！　貴様はこの学院の二大美少女の心と体を欲しいままにし、ハーレムを運営する暴君！　その罪、万ばん死しに値あたいする！」

「…………何だって？」

　反町の弾だん劾がいに、護堂はめまいを感じた。

　二大美少女。ハーレム。一体こいつらは何を言わんとしているのだ？

「同志Ｔ！　草薙護堂の罪その一を読み上げろ！」

「おう！　……一、被告は金髪で超絶ナイスバディなツンが抜けてデレまで達した美少女エリカ様と所かまわず——き、教室で、校庭で、道みち端ばたで、公衆の面前で！　べたべたとイチャつき、愛を確かめ合い、あげくに自分とエリカ様は恋人でも何でもないなどと主張している！」

「ぬう！　その罪、許し難がたいにも程がある！」

「異議なし！　草薙護堂は万死に値する！」

　……護堂は呆れた。

　今までも十分に呆れていたのだが、このやりとりでそれが決定的になった。何と言おうか、アホすぎる。こいつらは真性のアホだと痛感したのだ。

　こんなバカげた寸劇につきあう必要はない。

　胸を張って、毅き然ぜんとして聞き流せばいいだけの話だ。

　草薙護堂はこの件に関して、何らうしろめたい記憶など持っていな……くもないので、実は単なる強がりなのだが、ウソも方便である。

「ねえ、護堂……」

　窓から差し込む夕暮れの陽光で、橙だいだい色いろに染められた放課後の教室。

　この時間まで残っている生徒はふたりしかいない。すなわち、草薙護堂とエリカ・ブランデッリのふたりだけである。

「今、この場所にはわたしたちしかいないわ。……ふふっ、何だか素敵じゃない？　いつもはたくさんの人でにぎわう場所が、わたしたちふたりだけの物なのよ？　これってとても贅ぜい沢たくなことだと思うの」

　赤みがかった金髪の美少女が、濡ぬれたようなまなざしで護堂の顔を見上げながら言う。

　そう、美少女。

　エリカ・ブランデッリは一〇〇人中一〇〇人が認める、すばらしい美び貌ぼうの乙女だ。

　だが、彼女は単に顔立ちが整っているだけではない。

　賢く、強く、自信家で、しかも策さく士し。

　美貌に加えて、己おのれの能力への絶対的な自信を所有している彼女は、護堂の知るどんな美少女よりも存在感に満ちあふれていた。

「じゃあ、ここで質問。こんな素敵な時間と場所を共有するわたしたちは、これからどうするべきだと思う？」

「お、おとなしく家に帰るってのはどうだろう」

「もちろん却きゃつ下か。……もう、こんなに心躍おどる場面なのに、そんなバカげたこと言って。護堂でなかったら、その口を引き

裂いて二度とおしゃべりできなくしてあげるところなのに」

　護堂の膝ひざの上で、エリカが声をひそめてささやく。

　言葉自体は極めて凶悪なのに、その声こわ色いろはとてつもなく甘い。

　しかも、彼女が今すわっているのは、椅い子すではなかった。

　草薙護堂の膝の上に、やわらかで瑞みずヾみずしいおしりとふとももを乗せているのだ。しかも、華きや奢しやな両腕を護堂の首に回し、しなだれかかっている。

　……断っておくと、この体勢は護堂にとって極めて不本意なものだった。

　だが、これに耐えなくてはいけない事情があった。

　まず足。エリカのしなやかな足が護堂の膝にからみついている。この締め付けの厳しさときたら、まるでかんぬきのようだ。

　そして首。白い蛇へびにも似た彼女の繊せん手しゆは、その気になれば一瞬にして護堂の首の骨をへし折れる。そこまではせずとも、確実に頸けい動どう脈みやくを絞め上げ、落とし——意識不明に追い込むことができる。

　攻撃態勢のエリカを前にして、意識不明。

　それは、裸で冬山に登山を挑むような愚ぐ行こうだ。どうなっても文句は言えない。

　エリカ・ブランデッリ、イタリア人、年齢一六歳。

　容姿端たん麗れい、頭脳明めい晰せき、スポーツ万能のまさに超人。ただし家事一切はできない＆しない。そして『魔女』にして『騎士』という冗談のような肩書きまで所有している。

　……そんな彼女の濡れた唇くちびるが、護堂の唇に近づいてくる。

　どうする？　どうしたい？　どうしよう？

　護堂の心は千ち々ぢに乱れる。

　避けられぬ脅きよう威いを前にして、現実逃避をしたくなった。昔読んだホラー小説では、こういう極限状態では妙なモノローグになるのだ。いきなり窓の外へ視線を向けて白い影を目撃したり、窓の外に黒い化け物を見たり。そしてバッドエンドを連想させる曖あい昧まいな結末につづくのだ。

　迫り来るプレッシャーに勝てず、護堂は窓の外を見やった。

　ああ。窓の外に、窓の外に——！

　……何かあるわけもなく、護堂はそのままエリカにいいように弄もてあそばれた。

　舌と舌を存分に絡からませ合い、彼女の使っていたミント系グロスの味をたっぷり味わう羽目になってしまった。

　たった二日前の出来事であった。

「報告する！　オレは見た。一昨日おとといの放課後、こいつは人ひと気けのない教室でエリカ様にき、きききききキッスをされていた！　思いっ切りぶちゅっと、ちち超ディープなやつを！」

「な、何だとォォォォ!?」

　思い当たる節ふしがありすぎる護堂は、かなり焦あせった。

　あの一幕を見ていた目撃者が、しっかり存在したとは。……だが、押し倒されはしなかった。唇へのキスまでで凌しのぎ通して、それ以上の一線は死守したのだ。

　だから、やましいところは……もちろんあるのだが、どうにか平静は取りつくろえた。

　しかし護堂がひそかに安あん堵どした瞬間、こんなことを訊きかれてしまった。

「草薙。おまえ、まさかとは思うが、エリカ様とそこから先に進んじゃいないよな？」

　そこから先。

　曖昧な表現だ。果たして、これはどこまで——否いな、どこからの行為を指すのだろう？

　護堂は悩んでしまった。

　この三月からエリカとくぐり抜けてきた数々の激闘、そして合間合間に繰り広げてきたエリカのアプローチに対する必死の抵抗。それらが走そう馬ま灯とうのように（べつに瀕ひん死しの重傷でもないのだが）思い出されてくる。

　あんなことも、こんなことも、そんなこともあったりしたが。

　……うん、まあ、どうにかギリギリの一線を踏み越えてはいないと強弁できそうな気がする。無理矢理に自分を納得させた護堂は、ようやく返答を口にした。

「……あのな、変な勘かんぐりをするなよ。エリカはたしかにいろいろ大胆すぎるところはあるけど、俺たちは本当に変な関係じゃないんだ。信じろよ」

「同志Ｎ、この回答までに要した時間は？」

「ストップウォッチによる計測では八・三秒。それだけの沈黙が『あのな、変な勘ぐりを』と発言するまでの間に確認されている」

「統計に従えば十分に疑わしい時間だな。……怪あやしい」

「いや、統計って何の統計だよ!?　そもそも、そんな時間わざわざ測るなよ！」

　護堂の叫びを無視して、三バカは蔑さげすみと妬ねたみの視線を向けてくる。

　もうつきあいきれない。何としてでも脱出しよう。決意する護堂だったが、手足を拘束されたままでは、それもかなわない。

　相手はごく普通の一般人。これでは超人的な怪力も、瞬間移動もできない。

　数々の特殊能力を持つ草薙護堂だが、常じよう軌きを逸いつする

強敵やシチュエーションがあって初めて発揮できるものばかりなのだ。

「……この案件は極めて由ゆゆしき問題なので、あとでじっくり審議しよう。ではつづいて、草薙護堂の罪その二についてだ！」

「おう！　それはオレが読み上げよう！」

　すかさず応じたのは、反町の声だった。

「草薙よ、二大美少女独占の罪を背負う貴様だが、もうひとつ許し難がたい大罪がある。それは『妹』に対する冷たさだ！　オレは、妹に萌もえない貴様の愚おろかさを糾弾する！」

「…………妹？」

　護堂は目を白黒させた。

　反町（推定）のヤツは、なぜここで妹などと言い出すのだ。

「ぬう、そう来たか……」

「さすがは同志Ｓ、二次元に一〇八人の妹を持つ漢おとこ……。いかなるときでも『妹』のことを忘れぬ執念、見上げた心がけよ……」

　端では三バカの残り二名がうめき、感じ入っている。こいつらも訳がわからない。

「なあ草薙。貴様はいつも教室に来る静しず花かちゃんに対して、あれだけ邪険な態度を取る自分が恥ずかしくはならないのか？　罪深いと思ったりはしないのか!?」

「……俺、べつに邪険になんかしてないだろ。普通じゃないか」

　護堂の妹・草薙静花は城楠学院中等部の三年生だ。

　この頃なぜか、護堂のいる高等部の教室や屋上にまでやってきて、つきまとっていく。

「……お兄ちゃんさ、最近すっごく不ふ真ま面じ目めだよね」

　そしていきなり、こんな文句を機き嫌げん悪そうに言ったりするのだ。

　ちなみに言うと、静花は勝ち気そうなところが印象的な、そこそこ可か愛わいらしい女の子だ。

　もしかすると将来は、草薙家の母親に似た派手目の美女になるのかもしれない。一四歳の現時点でも、かなり母親似だと評判なのだ。

「何でさ？　俺、べつにすごい真面目ってこともないけど、妹に不真面目とかなじられるほどじゃないぞ？」

「その戯たわ言ごと、まわりをもう一度よく見てから言ってよね!?」

　そういえば、この前こんな会話をしたときは屋上での昼食中だった。

　六月頃から、護堂は昼休みを屋上で過ごすようになっていた。

　ひとりではない。クラスも同じ、席も隣のエリカが当然という顔つきでそばにいる。そしてもうひとり――やや栗くり色がかった黒髪の女生徒、万ま里り谷や祐ゆ理りもいっしょだ。

　ふたりの少女たちと共に、屋上で昼食を摂とる。

　最近の護堂の日課だった。ここに妹の静花が加わることも多い。……このシチュエーションのどこが不真面目だというのだろう？

「どうしたのですか、静花さん？　たしかに護堂さんはまあ……完璧に品行方正とは言えない方ですが、十分に真面目な方だとは思います。お兄さまのことをそんな風におっしゃってはいけませんよ」

　微ほほ笑えみながら、祐理がやんわりとたしなめる。

　時に凛り々りしく、時に夜や叉しゃ女のような迫力すら発揮する彼女だが、普段はとても清せい楚そで奥ゆかしい雰囲気のお嬢さまなのだ。そして何より、美しい。

　万里谷祐理は、エリカと並び称されるほどの美少女だった。

だが、見る人によっては驕きよう慢まんと感じるかもしれないエリカのあでやかさは祐理にはない。代わりに、じっくりと見れば見るほど取り込まれそうになる深みが彼女にはあった。

たとえて言えば、人知れず可憐に咲き乱れる山桜。

それが万里谷祐理という少女なのだ。

「でも、そうですね。静花さんのおっしゃる通り、護堂さんはもうすこし真面目になっていただく方がいいかもしれませんね。……今のままでは私、いろいろなことが心配でたまりません。交友関係、女性関係、普段の行い、護堂さんはその辺りを一度見直すべきですね」

「あいかわらず手厳しいな、万里谷は……」

ちょっと澄まして祐理が言うと、護堂はぼやいた。

彼女はただのお嬢さまではない。関東一円を霊的に守護するという武む蔵さし野のの媛ひめ巫み女こ。エリカですら一いち目もく置く、千せん里り眼がんじみた力の持ち主なのだ。

そして、護堂の厄やつ介かいな事情を全て知った上でいろいろとサポートしてくれる友人だった。

六月の一件以来、祐理との関係はかなり順調だ。出会った当初はひたすら手厳しいだけだった彼女も、こんな風に冗談を言ってくれるようになった。

視線が合えばたがいに微笑みかけ、心を通じ合わせるようにもなっていた。

多くを語らずとも通じ合える——そういう居心地のいい関係が築かれつつあったのだ。

「お、お兄ちゃん！　それに万里谷さんも、見つめ合ってふたりだけの世界を作るのやめてよ！　そ、そういうところが不真面目なの、不ふ謹きん慎しんなの！　万里谷さん、お兄ちゃんみたいな男子に引っかかったらダメです！　もっと警戒心を持ってください！」

「あら？　静花さん、何がダメで、何を警戒すべきなのでしょ

う？」

「そうだぞ静花、おまえの言う意味が俺たちには全然わからない。はっきり言えよ」

　静花の訴えに、祐理と護堂はいっしょになって抗こう弁べんした。

　特に示し合わせたわけではなく、ただの偶然である。だが、こういうタイミングや行動が彼女とは不思議なほどしっくりと合う。

「……ま、静花さんとしてはこういうのを不真面目と言いたいわけよね。わたしや祐理といつもいっしょで、両手に花の現状が」

　くすくす笑いながら口をはさんだのは、エリカだ。

　彼女は静花が苦情を言い出したときから、ちょっと離れて傍ぼう観かん者しやを決め込んでいたのだ。

「高校に上がるまではずっと独り占めしていた朴ぼく念ねん仁じんなお兄さまが、今じゃこんな風に女の子を何人も侍はべらせるご身分なんだから、文句のひとつも言いたくなるわよね。……まあ、気持ちはわからなくもないわ」

「エ、エエエエエリカさん、変な勘ぐりはしないでください！」

　訳知り顔で言われて、妙に焦っていた静花が印象的ではあったのだが——。

「ふ、普通だと？　貴様、あんな妹相手に普通に接するだけだと言うのか!?」

「だって、そうだろ。まあ仲はいい方だと思うけど、高校生や中学生にもなってベッタリしてるわけにもいかないって、おたがいに」

　両親の不在が多かった幼い頃は、それこそどこへ行くときも妹連れだったものだが。

　護堂は昔を思い出して、なつかしさを感じた。

　思春期になった兄妹きようだいがそこまでやるのは、ひどく気恥ずかしいものだ。……もしかしたら静花が最近やたらとつきまとうのは、あいつも昔をなつかしんでいるのだろうか。

「くはあッ!?」

　見えない鈍どん器きで頭を打たれたかのように反町がのけぞり、悲鳴をあげる。

　護堂の返答がよほどショックだったと見える。

「しっかりしろ、同志Ｓ！」

「オ、オレなら大丈夫だ。それよりも草薙の罪を明らかにしなくては。いいか草薙、貴様は普通と言うがな、リアル妹はふつう、あそこまで可愛くない！　それもわからんのか！」

「…………は？」

　この世の真理を告げるかのような反町の叫びに、護堂はたじろいだ。

「うむ、同志Ｓの言う通り！　口の悪いところが逆にたまらん！」

「そうだ！　静花ちゃんこそ、ツンデレ妹の鑑かがみ。お兄ちゃんのバカ、すこしはあたしのこと気にしてくれたっていいじゃないっ。……でも大好き……」

「同志たちよ、ありがとうありがとう！　そう、これこそ萌え。妹萌え！」

　こいつらまさか、酒でも飲んでいたりするのだろうか。

　三バカのひどい盛り上がりようを前にして、護堂はアルコールか薬物の摂せつ取しゆを疑ってしまった。あとどうでもいいことだが、わざわざ女の子っぽく妄もう言げんを口走っていた高木がおそろしく気色悪い。これを指摘したら、あいつはやはり傷つくのだろうか……。

「ではそろそろ、第三の罪を申し渡そう。万里谷さんの件だ」

　いきなり言い出したのは名波だった。

「中等部時代は長らく学園ナンバーワン美少女として名声を欲しいままにし、高等部に上がってからはエリカ様の登場によって二大美少女のひとりにはなったが、その輝きは少しも色あせていない万里谷祐理さんのことだが——」

　護堂はいぶかしんだ。彼女らを独占云うんぬんとは、何の言いがかりだ？

「貴様、最近はあの娘こともよろしくやっているよな？　目が合うたびにすぐ目を逸そらし合ったり、ときどき頬ほおを赤らめながら見つめ合っちゃったりして、ふたりだけの世界を作って！」

「オ、オレも見たぞ！　草薙と万里谷さんが並んで歩いているときに偶然手と手がぶつかって、ふたりして恥ずかしそうにうつむいて、立ち止まったりしていた！」

「くせえ！　こいつは甘酸っぱいラブとコメの匂においがプンプンするぜーッ！」

　護堂は狼ろう狽ばいした。

　自分と祐理はそんな風に妙な雰囲気になっていたり——したかもしれない。

　記憶にないこともない。考えてみれば、この頃はずっとそんな調子だった気もする。もしかして、そういうところを結構な人々に見られていたのか!?

「ふん、心当たりはあるようだな。エリカ様と公然といちゃつきながら、万里谷さんルートも攻略中の外道め。フラグを立てるにも程があるぜ！」

「二ふた股またハーレムルートを驀ばく進しん中か、んんー？」

「貴様にだけはそんないい目を見させねえ。オレたちの手でバッドエンドにしてやる！」

　ここぞとばかりに三バカが吠ほえ立てる。参った。

　この連中をどう丸め込もう。八方ふさがりの状況に、護堂が絶望しかけたとき——。

　ガチャリと教室の扉が開いた。外の明かりが暗い室内に差し込んでくる。そして、そこから入ってきたのは色白の女生徒——万里谷祐理だった。

「護堂さん、こんなところにいらしたのですか？　探していたんですよ」

　おっとりとやさしげに微笑しながら、祐理が語りかけてくる。だが、拘束された護堂の姿を見るなり不審そうに眉をひそめた。

「……一体、どうされました？　なぜ縛られていたりするのですか？」

「……話せば長くなるんだけど、ここにいる高木と名波と反町がアホなことをしてるんだ」

　護堂は簡潔に答えた。それにしてもタイミングがいい。

　さっき探していると言っていたので、ここに現れたのは偶然ではないのだろう。

　万里谷祐理は『霊れい視し』の呪じゆ力りよくを持つ媛巫女。『なんとなく』歩き回るだけで探し物のありかにたどり着いても、おかしくはなかった。

　祐理は床に倒れ込んだ護堂のそばまで駆け寄ってきた。

　無防備な護堂をかばうようにして立ち、三バカに向けて凛々しく言い放つ。

「あなたがたは顔を隠していらっしゃいますが、護堂さんの同級生の方々なのですね？　このような狼ろう藉ぜき、どういうおつもりなのですか？　三人がかりでひとりの男子生徒を襲うなど、言語道断な蛮ばん行こうです。人として恥をお知りなさい！」

　惚ほれ惚ぼれするほどの一いつ喝かつだった。

　この凛りん然ぜんたる叱しつ責せきに、さすがの三バカもたがいの顔を見合わせた。

「く、こんなところで万里谷さんの乱入があるとは！」

「落ち着け、まだ主導権はわれわれの手にあるはずだ！　……そうだ万里谷さん、草薙を解放して欲しければ、こちらの要求を呑のんでもらう！　まずは着替えだ。神社でバイトをしているという万里谷さんの巫女さん姿を拝おがませてもらおうか！」

「うむ、あとはオムライスにケチャップで似顔絵を描いて欲しいっ。ハートマークも！」

「み、みみみみ、オレは敢あえて耳かきを要求したい！　できれば膝ひざ枕まくらつきで！」

「ぬううっ。ならばオレはネコ耳ッ。ご、語尾には『ニャン』をつけて！」

　と、口々に怪しいことを言い出す。

「……ご、護堂さん、あの方たちは私に何を要求しているのでしょう？　ひどく道を踏み外した、人間としてまちがっているような気配を感じてしまいますっ」

　三バカの狂態に、祐理が怯ひるんでいた。

　仕方のないことだと、護堂は納得した。あの只ならぬ迫力と妄もう執しゆう、ある意味では世界に数名しかいない魔王たちの猛威すら凌りよう駕がする恐ろしさだ。

「無理はしなくていい、万里谷。ここは危険（？）だから、エリカを探して呼んできてくれ。あいつならまあ……あんな連中でも余裕であしらえると思う。多分」

「そんな！　護堂さんを見捨てて、ひとりで逃げるなんてできません！」

「いいから行くんだ！　オレのことは心配いらない。自分の安全を優先してくれ」

「いいえ。――あのとき、あの雨のなか申し上げたじゃないですか。どこまでもお供しますと。私の力で本当にどうにもならない状況ならともかく、ここはおそらくそうではありません。私でもがんばれば、必ず護堂さんのお力になれるはずです」

　いつしか床に横たわる護堂と、それをかばう祐理は見つめ合って

いた。

　自分はバカだ。彼女の熱意にほだされて、護堂は思い直した。

　諦あきらめるのはまだ早い。この娘この勇気と力をもっと信じてみよう。ひとりでは難しくても、ふたりならきっと乗り越えられることは多いはずだ。

　……などと思いを新たにして三バカに向き直ってみたら。

　彼らは泣いていた。

　膝を屈して、頭からかぶった紙袋を涙の雫しずくで濡らしながら泣いていた。

「ぢぐじょう……いろいろふくめて畜生！」

「こんなときだってのに、ふたりだけの世界を唐突に作りやがって……」

「オレたちは無視して、自分たちだけラブコメかよ。悲しすぎるじゃねえか……」

　かくして打ちひしがれた三バカは無力化し、草薙護堂はどうにか解放された。

　おおむね平穏かつ平凡な学園生活（と本人は思っている）を送る男子学生である彼は、神を殺あやめ、その権けん能のうを簒さん奪だつした者だけに贈られる称号の持ち主でもある。

　――その名はカンピオーネ。

　世界に七人しかいない神殺しの魔王にまつわる物語は、またべつの話であった。

第５話　うわさのカンピオーネ

　徳とく永なが明あ日す香かは高校一年生。東京都文ぶん京きょう区くの根ね津づ三丁目に住んでいる。

　ここは下町情じょう緒ちょを色濃く残す、にぎやかな商店街だった。そこかしこに残る昭和の匂においが、不思議なノスタルジーを呼び起こしてくれる。

　明日香のバイト先は、この商店街からすこし離れたファミレスである。

　何の変哲もないチェーン店。しかし、大通り沿いにあるおかげか、それなりに繁はん盛じょうしている。このバイト先で古なじみの姿を見かけたのは、一〇月上旬のことだ。

　三連休の初日、朝八時すぎ。

　明日香はファミレスの早朝シフトに入り、フロアで接客中だった。

　古なじみは客として来店したのではなかった。店の前で大きめのバッグを抱かかえて、時間をつぶしていた。待ち合わせ中らしい。

　草くさ薙なぎ護ご堂どう。画かく数すうの多い漢字ばかりだが、それが古なじみの名前だ。

　背は高く、顔立ちは程ほど々ほどに整っている。ただし、どこか朴ぼく訥とつな雰囲気があるため、正面切って『イケメン』と呼ばれることはすくない。

　明日香とは幼稚園の頃からのつきあいになる。

　こんなところで待ち合わせるのだから、車で出かける予定なのだろう。

　護堂は見かけこそ普通そうだが、妙な知り合いが多い。ときどきバイトと称して、そうした知り合いの仕事も手伝っている。きっと今日もそうした用事なのだろう……。

　と考えて、明日香は仕事に戻ったのだが。

　ふと気づけば、護堂のまわりに女の子が集まっていた。しかも四人。

　みんな可か愛わいい、もしくは美人。おまけに金髪と銀髪の外人美少女がふたりも混ざっている！

「あいつ……最近、女関係が派手になってきたわね。前だって、あそこまでひどくなかったのに！　信じらんないっ。そのうち焼き入れてやるッ！」

　物騒な決意を固める明日香だった。

　そうこうするうちに、護堂たちの前にミニバンが停まる。

　幼なじみ＋プラス四人の少女たちはそれに乗り込み、ファミレスの前から走り去った。

「……今の、草薙くんだったよね？」

「万ま里り谷やさんやエリカさん、リリアナさん、いつもの人たちもいっしょだったわね。連休初日の朝に集合して、車でお出かけ……。一体どこに行くつもりかしら？」

　小声の会話が、耳に飛び込んできた。

　そちらを見る。ふたりのバイト仲間——宮みや間まさんと澤さわさんがささやき合っていた。

　明日香と同じ高校一年生だという。彼女たちの視線は、ついさっきまで草薙護堂たちがいたファミレスの外に向けられていた。

ピンと来た。このふたり、近くの城じよう楠なん学がく院いんに通っていると前に聞いていたのだ。

「澤さん、宮間さん。ふたりとも、もしかして草薙護堂のこと知ってる？」

明日香は唐突に問いかけた。

ファミレスの早朝シフトが終わった一一時すぎの更衣室で、かわいい制服から私服へ着替えている途中だった。澤さんと宮間さんはいきなりの質問に目をぱちくりさせた。

「たしかに知ってるけど……」

澤さんが怪け訝げんそうにうなずく。

細いフレームのメガネをかけた、いかにも頭の良さそうな子だ。

「明日香さんこそ、どうして草薙くんを？　学校、城楠じゃなかったよね？」

宮間さんに訊きき返された。こちらは小こ柄がらでとにかく愛らしい。

そのうえ、小学生にもまちがわれる童顔だ。

「あいつとは地元が同じ、この近くの商店街なの。中学までは学校も同じだったし」

「……じゃあ、幼なじみってヤツ？」

「あの草薙くんと!?」

探るように澤さんが、びっくり顔で宮間さんが言った。

「ええ。一生の不覚とまでは言わないけど、まあまあ残念なことに、あのバカとは幼少の頃からのつきあいなの。……ところで宮間さん、今『あの』って言った？」

明日香は冷たく微ほほ笑えんだ。高校に進学して、たかだか半年程度。そんな短期間で、あの古なじみは定てい冠かん詞しをつけら

れる存在になったのか。

「あいつがどうして『あの』なのか、ちょっと教えてもらえる？古なじみとして、あいつがどれだけ非常識なことをしているか知っておきたいから。場合によっては焼きを入れてやらなきゃだしね……！」

「はじまりはたしか、五月頃だったと思うわ」

　澤さんが静かに語り出した。

　根津三丁目——明日香や護堂の地元にある和風喫茶に、場所を移している。

「それまでの草薙くんは、あまり目立たない存在だったはずよ。まあまあイケてる顔だし、背も高いから、ちょっとは気にしてる女子がいたかもしれないけど、いまいち目立たない人だったし。でもエリカさんが来てから、全ては変わってしまったの」

　澤さんの語り口は知的で明めい晰せきだった。

　メガネが似合う才女ぶりは、見た目だけではないらしい。

「わざわざ草薙くんを追いかけてイタリアから来た、成績抜群でスポーツ万能、おまけに日本語ペラペラって反則級の金髪美少女が現れてから、彼はすっかり変わったわ。——いえ、もしかしたら隠されていた異常性が明るみに出ただけかもしれないけど」

「エリカさんの次は、わたしたちのクラスの万里谷さんが草薙くんに……」

　ぽつぽつと宮間さんも語り出してくれた。

　澤さんとちがって、重い口調だ。それだけ草薙護堂の振る舞いは常識外れなのだろう。

「万里谷さん、すごいおしとやかなお嬢さまなんだけど、いつのまにか草薙くんにべったりで、恋する乙女みたいで、そのうち駆け落ちでもするんじゃないかって感じに……。でも、草薙くんったら、ふたりだけで済まなくて……！」

「リリアナさんという子まで、東とう欧おうから草薙くん目当てで日本に来たのよ」

　こちらは銀髪でいかにも東欧出身らしい妖よう精せいめいた美少女だという。

　明日香はうなずいた。金髪に大和やまと撫なでし子こ、銀髪。さっきファミレスの外で見た娘たちか。

「あ。この人たち以外にも、よその学校から草薙くんに会うために忍び込んでくる子がいるらしいよ。うちじゃない制服の女子と、ときどき学校でいっしょにいるのを見るし」

「そういうわけで草薙くんは、すくなくとも四人、もしかしたらそれ以上の美少女に囲まれた、ハーレムの王様として君くん臨りんしているの。今じゃ城楠学院はじまって以来の怪物だって言われてるわ。でも、そんなヤツのくせに、不思議と女子に嫌われてないのよね」

「あの人、傍はた目めには草食っぽいし、何だかんだで親切だし……そのせいかな？」

「日常生活における存在感がうすいせいで、かえって反発されないのかも。一部の男子はすごく嫉しっ妬としてるみたいだけど」

　なるほど。ふたたび明日香はうなずき、ちょっとやさぐれた笑みを浮かべた。

「そっか……。あいつ、高校に入ってからは量よりも『質』にシフトしたのね」

「り、量より質……？」

　ぼそっとつぶやいたら、宮間さんに聞きとがめられた。

「一四人」

「え？」

「中学時代、あの朴ぼく念ねん仁じんのことを好きだった女の子の数。あたしが把握してなかった子をふくめれば、もっといくかも。……あいつを気に入っていた男の子も加えたら、さらに増えるわ

ね。あ、一応断っておくと、べつに同性愛とかじゃなくて、男の友情って意味だけど。——ああ、でも野球でいっしょだった瑠る偉いってヤツは結構微妙だったかも……」

「ええっ!?」

　明日香のつぶやきに、宮間さんがのけぞった。澤さんも興味津しん々しんの体ていだ。

「く、詳しく聞きたくなる話ね。どういうことなのかしら……？」

「どうもこうもないわ。言ったとおり、あいつは昔から一部の女子と一部の男子をたらし込むのが上う手まいの。長くて面倒な話になるから、詳しく話すのはまたの機会ね」

　明日香は苦虫を嚙かみつぶしたように、しかめ面つらをした。

「護堂のヤツ、クラスや学校の人気者って感じじゃないんだけど、あいつと深くつきあった人間はたいていヤられるわ。しかもあいつは、女の子に惚ほれられてることにも気づかないで『おまえは大事な友達だ』とか言っちゃうのよ！　信じらんないッ！」

　思わず熱くなり、テーブルをたたいてしまった。

「そ、それはすごいわね……。ところで明日香さん、もしかしてあなたも草薙くんを……」

「す、好きだったり……とか……？」

「!?　バカ言わないで！　誰があんなボンクラのことを！　あたしはね、ああいう学校や地元商店街の平和をかき乱すヤツが、幼なじみとして許せないだけなの！　誤解しないで！」

「うわあ、そういうことか。やるな草薙護堂……」

「うん、ものすごくわかりやすいね……。典型的って感じ……？」

　つい激げつ昂こうしてしまった途端、澤さんと宮間さんが何やら訳知り顔になる。

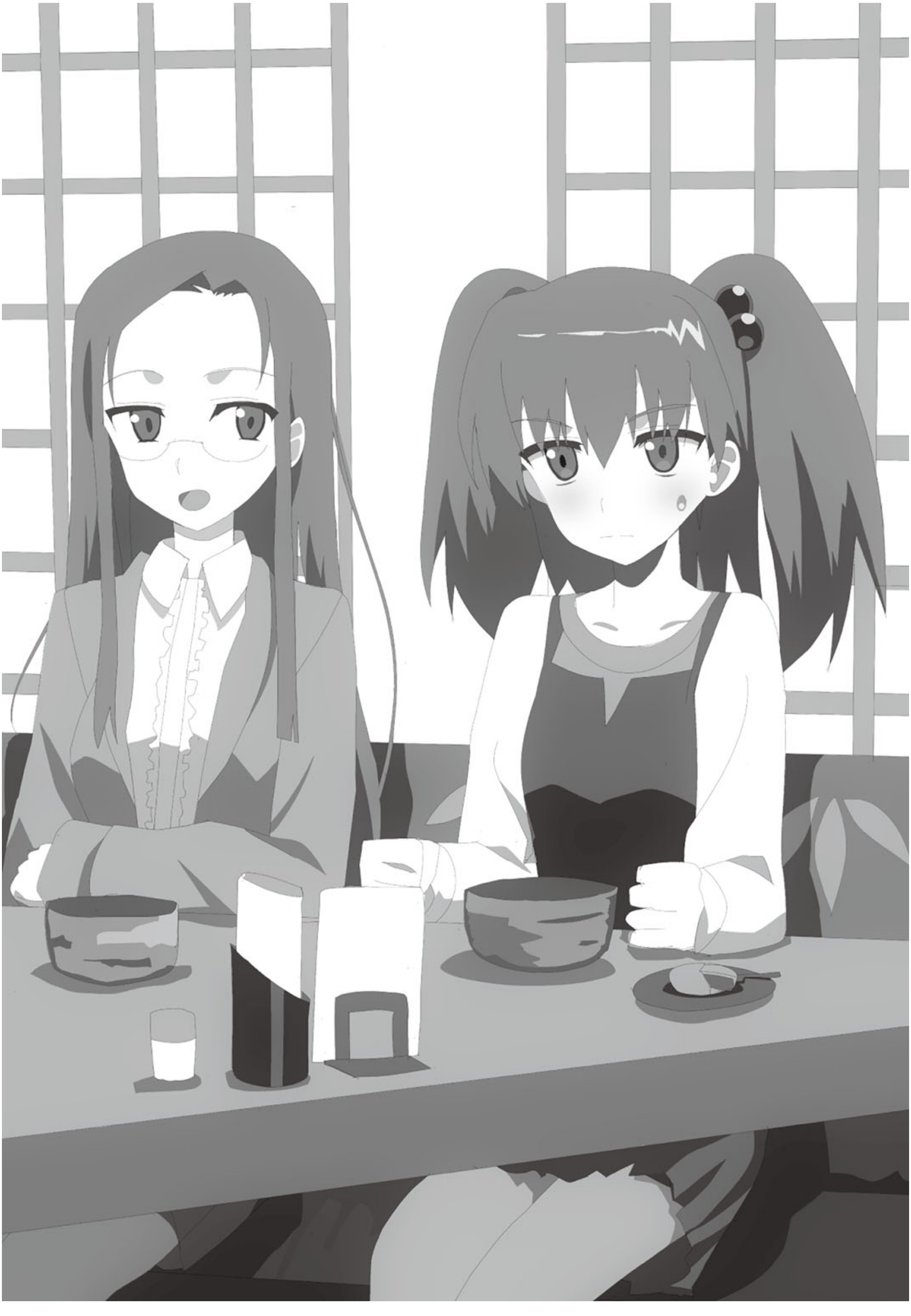
　ふたりとも、まじまじと明日香を見つめている。

　ちょっと子供っぽいかなと思いつつ、似合っているなと自負するツインテール。ややコンプレックスな吊り目。少々きつめな顔の造作。

　澤さんたちはそのあたりを注視して、うなずき合っていた。

「ねえ明日香さん、あなた、好きな人の前でついツンツンしちゃって後悔したりしない？」

「そ、そんなことない！　変な言いがかりつけないでっ！」



「でも根本的な疑問として、草薙くんがどうしてそんなにモテるのかしらね？」

「ものすごいイケメンでもないし、口が上手かったりマメでもなさそうだよね」

　興奮した明日香が落ち着いた頃、澤さんと宮間さんが言った。

「あー……あいつはものすごい人たらしの背中を見て育ったから、そのおかげじゃない？　最高の先生がすぐそばにいたおかげで、あいつが生まれながらに持っていた才能とか、永世モテ期の星回りとかが覚醒したんじゃって思ってるんだけど」

　投げやりに答えたところで、その教師役の姿が目に飛び込んできた。

　明日香と澤さん、宮間さんが話している和風喫茶。

　窓の外には根津三丁目商店街の風景。

　向こうから歩いてくるのは、端正な立ち姿の老人だった。上品な麻あさのジャケットを涼やかに着こなし、若かりし頃はかなりの美男であっただろう風ふう貌ぼう。ちょっと通りを歩くだけで、あちこちの店の人間から声をかけられている。

「もしかして、あの人が草薙くんにいろいろ教えたっていう？」

　明日香の視線に気づいて、宮間さんが察しよく訊たずねてきた。

「そう。一いち朗ろうおじいちゃん……あいつの祖父にあたる人」

「たしかに、すごく人気がありそうな人ね。でも、ものすごい人たらしって、たとえばどんなところが？」

「うーん……何て言えばいいのかなー」

　澤さんの問いに頭を悩ませていたときだった。

　和風喫茶のすぐ前を草薙一朗——草薙家の家長が通りがかった。彼は店内にいる明日香にめざとく気づき、ウインクしてきた。この

年齢の日本人男性とは思えないほど絵になる、洒しゃ脱だつな挨あい拶さつ。鬱うつ陶とうしくもなければ素そっ気けなくもない、絶妙の案あん配ばい。

　こういうことを自然とやってのける人なのだ。

　さすが、と明日香が感じ入ると、和風喫茶の電話が鳴った。カウンターのおばさん（この人とも明日香や護堂は子供の頃からの知り合いだ）が応対している。

　そのまま悩んでいると、おばさんが近づいてきた。

　おぼんに載せていた栗くりぜんざいを明日香たちのテーブルに載のせてくれる。

「おばちゃん、あたしたち頼んでないよ」

「ふふっ。いいの、一朗さんに今、電話で頼まれたヤツだから♪」

「一朗おじいちゃんに!?」

「うん。何だか難しい顔してたから、差し入れだって。もしかしたら孫のことで迷惑かけてるんじゃって気にしてたわ♪」

　あの一瞬のすれちがいで、ここまで読んでしまう。

　電話一本で和風喫茶のおばさんにツケで注文し、イヤな顔ひとつされない。いや、この浮かれようを見るに、おばさんはじいちゃんに頼み事をされて、むしろ喜んでいる。

　しかも、テーブルに載った栗ぜんざいは三人分。

　きちんと澤さん、宮間さんの分までカウントしている……。

「とまあ、こういうことが余裕でできちゃうところで察してもらえないかな、おじいちゃんがとんでもない『たらし』だって」

「……何となく理解できたわ」

「……あの孫にして、ってヤツなんだね」

「あのおじいちゃん、護堂のヤツを子供の頃から面倒見てきた人なの。いろんなところに護堂を連れて歩いてたから、どんな人と会っ

たときにどう振る舞っていたか、幼心にしっかり刻み込まれたみたい」

　護堂自身が語ったところによると、実にさまざまなドラマがあったらしい。

　たとえば、じいちゃんが『昔いろいろあった』らしい老婦人と遭遇したとき。昔じいちゃんにあこがれていた中年婦人にあったとき。昔、じいちゃんに『世話になった』明らかにカタギでない人との酒盛りのとき。あるいは、じいちゃんが昔の友人のピンチを救いにはるばる南米の僻へき地ちに出かけたり……。

「そういうドラマの数々を見て育った護堂は、『女性と一部男性にモテモテ』な一朗おじいちゃんの行動パターンが骨の髄ずいにまで刻み込まれていて、それがあいつを非常識にモテさせている……なんて、バカげたことを考えたりもするけど……」

　そのあたりは真しん偽ぎ定かでない、ただの思いつきであった。

「だけど、ひとつだけ不安な——しかも、将来的にかなりの確率で実現しそうな不安があるのよね」

　栗ぜんざいを箸はしでつつきながら、明日香は言った。

「あのバカさ、じいちゃんのたらし技を子供の頃から間近で見ているのよ。『門前の小僧、習わぬ経を読む』っていうじゃない？……あいつが将来、女の子に慣れてきて、自分からモテたいとか思うようになったら——」

　そのまま口ごもる。すると、こちらの意を察してくれたのか。

「そ、そっか……。これだけできちゃうおじいさんのノウハウが、草薙くんのなかには刷り込まれているわけで、それを自分の意思で使いこなすようになったら——」

　宮間さんが恐る恐るという感じで、あとを継いでくれた。

　小柄な彼女は、どうやらかなり勘かんがいいらしい。

「い、今でさえ魔王級の女たらしだってのに、そこにあれだけモテそうなおじいさんの手て練れん手て管くだが加わるわけ!?　正しょう真しん正しょう銘めいの化け物じゃない、それじゃあッ」

　澤さんも切迫した口調で言う。

「これ、あたしだけじゃなくて、あいつの妹の静しず花かちゃん、あと亡くなった草薙のおばあちゃんも、ずっと前から心配していることなのよね……」

　徳永明日香や草薙家の一部女性が感じていた、近い将来に向けての恐怖。

　それを共有することになった澤さんと宮間さん。

　彼女たちは、三連休でどこかに出かけたらしい草薙護堂の行く末を思い、大きなため息をつくのであった。

第６話　余話・顕聖二郎真君

1

「大凶か……」

　気まぐれにひいたおみくじを眺めて、護ご堂どうはつぶやいた。

　占いの類たぐいを信じる趣味も主義もないので、苦笑しながらである。学校からの帰り道、ふと立ちよった根ね津づ神社での出来事だった。

「あら。ちょっと面白いことが書いてあるわね」

　護堂のおみくじを横からのぞき込んで、エリカが言った。

　尚なお、いっしょにひいた彼女の方は『大吉』で、文句なしの結果であった。

「待ち人、天敵来きたれり。争い事、避けるが吉。——次の戦いのむずかしさを予言してるみたいじゃない、まるで」

「そうか？」

　護堂はいいかげんに答えて、肩をすくめた。

「何の神様と戦うことになっても、避けるが吉ってのは絶対に変わらないと思うぞ」

　日につ光こうの地でサルの姿をした神と戦ってから、半月も経

たっていない。

　神じん通つう広大にして鋼はがねの属性を持つ、不死身の軍神。純粋な戦闘力だけを見るなら、今まで戦ったなかでも最強の雄ゆう敵てきだった。だが、これまでだって古代中東の神王やら、蛇へびの本性を隠し持つ智ち慧えの女神やらと戦ってきたのである。

　まあ、戦う相手としての厄やつ介かいさはどれも大差ないだろう。

　地上から見あげれば、超高層ビルの高さが七〇〇メートルでも七五〇メートルでも似たようなものだと言える。それと同じだった。

　アバウトな意見にエリカも「それはそうだけど」と苦笑し、付け足した。

「でも、護堂の〝天敵〟って概がい念ねんはなかなか興味深いわ。あなたって天敵が多そうなくせに、実はそうでもない方だから」

「そりゃ、たいていの神様が傍はた迷惑で悪行ばっかり重ねているからだろ」

　エリカの言わんとするところを察して、護堂は言った。

　カンピオーネ・草くさ薙なぎ護堂が所有する力は、古代ペルシアの軍神ウルスラグナが変じた『十の化け身しん』。それぞれの化身にはハードルの高い使用条件がある。たとえば、敵が民衆を苦しめる大罪人であること等。

　が、たいていの『まつろわぬ神』は無自覚に悪行を繰りかえすことが多い。

　そして、そうした〝悪〟の天敵ともいえる存在が護堂の力の源みなもと、〝正義の守護神〟でもあるウルスラグナだった。

　相性という意味では、むしろ護堂こそが『まつろわぬ神』の天敵なのである。

　特に民衆の敵を灼やき滅ぼす『白はく馬ば』と、悪あしき神を斬きり裂く光剣の所有者たる『戦士』は多くの神々に有効な切り札だと言えた。

　しかし、ここで護堂は気づいた。もうひとりの同行者が物言いたげにしている。

　ついさっき『中吉』のくじをひいたばかりの少女だった。

「どうかしたのか、万ま里り谷や？」

「い、いえ。すこし気になることがあっただけで……」

　ひかえめな大和やまと撫なでし子こは困ったように言葉を濁にごそうとした。

　だが、視線で『言ってくれ』とうながす。祐ゆ理りはおずおずと口を開いた。

「今のお話を聞いていて、なんとなく感じただけなんです。護堂さんが近々、ものすごく相性の悪い――それこそ天敵のような存在と出会うのではないかと……」

　媛ひめ巫み女こ・万里谷祐理は千せん里り眼がんじみた『霊れい視し』という能力の持ち主である。

　おみくじの大凶などより、祐理の「気になる」の方が護堂にとっては何十倍も深刻だ。思わず押し黙り、隣のエリカと顔を見合わせてしまった。

　やはり、近いうちにまた面倒な揉もめごとが起きるのだろうかと……。

　のちに思いかえしてみると、これが事の発ほつ端たんであった。

　おみくじの一件があった翌々日の放課後。

　護堂は祐理と連れだって荒あら川かわ区くに出かけていった。

　学校から直接、制服のままである。プライベートな用件ではない。いつもなら金髪と銀髪の両名もついて来ただろう。

　しかし、この日はふたりともべつの用事があった。

　草薙護堂の侍じ従じゆう長ちようを以もつって任じる少女の方

は、あとから合流する予定である。だが、それまではふたりきり。護堂はなんとなく気恥ずかしさを覚えながら、電車を乗り継ぎ、最も寄より駅からは徒歩で目的地に向かった。

　訊きいたわけではないが、祐理もきっと同じ気持ちだろうと思う。

　いっしょに歩くふたりの口数がすくないのも、その影響だった。共に異性との交遊にうとい同士。空気でわかる。だが、しかし。

　それで居心地悪いということも、不思議なほどなかった。

　連れだって移動する護堂と祐理の距離感は、同じ学校に通う生徒同士というにはいささか近すぎるものだった。

　ほんの数センチだけ護堂が手をのばせば、祐理の手にふれることができる。

「こ、こういうとき、小さな子供同士だと手をつないだりするのかもしれませんね……」

　不意に祐理がささやいて、恥ずかしげにうつむいた。

　エリカであれば、言うと同時に護堂の手を取っていたかもしれない。

　しかし、この大和撫子がそんなことをするはずもなく、代わりに恥ずかしそうな表情のまま微ほほ笑えみかけてくれた。護堂もかすかな笑みで応こたえる。

　それで十分だった。十分に通じ合っているという気がする。

　日光での騒動以来、祐理とはずっとこんな感じであった。多くを語らずとも通じ合える居心地のよさにまかせて漫然と歩いていたら、目的地が見えてきた。

　隅すみ田だ川がわに程近い、とある神社である。

　鳥とり居いの向こうに見える参道には何十人もの人ごみができていた。

　ちょうど縁日を催もよおしていて、出で店みせも多い。タコ焼

き、フランクフルト、お好み焼き、わたあめ、チョコバナナといった定番の屋台が見てとれた。

「こういうの、ちょっとなつかしいよな。何か買い食いしたくなるっていうか」

「そうなんですか？　でしたら、あとで寄ってみましょうか」

　ふとつぶやいたら、祐理が提案してくれた。

　もちろん護堂はすぐにうなずいた。しかし、今は縁日よりも優先すべき用件がある。ここからは祐理が先を歩き、目的地へと先導してくれた。

　にぎやかな参道を避けて、鎮ちん守じゅの森を抜けていく。

　そちらから神社の敷地内に入りこむ。ここにいるべき神職や巫女たちの姿は見えない。縁日の方でいそがしいのも理由のひとつだろう。

　しかし、彼らがいない理由はもうひとつあるはずだった。

　すなわち、魔王カンピオーネの来訪に合わせて自主的に退席したという――。

「お待ちしておりました、お兄さま！」

　神社の境けい内だいで出迎えてくれたのは、巫女装しよう束ぞくの少女だった。

　万里谷ひかり。まだ小学六年生だが『禍まが祓はらい』という特異な霊力を持つ媛巫女見習い。そして、祐理の妹である。

「準備は全部ととのっていますので、まずはこちらへ」

　ひかりは歳に似合わぬほど気が利きく少女だった。

　朗ほがらかな笑顔で親しみの気持ちを表しながらも、如じよオさいなく拝はい殿でんの方へと歩き出し、案内してくれる。護堂はうなずいて、祐理と共にあとへ続いた。

　拝殿の内部はなかなかに広く、薄暗かった。もちろん木造である。

　陽ひも沈みはじめていて、オレンジ色の西日が差しこんでくる。そして、異様な物体がいくつも——否いな、幾十も立ちならんでいた。

　人間の姿をした、白い像である。

　よく見れば、それらは凝こりかたまった塩で造られた物だとわかる。

　全て男。年齢は二〇代から四〇代。驚きよう愕がくか恐怖、どちらかの感情を顔に浮かべている像ばかり。そして、身につけた衣服は背広が多い。

　一瞬、生きた人間かと見まごうほど、塩の像は精せい緻ちでリアルな出来映ばえだった。

「これ、みんな正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの人たちなのか……？」

「はい。六月にヴォバン侯こう爵しやくが来日された際、侯の権けん能のうで塩に変えられたのです……」

　護堂の問いに祐理が答える。

　最古参のカンピオーネである〝侯爵〟デヤンスタール・ヴォバンが来らい臨りんしたのは、万里谷祐理のたぐいまれなる霊視力を欲ほつしてのことだ。

　護堂との対決は『痛み分け』となり、ヨーロッパの地に帰っていったのだが——。

　目の前にある塩の像たちは、彼の置き土産みやげであった。エメラルド色に輝くヴォバン侯爵の魔ま眼がんでにらまれた者は、全て塩と化してしまうのだ。

　かの老カンピオーネがどこかの魔神だかから簒さん奪だつしたという権能ゆえに。

『ソドムの瞳ひとみ……とグリニッジの賢人議会が名づけた権能で

す』

　と、昨日語ってくれたのは、正史編纂委員会の甘あま粕かす冬とう馬まだった。

『ひとにらみするだけで、生ある者を全て塩に変えてしまうそうで……。しかも、候がその気になれば何千、何万という人々を一瞬で塩漬けにできるんだとか。神の焔ほのおで灼やかれるソドムの都を見た者が塩の柱と化す――旧約聖書のエピソードを気ままに再現できるところが命名の由ゆ来らいらしいですね』

　うんちくを語るときは、どこかうれしそうなのがいつもの甘粕である。

　しかし、さすがにこのときはややうんざりした口調だった。そして、彼は護堂に要請したのである。魔眼の効果を打ち破れるか、ひとつ試ためしてもらえないかと。

「バロールとかいう神様から奪った力じゃないかって、言われてるんだって？」

「どうでしょう……？　私には、あまりそのようには感じられないのですが……」

　乱立する塩の彫像を眺めて護堂がつぶやいたら、祐理はひかえめにささやいた。

「もしかして、何か視みえているのか？」

「は、はい。片目で……鎧よろいを身につけています。古い――ヨーロッパ本土の神格であるようにも思われるのですが。隻せき眼がんの軍神……？」

　祐理は目を細めて、塩の像たちの背後を見つめていた。

　並はずれた霊視力を持つ媛巫女は、そこにおそるべき権能の源たる神の似姿が視えているのだろう。そういえば、と護堂は思い出した。

　ヴォバン侯爵の代名詞ともいえる『狼おおかみ』の権能。

　あれも北ほく欧おうの魔ま狼ろうフェンリルに由来する力ではな

いかといわれながら、実はギリシアの太陽神アポロンから簒奪されたものだった。

「あのじいさん、なんとか議会ができる前からカンピオーネをやっているから、その頃のことは正確な情報がすくないんだっけ……」

　逆に、手がかりが皆かい無むの状況でも真実の一端をかいま見てしまう祐理の眼力こそ、誉ほめたたえるべきかもしれない。

　ならば、祐理にはさらに重要な情報が視えるのだろうか？

　護堂が訊たずねるように見つめると、祐理は申し訳なさそうに首を横に振った。

「今、私に視えたのはそれだけです。この権能のもととなった神の御み名なまでは……」

「やっぱり、ウルスラグナの『剣』は通じないってことか」

「ですが、たしかに以前よりも侯の呪じゆ縛ばくが弱まっているように見受けられます。これでしたら、甘粕さんがおっしゃったとおりの方法で破れるかもしれません」

　祐理のコメントに護堂はうなずいた。

　カンピオーネの権能も時間が経つと効力がうすれるのだろうか？

　疑問に思いながらも、護堂は試してみることにした。

　ヴォバンと戦ったあと、不本意ながら草薙護堂も新たな力を手に入れているのだ。

「ひかり。俺たちがめいっぱい力を吸いこんだあとは頼む」

「はいっ。おまかせください、お兄さま！」

　万里谷ひかりが朗らかに請うけあってくれた。

　彼女が使う霊力・禍祓いはあらゆる呪力・呪術を無効化できる特異な力。神やカンピオーネの権能であっても、ごく一部であればかろうじて消すこともできる。

　もちろん、ヴォバン侯爵がかけた権能を消去できるほどの威力は

ない。

　だが、たとえば。

　よくわからない理由で弱まった塩化の呪縛から、護堂がさらに〝力〟を吸いとったあとならば、あるいは——

「天あまの叢むら雲くも、たのむ」

　護堂は右腕に向けてささやいた。ここに宿るのは神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎである。

　幽かく世りよがらみのゴタゴタで手に入れた『相棒』だ。日光での戦いを通して、ぎこちないながらもその使い方を悟ることができた。

　この由ゆい緒しよ正しき神刀には、呪力を吸収するという性質がある。

　これを使って、侯爵がかけた権能から呪力を吸いとってしまえば、塩化の呪縛は大いに弱まる、かもしれない。

　護堂の手に天叢雲劍が忽こつ然ぜんと顕あらわれる。

　拵こしらえはあえて日本刀風に変えてある。ゆるく反そった刀身も日本刀に似ているが、こちらは蕨わらび手て刀とうと呼ばれる古代の刀剣を再現したものだという。

　そして、天叢雲劍の刃やいばは禍まが々まがしい漆しつ黒こく——。

　神刀というにはいささか物騒な見た目の相棒を、護堂は無造作に突き出した。

「あのじいさんの権能に残っている力、吸いとってみせろ！」

「幸いなる者の霊れい験げん、かくあれかし！」

　手にした刀に護堂が命じれば、ひかりも霊力を使うため言こと霊だまを唱える。

　今回、塩となった人々をこの神社に運び込んだのにも意味があ

る。ここは天叢雲劍の庇ひ護ご者しやというべき速ハヤ須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト——スサノオを主神とあがめる社やしろなのだという。

　天叢雲劍の神威を高めるには、格好の土地でもあるという。

　事前に正史編纂委員会の関係者がここに集まり、そのために呪術の儀式を施ほどこしているとのことだった。神刀から力が放たれ、ひかりも霊力を駆使する。

　次の瞬間、祐理が大きく目を見ひらいた。

　まだ午後五時前だが、だいぶ暗くなっていた。

　一仕事終えた護堂は、制服姿の祐理と共に神社の参道をなんとなく歩いていた。

　縁日の屋台と人出でかなりにぎやかだ。そのなかを漫然とさまよいながら、祐理がしとやかな微笑を護堂に向けてくれる。

「ひとまず上う手まくいって、ほっとしました」

「まあなー。あとは後遺症とかなければいいんだけど」

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎとひかりの霊力を組み合わせて、期待どおりの結果を得ることができた。

　別件で不在だった甘粕に電話で報しらせたところ、ちょうど体が空あいたので事後処理に来てくれるという。

　彼が来るまでの間、護堂たちは縁日を見てまわることにしたのだ。

　ひかりは巫女装束から私服へ着がえにいったので、今は祐理とふたりきりだった。

「いっそ屋台で何か買って、ここで夕飯をすませていくのもいいかもな。じいちゃんも静しず花かも今日は帰りが遅いらしいし」

「静花さんもですか？　今日、茶さ道どう部ぶの部活はないはずで

すが」

「何か約束があるとか言ってたよ」

　連れと話しながら、のんびりと縁日を歩く。

　ふと目が合えば、祐理はしっとりとした笑顔を向けてくれる。

　たいした話もせず、なんとなくいっしょにいるだけだが、これがなぜか楽しい。きっと祐理も同じだろう。そういえば、ふたりとも学校帰りなので制服姿だった。

　下校途中で寄り道して、気心の知れた仲間たちと平和に過ごす。

　これこそがふつう——というより、正しい学生生活だよなーと高校生にあるまじき感かん慨がいを抱いたときだった。祐理に制服の袖そでを引かれた。

「ご、護堂さん。あちらにいらっしゃるのは……」

「どうしたんだ万里谷——って、なんであいつがここに？」

　祐理に注意をうながされ、そちらに視線を向けてみる。

　焼きそばの屋台だった。店番の女の子が大きな鉄板と向き合い、両手にヘラを持って、大量の中ちゆう華か麵めんとキャベツ、豚肉などを豪快に炒いためている。

　はっぴまで着て、威勢よさげな店番の少女。護堂がよく知る人物であった。

「静花。何やってんだ、おまえ？」

「ん——？　お兄ちゃんに万里谷さん!?」

　血を分けた妹が顔を上げ、驚きの表情を見せる。意外な場所での再会だった。

「あたしはさ、浅あさ草くさのおじいちゃんちに頼まれて、手伝いにきたの」

焼きそばをガシガシ炒めながら、静花が語る。

女子らしい繊細さとは真ま逆ぎゃくの豪快さは、話に出た浅草のじいちゃん——草薙兄妹きょうだいにとっては遠縁の親戚に当たる、今は亡き老人が伝授したものだ。

スマートさが売りの草薙家の祖父とはちがい、気っぷのいい江戸っ子だった。

生涯を独り身ですごしたのだが、彼が営いとなんでいた商売を継いだ『一家』と草薙家は、いまだにつきあいがある。

「そういや、あそこはテキ屋もやってたもんなあ」

「てきや……とは、どういうお店なのでしょう？　私、初めて耳にしたのですが」

身内話をする兄妹に問うのは、もちろん世間知らずのお嬢さまだ。

祐理らしい質問へ護堂が答える前に、妹がすばやく目くばせを送ってきた。あまりつっこんだ説明はしない方がいいんじゃないの——と、視線で語っている。

それもそうかと、護堂は無難に語ることにした。

「……つまりさ。あちこちのお祭りや縁日をまわって、屋台を出す仕事なんだ」

「……夏になると海でやったり、冬はスキー場にいったりもするんです」

「まあ。なんだか楽しそうなお仕事ですね」

ある種の職業名や『今は一応カタギ稼か業ぎょう』といった語句を避けた兄妹に、祐理は無む菌きん培ばい養ようの清らかな笑みを向けてくれた。

ちなみに、静花が語った浅草のおじいちゃん。背中に倶く利り伽か羅ら竜りゅう王おうの紋もん々もんを背負い、若かりし頃は博ばく徒ととして一時代を築いたという人物でもあった。その葬儀には知る人ぞ知る業界の大物も参列していたとか……。

「言ってくれたら、俺も何か手伝ったのにな」

「お兄ちゃん、最近いそがしいみたいだからって向こうが遠慮して、あたしにだけ電話してきたの。ま、声をかけてもどうせ断られただろうけど——」

　静花が可愛らしい顔を険けわしくして、にらんでくる。

　謂いわれのない非難に対して、護堂はすこしムッとして答えた。

「変なふうに決めつけるなよ。俺だって知り合いに頼まれたら……」

「今日、万里谷さんとのデートがあったくせに？」

「で、デート!?」

　静花に言われて、護堂はびっくりした。

「バカ。何だってそんなこと言い出すんだ」

「あのね。じゃあ訊くけど、それ以外の何をしてるっていうのよ？」

　ぎろっと険のあるまなざしで静花が言う。

「家にも帰らず学校からそのまま、こんなところにまでやってきて。ふたりきりだし。なあんか訳ありな雰囲気だし」

「「…………」」



　護堂は思わず黙りこんだ。祐理もハッと息を呑のんでいた。

　言われてみると、かなり釈しやく明めいしづらいシチュエーションだと気づかされた。

　まさか東とう欧おうから来たバケモノみたいな老人がしでかした悪行の後始末をするため、ここの神社にやってきたと正直に語るわけにもいかない。かといって、とぼけて立ち去っても家に帰れば顔を合わせる羽目になる。

　参ったなと考えたところで、護堂は思い出した。

　何日か前の祐理の託たく宣せん。近いうちに天敵と出くわすのでは云うんぬん。あれはもしかしたら、静花のことだったのかもしれない——。

　実の妹が天敵ってのも何だかなーと、ぼやきたくなったとき。

　不意に、隣にいた祐理がこう言い出した。

「あ、あの……護堂さん、静花さん。デートというのは、男性と女性がふたりきりでいっしょに出かけて、楽しい時間をすごすもの……でいいんでしたよね!?」

　おろおろしながらの確認。

　まさか、こんな基本事項を今さら質問されるとは。護堂だけでなく静花まで意表を突かれつつ、草薙兄妹はそろってこくりとうなずいた。

　すると、祐理は愕がく然ぜんとした体ていで、いきなりこんなことを言い出した。

「どうしましょう……。私、今日はじめてデートというものをしてしまいました……」

「えっ!?」

「だって護堂さんとふたりだけで、こうして、ずっとごいっしょだったわけですし——」

いやいや。これから妹のひかりだって来る予定じゃないか。

思わず護堂は言いかけたのだが。狼ろう狽ばいしながらも不思議とうれしそうにも見える祐理の姿を見て、なぜか思いとどまってしまった。

「や、やっぱり、これは私たちが初めてそういうことをしたと、考えていいのですよね……」

「ま、まあ、そうかもしれない……かな」

「そう……だと思います」

「そ、そうか？」

「そう、ですよね？」

微妙に潤うるんだ瞳で訴えられて、護堂は自分でも意外と思う反応をしてしまった。

即座にうなずいてしまったのである。こんなふうに認めていいのだろうかと、微妙な引っかかりを感じつつ。だが、そのあたりのことはすぐに忘れてしまった。

祐理が幸せそうに微笑んでくれたからだ。

護堂の方も自然と口元がゆるみ、結果、静花の前で笑い合う形になってしまった。

「く……っ！　妹の目も気にせずにのろけ!?　あのおじいちゃんだって、そこまではやらないっていうのに！」

静花は勝手に怒りはじめ、焼きそばをガシガシ炒める手の勢いを強める。

女性関係の多彩さと洒しゃ脱だつな遊びっぷりでは比類なき達人である祖父。問題人物を引き合いに出されて、護堂は眉まゆをひそめた。

「じいちゃんは心にやましいところがあるから、そういうのを家族に見せないだけだぞ。俺は万里谷と仲がいいからって、べつにやましく思うことは何もないし」

「あ、はい。私も護堂さんとの関係で人に恥じるようなことは何も……」

　護堂が言えば、すぐに祐理も追つい随ずいしてくれる。

　このあたりは日光でバタバタして以来、護堂はじめ祐理やリリアナもいつのまにかなし崩しでいたった境地といえた。

　運命共同体としての団結が深まったというか、開きなおったというか……。

「さ、最近ダメ人間方向へ順調にレベルアップしてると思ったら、世間知らずの万里谷さんまで巻きこんで！　お兄ちゃん、そういう成長はもうちょっとつつしんで――」

「そんなことより焼きそば、もういいんじゃないか」

「あっといけない」

　兄に指摘されて、すぐに静花は怒りを静めた。慣れた手つきで両手のヘラを操り、大量の焼きそばをいくつものビニールパックに取り分けていく。

　食べ物を粗末にする習慣がないのは、草薙兄妹の美点かもしれない。卓からあふれんばかりのごちそうを供されても、どんなに口に合わない料理と対たい峙じしても、残さずいただくのは兄だけでなく妹の特技でもあるのだ。実は。

「人前でのろけるなとか、女の子関係でだらしないのもいいかげんにしろとか、言いたいことは小山くらいあるけど。棚たな上あげしてあげるから、食べてったら？」

　気っぷのよさを感じさせる口調で、静花が焼きそばのパックを示す。

「あ、安心してください万里谷さん。こんな屋台ですけど、材料だってきれいなのを買ってこさせたし、水だって汚いホースで水道水ひっぱるとかじゃなしにポリタンクでちゃんとしたのを持ってこさせましたから。衛生面は何の問題もないですよ」

　屋台のジャンクフードがいかにも不似合いなお嬢さまには、きちんと気配りも見せる。

　静花は気が強い分、面倒見のいい姐あね御ご肌はだでもあるのだ。

　何度も口にする〝こさせた〟発言でも、それは明らかだった。この屋台を本来仕切るはずだった『浅草のおじいちゃんちの若い衆』にさんざん指示を出していたのだろう。彼らの姿が見えないのは、何か言いつけられて買い物にでもいったのか。

　静花の言葉を聞いて、祐理が目を輝かせたとき――。

　護堂はハッとした。全身に力がみなぎってくる。

　これは迎撃準備である。倒すべき『神』が近くにいることを察して、神殺しであるカンピオーネの心身が戦闘態勢に入ったのだ。

「……悪い。俺と万里谷はまだちょっと用があるんだ。あとでまた来る」

　護堂はとっさに祐理を見つめた。誰より霊感の鋭い媛巫女も聖なる存在の気配を感じ取ったようで、すぐにうなずきを返してくれる。

「申し訳ありません、静花さん。またのちほど」

「あ、はい。ってお兄ちゃん、万里谷さんを変なところに連れてったらダメだからね！」

　妹へ丁てい寧ねいに会え釈しやくしてくれた祐理を連れて、護堂は屋台からはなれていった。

　叱しつ声せいを背中で聞きながしながら、縁日をやっている参道からそれて、鎮守の森に入る。何が起こるかはわからないが、人のすくないところに行くべきだった。

　人ひと気けのない雑ぞう木き林ばやしのなかを祐理とふたりで足早に歩く。

　とりあえず、めざすのは神社の境内。あちらには、まだ正史編纂委員会の関係者とひかりしかいないはずだった。が、その矢先に祐理が叫んだ。

「護堂さん、あちらを！」

祐理が見つめる先に視線を向ける。雑木林の奥に闇やみがわだかまっている。

その闇のなかに、護堂は切れ長の双眼を見み出いだした。目、だけである。誰もいない。人の姿はない。ただふたつの眼球だけが宙に浮かんでいるのだった。

そして、護堂がその両目から神の気配をたしかに感じ取った瞬間——。

第三の目が開いた。切れ長の双眼の上、人間の顔でいえば額ひたいにあたる位置が縦たてに裂け、三つ目の眼球が現れたのである！

同時に、護堂は愕然とした。

カンピオーネの肉体は常に膨ぼう大だいな量の呪力をたくわえている。その呪力がいきなり二割ほど目減りした。あの第三の目によって削けずり取られたのだと、護堂は直感した。神殺しの肉体から権能の源である呪力を奪う——一体どんな性質の神が顕けん現げんしたのか？

来きたる戦いにそなえて、頭が勝手に動きはじめた直後。

「ヨナタンの弓よ。鷲わしより速く獅し子しより強き勇士の器うつわよ——！」

ダヴィデの言こと霊だまが響きわたった。

護堂と祐理の背後より飛来したのは、青き光の矢。これが射い貫ぬいたのは、さっき開いたばかりの第三の目。みごとな弓の技であやまたず貫つらぬいてみせた。

「御無事ですか、草薙護堂!?」

凛りんとした声と共に射手も駆けよってくる。顔を見るまでもない。遅れて合流する予定だった銀髪の騎士、リリアナ・クラニチャールがついに到着したのだ。

頼もしい味方の出現に護堂は大きくうなずいた。

あらためて妙な『目』の相手を——と思ったら。闇の奥に顕れ出いでた三つ目の神はいつのまにか消えうせていた。

「何だったんだろうな、今のは……」

「顕けん聖せい——二じ郎ろう真しん君くん……」

　思わずつぶやいたら、祐理のささやき声が応えてくれた。すぐに媛巫女を見つめる。何か霊視を得たのか、彼女は美しい面おも差ざしに畏い怖ふの感情を浮かべていた。

　けんせい・じろうしんくん。

　不思議な響きの名を草薙護堂がはじめて耳にした瞬間だった。

2

　とある神社の敷地内で、草くさ薙なぎ護ご堂どうは得え体たいの知れない『三つ目』と遭遇した。

　それから十数分後、甘あま粕かす冬とう馬まが駆けつけてきた。実は忍者（！）の末まつ裔えいだという正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのエージェントである。

「ははあ。顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くん……と、祐ゆ理りさんはおっしゃいましたか」

　霊れい視しを受けて媛ひめ巫み女こがつぶやいた名前に、甘粕は眉まゆをくもらせた。

　尚なお、当の託たく宣せん者しやは席をはずしている。妹のひかりが全力で禍まが祓はらいを使ったせいでひどく消しよう耗もうしてしまい、姉の祐理が家までつきそって帰らせることになったのだ。

「甘粕冬馬。その名前、たしか中華圏の神だったように思うのだが……」

　さっき駆けつけたばかりのリリアナ・クラニチャールが訊たずねる。

彼女は博識だが欧おう州しゅうの出身。さすがに中国神話には精通していないようだ。

「正解ですよ、リリアナさん。治ち水すいを司つかさどる道どう教きようの神様なんですが、むしろ怪物退治の神としての方が有名かもしれません。『顕聖』の二字が示すように」

甘粕がごていねいにも漢字をメモに書いてくれた。

顕聖。聖をこの世に顕あらわしめる——。

「特に有名なのが、天界と地上で大暴れした孫そん悟ご空くうをとらえたエピソードでして」

半月ほど前に聞いた名乗りを護堂は思い出した。

——我が姓は孫、名は悟空。斉せい天てん大たい聖せいの号を得たり。日につ光こうの地に再さい臨りんした猿形の軍神が告げたものである。

「もしかして、この間の斉天大聖と今回の件、何か関係があるのか？」

凛り々りしい女騎士の口調でリリアナがコメントする。

プライベートではあわて者だったり、精神的な揺さぶりに弱い銀髪の少女。だが、戦いや緊急時では十分以上の生き真ま面じ目めさと冷静さを発揮できるのだ。

「そちらも当たりです。……ご存じのとおり、竜神・蛇じや神しんの脅きよう威いから日本を守護するため、日につ光こう東とう照しよう宮ぐうに配された神が中華の大英雄・斉天大聖だったわけですが」

甘粕はふぅとため息を吐きながら語った。

「そのために御ご老ろう公こうをはじめとする幽かく世りよの古老方は、日光の地に斉天大聖封じの呪じゆ術じゆつ『弼ひつ馬ぱ温おん』を仕込みました。実はですね。あの術の核となるのが顕聖の神・二郎真君ゆかりの聖なる符ふ——破は邪じやの力を持つおフダだったんですよ」

「御老公……清せい秋しゅう院いん恵え那なを守護するスサノオという神か」

「はい。大聖がいなくなった以上は用なしですから、われわれ委員会が回収しまして。で、せっかくの破邪の符だからと、かねてよりの懸けん案あんを解決するため役立てようと実験してみることになったんです」

「もしかして、ヴォバン侯こう爵しゃくの権けん能のうを破れるのではと？」

　あきれ気味にリリアナが言うと、甘粕は肩をすくめて苦笑した。

「いや、関係者のなかでもエース級のふたりが思いつきとノリにまかせて、人助けのためだしって突っ走っちゃいましてねー」

「ノリでそんなチャレンジするなとか、言いたいことはいろいろありますが」

　無責任に白状した甘粕へ、護堂は訊ねた。

「問題のおフダって、今どこにあるんですか？」

「若いとはいえ、正史編纂委員会の幹部が無責任な実験をしたものです」

　やや憤ふん慨がいした感じでリリアナが訴えた。

　彼女と護堂は委員会の車で港みなと区くまで送ってもらったところだった。今は徒歩で新たな目的地をめざしている。

「おかげで草薙護堂、あなたが妙な輩やからに襲われることになって……」

「べつにいいじゃないか。塩の柱にされた人たちも助かったんだし」

　持ち前の鷹おう揚ようさと適当さを発揮して、護堂はさらりと言ったのだが。

　まじめな性格のリリアナには異論があるようだった。

「それはもちろんそうですが、どうも沙さ耶やの宮みや馨かおるからはエリカと同じ気配を感じます」

　沙耶宮馨。これから訪ねる人物のフルネームだった。

　まだ高校生だが、関東地方の正史編纂委員会を統とう括かつする責任者なのである。

「エリカと同じだって？」

「はい。目的を果たすために手段を選ばない、のではなく。自分好みの手段を実行するために、目的をむしろ選びさえする——という点で」

「……なるほど」

　エリカと馨、共に策さく士しであり頭脳派である。そのうえ、ふたりとも冷徹なマキャベリズムの原理主義者ではない。余裕があれば『思いつくなかでいちばん面白そうな策を実行』したり、『伊だ達てと酔すい狂きようを仕事に持ちこむ』数す奇き者ものなのである。

　やがて、話すうちにふたりは目的地へ到着した。

　学校の前だ。校門から出てくる女子たちを数人ほど見かけた。黒い制服姿である。

　一見すると地味なのだが、よく見るとなかなかに洗練された独特のデザインだった。ここは都内でも有数の学力と伝統を誇る、名門女子校なのだ。

「馨さんも実は高校生なんだよなあ」

　しかも、女子高生。護堂はしみじみとつぶやいてしまった。

　委員会の幹部にして、媛ひめ巫み女ことしても高位の実力者。だが、あらゆる意味で『女子高生♪』の対極に位置する人物だった。

　さっき早急に会いたい旨むねを電話で打だ診しんしたところ、こう返答された。

『今、文化祭の準備をしてるんですよ。もうすこしで自由の身になれます』と。

　学校・文化祭という言葉に違和感を覚えつつ、迎えにいくことにしたのだ。

　護堂は校門の近くに陣取り、馨を待ちはじめた。女子校の前に男ひとりであれば、ずいぶんと落ち着かない状況である。しかし、今日はリリアナがいてくれる――。

「どうかしたのか？」

　銀髪の少女がそわそわしていたので、護堂は訊ねた。

　ふたりとも所属する城じよう楠なん学がく院いんの制服姿。しかも、リリアナはさまざまな理由で目立つ。校門から出てくる女生徒たちにちらちらと見つめられ、落ち着かないのかと思いきや。

　リリアナは憂ゆう鬱うつそうにささやいた。

「こういう『女の園』みたいな閉へい鎖さ環境には、あまりいい思い出がないもので」

「何かイヤなことでもあったのか？」

「ええ。何年か前、エリカといっしょに女子だけの寄宿学校に何か月か潜入する羽目になったのですが、そのときにいろいろ……」

「寄宿学校って、まさかいじめとかか!?」

「いいえ。むしろ逆です。どういう理由からか、わたしとエリカはなぜかあそこの人気者になってしまったのです。エリカはああいう女ですから器用に立ちまわっていましたが、わたしの方はちょっと……」

　護堂は深くうなずいた。

　エリカが行く先々で人気者になるのはいつものこと。

　そして、リリアナのように美しいだけでなく凜々しさを持ちあわせる女子が人気者になるのも、『その手の集団』ではよく聞く話であった。

「何をするときも取りまきみたいな子たちにつきまとわれて、ひとりで食事もできない状況にはかなりイライラさせられました……。おまけに、それを見てエリカが面白がるわけです。この機会にサロンを開いてみたらどうだとか何とか……」

「そのノリでいくと、馨さんもすごい人気がありそうだな……」

　あいづちを打ったとき、護堂の携帯電話が震えて着信を報しらせた。

　馨から、ではない。祐理からだった。ひかりを家まで送ったあと、こちらに合流する段取りになっていたのだ。

「これを静しず花かさんから預かってきました」

　正史編纂委員会の車で送迎してもらったという媛巫女から、護堂は焼きそば入りのビニールパックを受けとった。まだ温かい。

「ひかりを車に乗せる前、ご挨あい拶さつにいったときに」

「そういえば、焼きそば食ってけとか言ってたもんな、あいつ」

「あと、護堂さんあてにとご伝言も」

　なぜかはにかみながら、祐理は恥ずかしそうに言った。

「私としっかり仲よくするよう護堂さんに伝えてくれと、静花さんに強く頼まれました。護堂さんのご家族にこういうことを言われるのは、なんだかすごく照れくさいですね……」

　きっと妹は例によって怒り気味に、皮肉を込めて伝言を託たくしたのだろう。

　しかし、よい意味でも悪い意味でも空気を読むのが苦手なお嬢さまは、額がく面めんどおりにその言葉を受けとめたようだ。

　はにかみながらも、祐理はどこか幸せそうであった。

　その姿にどきりとさせられて、護堂は何もコメントしないまま焼きそばを見おろした。青あお海の苔りが入っていないのは、兄に同

行する女子へ気を遣つかったのだろう。

　一方、やや棘とげのある口調でリリアナが言った。

「静花さんがそこまでおっしゃるくらいです。わたしが来るまでの間、万ま里り谷や祐理とふたりきりでお楽しみだったようですね」

「お、お楽しみって変なふうに言うなっ」

「そ、そうです。私と護堂さんはただ……デートをしていただけで——」

「ほう、デート」

「ま、万里谷っ。言葉をすこし選んでくれっ」

「え？　申し訳ありません。私、おかしなことを言ってしまいましたか？」

「いや。貴重な報告に感謝する、万里谷祐理……」

　困る護堂、きょとんとする祐理を眺めて、リリアナがつぶやく。

「考えてみれば、まったく不思議ではない話ですね。草薙護堂、こういうときのあなたはいつだって一瞬の隙すきさえあれば仕事をしてのける方でした。こちらが驚くほど手て際ぎわよく、迅じん速そくに、抜け目なく、天性の狡こう猾かつさを発揮する——」

「ちょっと待てよリリアナっ。こういうときって何だ⁉」

「もちろん、女性との関係を深めるときです」

　謎なぞを解きあかす名探偵のごとき、リリアナの宣告だった。

　護堂は反論すべく口を開きかけた。が、その前に祐理が割って入ってくる。

「ま、待ってください。護堂さんがそういう御方であることにまったく異論はありませんが、それが全面的にいけないことのように言うのはいかがなものでしょうっ⁉」

「い、異論は俺の方にあるぞっ」

「護堂さんっ。先ほど、私との仲にやましいところは何もないと静花さんにおっしゃったばかりじゃありませんか？」

　必ずしも全面的な援護ではない祐理の主張に物言いをつけたら、軽くにらまれた。

　二方向からの攻撃にたじろぎつつ、護堂はそれでも言う。

「それはそうだけど、だからってデートがどうとか人に言うのはさ」

「そ、そのお気持ちはわかりますが、ただ、やはり、まず私たちが毅き然ぜんとしてですね」

「毅然として、ふたりだけでデートしていたと事後報告し、開きなおると……」

「ひ、開きなおるとかじゃない！」

「は、はい。私と護堂さんはべつにやましいことはしていませんし、それに」

　リリアナからの再攻撃に、何か思いついた様子で祐理が言った。

「今はこうして、リリアナさんもごいっしょに三人でデートをしているじゃありませんか」

「「え？」」

　護堂とリリアナの声が期せずしてそろった。

「ええと、男性と女性がいっしょにいて、楽しい時間をすごすのがデート——という認識でまちがいないんですよね？　でしたら、私たちがそうしていると考えるのに、何の問題もないと思います。ちがいますか？」

「……ちがう、ような気もするが、ちがうと断言もできないような——」

　リリアナが渋しぶめの表情でつぶやいた。

「ただ、それならそれでいいという気もたしかにするな……。ま

あ、三人のなかにエリカのような雌め狐ぎつねがいるわけでもないし、べつにいいか」

「リリアナさん、そういうことをおっしゃってはいけません」

「いや、万里谷祐理。つきあいの浅いあなたは知らないだろうが、あの女はときどき悪魔のようなイタズラを洒しゃ落れにならないタイミングで仕掛けてくるんだ。今にして思えば、寄宿学校でわたしが急に人気者になった原因のいくつかはエリカにあったような……」

　祐理のペースに引きこまれたのか、リリアナがぶつぶつとつぶやく。

　護堂はひとまず場が落ちついたことに安あん堵どの吐息をもらした。

　いろいろ問題の芽は残っている気もするが、とりあえず棚たな上あげしようと考えながら。

　このあたりは祐理の素直さと世間知らずぶり、良識家だが決して常識家ではないリリアナのひそかな破は天てん荒こうさ、そして草薙護堂の持って生まれた大おお雑ざつ把ぱさが噛かみ合った結果であろう。三人の会話を聞いて、ある人物が『ボケ三人でコントやってんじゃないんだから！』とツッコミするのは、もうすこしあとの出来事である。

「せっかくだし、静花の差し入れでも食いながら馨さんを待つか」

　護堂の呼びかけで、学校近くの公園へ移動することになった。

　途中コンビニに寄って、おでんや中華まん、ペットボトルのお茶なども買い足す。

「私、こういう食事をしたことがないので、ちょっとわくわくします」

「たしかに、健康的な献こん立だてとは言いがたいからな」

　学校帰りの買い食いとは縁のなさそうなお嬢さまが言えば、批判の割にまんざらでもなさそうな顔でコンビニスイーツを買いこんだ女騎士も応じる。

　三人は公園のベンチに腰かけ、略式すぎる夕ゆう餉げをはじめた。

　護堂がまず口にしたのは、妹が手作りした料理であった。

「うん。特別まずくもなければ美う味まくもない、よくある屋台の焼きそばだ」

「いや、たしかにソースの味が過か剰じようすぎる気もしますが」

「静花さんがせっかく作ってくださったものですし」

　遠慮なく言ったところ、リリアナと祐理にたしなめられてしまった。

　とはいえ、Ｂ級グルメの頂点をめざすわけでもない縁日の屋台。そして、味よりコスト優先で仕入れたはずの食材。実は調理スキルという点では兄と似たようなレベルの静花——以上の三点を踏まえた、忌き憚たんのない感想であろう。

　放任主義の母と、気ままに家を空あけることも多い祖父に育てられた草薙兄妹きようだい。

　台所に立つことへの抵抗感はまったくないが、決して料理上手ではないという共通点を持っているのだった。そして、食事が終わる頃。

　護堂の携帯電話に、今度こそ馨からのメールが届いた。

「王自みずからのお出迎え、恐縮至し極ごくに存じます。護堂さん」

　と、沙耶宮馨は丁てい寧ねいに頭を下げた。

　校門から出てきた直後、護堂の顔を見た瞬間の行動である。だが、大おお仰ぎような言葉に反して、口元に浮かぶ微笑は洒しや脱だつそのもの。頭を下げる仕草も優美であった。馨らしいパフォーマンスにいつもなら微苦笑するところなのだが。

　代わりに護堂はこう訊ねた。

「馨さん……その格好は？」

「なかなかいいでしょう？　特別にあつらえた一点物なんですよ」

　馨の美び貌ぼうはあいかわらず中性的である。

　体つきもひどくスレンダーで、いつもどおり美少女にも美少年にも見える。

　クラシカルな少女漫画に登場する美少年。あの儚はかない美貌を彷ほう彿ふつさせる容姿なのだ。そして今日、馨が身につけているのは灰色の学ランであった。男物である。

「ここ、女子校でしたよね。その制服（？）、校則違反じゃ」

「ふふふ。さすがにセーラー服は着られませんからね」

　戸籍上の性別を無視するかのように、馨は語る。

「ぼくに似合う制服を自分で用意したんですよ。いや、こいつを入学初日から着用できるよう、先生方や生徒会、ＰＴＡまで丸めこむのはちょっと骨が折れました」

　持ち前の話術と交渉力、美貌と智力をフル活用しての裏工作だったのだろう。

　せっかくの有能さをそんなところで浪費しなくてもと思いつつ、護堂は批判的な感想を短くまとめることにした。

「最初から私服ＯＫの学校に通うって選択肢もありだったんでは……」

「ほら。高い山があったら、やっぱり登ってみたくなるじゃありませんか。それに、ここの制服（）が結構好きだったもので」

　ここで（）内に付け足すべきは『の女子を観賞する』だろう。

　ひそかに脳内で補足する護堂であった。

　その間も、脇わきを女生徒たちが通りすぎていく。「ごきげんよう馨さま」「ごきげんよう」などと時代錯誤な挨拶をし、次々と頭を下げるおまけ付きだ。

　みんな、馨の顔と名前を知っているらしい。さすがの人気者ぶりだった。

「ところで、校門に来るなら俺ひとりで頼むってメールにありましたけど、何でですか？」

　だから祐理・リリアナを残し、護堂はひとりで迎えにきたのだが。

「祐理やリリアナさんみたいな女子とぼくがいっしょにいるのを見たら、うちの学校の子たちが嫉しつ妬としちゃいますからね。護堂さんは男子だからいいですけど」

「……そこはふつう逆ですよ」

　どうやら、ファンの目をおもんぱかったらしい。

　女子校所属の女子高生にあるまじき気配りを語った馨と共に、護堂はさっきの公園へと移動した。リリアナ・祐理とも合流し、正史編纂委員会の自動車を呼んでもらう。

　みんなで次に向かったのは、千ち代よ田だ区く三番町の洋館である。

　沙耶宮家別邸。甘粕のような委員会関係者もひんぱんに出入りする場所だった。

　馨は護堂たちを書斎まで案内した。

「顕聖二郎真君ゆかりの霊れい符ふ……あれがまさか、カンピオーネである護堂さんに害を加えようとするとは——。申し訳ありません、僕たちの見通しが甘かったようです」

「でも、どうして俺おれを狙うんでしょうね？」

　馨の謝罪を聞きつつ首をかしげたら、祐理がつぶやいた。

「もしかすると、護堂さんだから狙われたのかもしれませんね」

「何か視みえたのか、万里谷？　霊視のお告げがあったとか？」

「あ、いえ。そうではなくて。ちょっと申し上げにくいのです

が……」

「……そうか。わたしもわかったぞ」

　まだ呑のみこめない護堂をよそに、リリアナまでうなずく。

「二郎真君が破邪顕聖の神であるなら、たしかに草薙護堂を狙うのは筋が通る。斉天大聖・孫悟空を退治するほどの善神なら、尚なお更さらだ」

「すごいな、ふたりとも。その理由、教えてくれ。俺にはさっぱりわからないよ」

　護堂の頼みにもかかわらず、ふたりは言いにくそうにしていた。

　馨はといえば、微苦笑しながら気の毒そうな視線を祐理・リリアナに向けている。ややあって、まず祐理が口火を切った。

「つまりですね。ヴォバン侯爵の権能さえ弱めてしまうほどの、破邪の器うつわなら」

「あの御老人に見劣りしないほどの魔王に成長された草薙護堂も、やはり破るべき『邪』として認識するのではないかと……」

　リリアナも補足する。護堂はハッと気づいた。

「つまり、俺が世間に顔向けできないような悪行をさんざん繰りかえしてきたから⁉」

「「そうなりますね」」

　祐理とリリアナにそろって認められ、護堂は悄しよう然ぜんとうなだれた。

　一方、馨は書斎の机に置いてあった桐きりの箱を手に取った。

「そのあたりの原因はともかく、これが問題の符ですが——ん？」

　言いかけて、馨は非実在青少年風味の美貌をしかめた。

　あわてて、ふたを開ける。異常を感じ取ったらしい。祐理ほどではないが、馨もすぐれた霊視力者なのだ。護堂たちも箱をのぞき込む。

　……空からだった。桐箱には何も入っていなかった。

「昨日まではまちがいなくここにあったのですが、いつのまに……」

　謎なぞを面白がる名探偵めいた雰囲気で、馨がささやいた瞬間だった。

　護堂はハッとした。いきなり全身に力がみなぎったのだ。近くに『神』がいる——否いな、やってきたのか？

　その居場所を探す前に、祐理が叫んでくれた。

「うしろ——馨さんのうしろです、護堂さん！」

　机のそばに立つ沙耶宮馨。その背後に例の『三つ目』が顕れていた！



正史編纂委員会の若き幹部がここで見せた行動はみごとだった。

うしろを振りかえるような真ま似ねはせず、即座に護堂の方へ駆けよろうとしたのである。

神・神獣の類たぐいが顕れたのなら、余計な行動は一切しない。できうるかぎりの速さで神殺しの背に隠れ、庇ひ護ご下かに入るべし。

その最さい善ぜん手しゆを一秒も無駄にせず、実行にうつす——。

さすがというべき判断の速さ。だが、まにあわなかった。

宙に浮かぶ『三つ目』。切れ長の双そう眸ぼうと縦たてに裂けた三番目の目。それぞれの瞳ひとみが同時に青い光を宿し、輝きを放つ。

その瞬間、馨の瞳も青く輝いた。

ひらり。馨のスレンダーな肢し体たいが颯さつ爽そうと躍動する。護堂の背に隠れるためではない。

あざやかなまわし蹴げりで護堂の横っ面つらを蹴りとばすために、である。奥深い武芸への造ぞう詣けいを感じさせるキレが、その動きにはあった。

「哈ハ——！」

気合い声と共に放たれた馨の上段蹴りは、鋭く、速かった。

護堂はとっさに腰を落とし、あえて尻しり餅もちをついた。

今まで顔面があった高さを、馨の足が切り裂く。下へ手たに避けようとしたら、この蹴りを喰くらってしまっただろう。自みずからの判断が正しかったことを確信しながら、護堂はごろごろと絨じゆう毯たんの上を転がった。馨から距離を取るためだ。

転がった勢いを利用して、すぐに立ちあがる。

見み栄ばえのいいアクションではないが、これでいい。ノーダ

メージで攻撃を切り抜け、体勢も立て直せたのだから十分だった。

「気をつけてください！　顕聖の符に宿る二郎真君のご意志が馨さんを操っているようです。邪である護堂さんを討とう伐ばつするために！」

　霊視を得たのだろう。祐理がつづいて警告してくれた。

　見れば、たしかにいつもの馨ではない。全てを面白がるような数奇者の目と儚げな美貌はどこかに消えうせていた。その青く輝く瞳には凜々しい闘志がみなぎり、美びゞびしくも勇壮な華やかさで美貌もまばゆく彩られている！

　そして、灰色の学ラン姿がふたたび躍動し、護堂を攻撃しようとしたとき。

「正気にもどれ、沙耶宮馨！」

　護堂と馨の間に、リリアナがとっさに割って入った。

　邪魔者を排除する気になったか、青い目の馨がさっと左手を突き出す。

　拳こぶしを縦にして、銀髪少女の顔面を狙う上段突き。護堂は目をみはった。さっきのキックもそうだったが、中国武術の動きである。

　馨が放った突きを、リリアナは右腕で払いのけようとした。

　愛用の魔剣を抜かないのは、馨の体を傷つけないための配慮だろう。だが、『破邪の意思』に操られた馨はリリアナの腕を無造作に拳ではたき落とした。

　銀髪の女騎士が「⁉」と顔色を変える。驚きよう愕がくだった。

　だが、負けじと馨につかみかかろうとして――次の瞬間、うずくまってしまう。

　馨が左手の人差し指をのばし、リリアナのみぞおちを『ちょん』と押したせいだ。

「くっ。点てん穴けつとかいう技か……！」

うずくまったままリリアナがうめく。体が麻ま痺ひして、動けないようだ。

人体のツボ・急所を突くことで、敵を自在に制圧する――。

いかにも大中華の魔教教主が使いそうな一手であった。みぞおちに『鳩きゆう尾び穴けつ』なるツボがあることは、彼女の直じき弟で子しが教えてくれた豆知識である。

次は自分の番か――。

護堂がみがまえた瞬間に、馨の口が「哈ハ！」と気合い声をふたたび放つ。

すると祐理が「きゃあっ」と叫び、へなへなとへたりこんだ。今の声に打たれて、腰が砕けたらしい。しかも、制服のスカートから見える両足はがたがたと震えていた。

力が入らず、祐理は立つこともできないようだ。

気合いひとつで媛巫女を無力化した馨は、今度こそ護堂の方へと向きなおる。

その美貌の輝かしさは、中天に昇った太陽さながらだ。『正義』『善』『英雄』という看板がひどく似つかわしい表情を見て、護堂はつぶやいた。

「……もしかして、万里谷を巻きこまないためか？」

リリアナのような真似をされる前に、まったく傷つけない形で無力化――。

そう配慮したのではないか。倒すべき『邪』は草薙護堂だけだからと。護堂の疑惑を認めるように馨の美貌は微笑する。直後、彼女の手に一振りの刀が忽こつ然ぜんと顕れた。

それは三さん尖せん刀とう――先端が三つ叉またに分かれた大刀だった。

日本の刀剣ではない。やはり、中国の刀である。三尖刀を持つなり、馨の体は機敏に護堂めがけて踏み込んできた。

護堂に対しては、『善なる者』として慈じ悲ひを示すつもりはないのだろう。

躊ちゅう躇ちょなく袈け裟さ懸がけに振りおろしてくる。この三尖刀をあえて避けなかった。

目の前にいる敵は民衆を苦しめる大罪人でも、並はずれたバカ力でもない。この武芸の腕前なら、『鳳おおとり』の神速に対応できる可能性も高い。

ここで頼れる化け身しんはひとつしかなかった。

護堂の左肩に三尖刀の刃が当たる。斬ざん——。皮、筋肉、鎖さ骨こつ、肋ろつ骨こつ等を斬きり裂さきながら、三尖刀は護堂の心臓をめざす。これを阻はばむのは、地上最硬の金属より硬いかもしれないカンピオーネの骨。とてつもない熱さと痛みが護堂の心身を引き裂きにかかる。

左腕が肩からちぎれかかったところで『駱らく駝だ』の化身を使う。

間に合ってくれた。まだ三尖刀は心臓まで届いてない。

その前に武神たちと互するほどの格闘能力とキック力を得られた護堂は、やわらかな前蹴りを馨に繰りだした。足裏で突き放すようなキックである。

スレンダーな馨はこの一蹴りで吹っ飛ばされた。

とはいえ、あくまで突き放しただけ。馨の体にダメージはあたえていない。

権能の掌握が進んだ今は、『駱駝』の破壊力もある程度コントロールできるようになっていた。だから、こんな芸当も可能になる——。

馨を前蹴りで突き放したあと、護堂は蹴り足を降ろさず、まわし蹴りにつなげた。

上段のハイキック。ただし、直撃はさせない。足先を馨のこめかみにかすらせて、彼女の脳を揺らす。最小限のダメージで脳のう震しん盪とうを起こさせ、馨を無力化させるためだった。

　これが上う手まくいって馨は気を失い、スイッチが切れたように倒れこんだ。

　気を失った馨、体がしびれているリリアナ、まだ腰が砕けたままの祐理。

　女子三人はさんざんな状態だ。しかし、ピンチは乗り切れた。

　意識のある祐理とリリアナにうなずきかけると、ふたりはホッとした表情を見せてくれた。

「二郎真君さまのご意思……どうやら、この屋敷から去られたようですね」

「そのようだな。だが、ずっと草薙護堂のおそばにいた万里谷祐理やわたしではなく、沙耶宮馨に憑ひよう依いしたのはなぜだ？　もしかして、破邪の霊符を使った者だからか？」

　祐理とリリアナの言葉で、護堂は思い出した。

　甘粕の発言。『関係者でもエース級のふたりが突っ走っちゃいまして』。そのひとりが馨で、もうひとりは——。

　いやな予感が護堂の胸の裡うちで首をもたげてきた。まさか。

「その予想がもし正しかったら、次に取り憑つかれるのは清せい秋しゆう院いんにならないか？」

　二郎真君ゆかりの品だという霊符。馨といっしょにこれを試した片割れは、媛巫女筆ひつ頭とうの称号を持つ護堂たちの仲間なのだ。

　祐理がハッとして、すぐ携帯電話を取り出した。

「わ、私、恵え那なさんと連絡を取ってみます！」

　腰が砕けただけで、上半身を動かすことは問題ないのだろう。

　たどたどしい手つきで電話帳を呼び出し、コールする。しかし、すぐにうなだれた。

「つながりません……」

　護堂は思わず右腕を見つめた。

　ここに宿る神刀は、清秋院恵那にとっても『相棒』というべき存在。そして、ふだんは怠たい惰だなくせに荒事の時だけはお節介なほど面倒見がよくなる性格だ。

　そして距離を隔へだてていても、恵那との間には霊的な絆きずなを保っているらしい——。

「なあ……。もし清秋院も厄介なことになってるなら、あいつに伝えてくれ」

　女子たちを介かい抱ほうすべきだとはわかっている。だが、護堂は逆に書斎を出た。

　ひとり沙耶宮家別邸の廊ろう下かを足早に歩き、庭をめざす。

「危ないときは、俺の名を呼べって。そうしたら、助けにいけるからって……」

　ついに玄関を出て、東京のくすんだ星空を見あげたとき。

　護堂は遥はるか遠方よりの呼び声をかすかに聞いた。——王様、こっちはちょっとヤバそうな感じになってるよ。早く来て、と。

　その瞬間、護堂の足もとから微風が巻きおこる。

　微風は渦うずを巻きながら速さを増し、やがて強力な旋せん風ぷうへと成長を遂とげた。

　窮きゆう地ちにある誰かが護堂の名を唱えたとき、そのもとに飛んでいける。それが第一の化身『強風』である。

　何処いずことも知れない地に草薙護堂を運ぶため、この力が行使されたのだった。

うずまく『強風』によって導かれ、護ご堂どうは見知らぬ土地へやってきた。

ウルスラグナの権けん能のうによる瞬間移動の結果に、すぐにうなずく。

砂じや利りの多い渓けい流りゆうの岸辺で、あざやかに紅葉した雑ぞう木き林ばやしの色合いが目に飛び込んできた。

どこかの山中であることは明らかだった。護堂をここに〝呼んだ〟清せい秋しゆう院いん恵え那なは、日課のように山やま籠ごもりをこなす少女なのだ。

当の彼女が数メートル先にいた。

いつもはどこかの高校の制服を恵那は身につけている。しかし、今は和装だった。白い着物に男物の朱あかい袴はかま、足もとは下駄。山やま伏ぶしと巫み女この衣装を折せつ衷ちゆうしたような格好だ。

そして、木刀を青せい眼がんにかまえている。

その切っ先が向く方向にいるのは——見覚えのある三つ目！

宙に浮かぶ切れ長の双そう眸ぼうと、縦たてに裂けた三番目の目であった。護堂は叫んだ。

「清秋院！　そいつは二じ郎ろうなんとかって神様の意思らしいぞ！」

「二郎……もしかして、顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くん？　こいつ、恵那の体を乗っ取りたいみたい。ついさっき、不意を打たれそうになっちゃったよ」

木刀と視線を敵からそらさぬまま、恵那はあっけらかんと言った。

だが、口調にそぐわぬピンチであったことは、護堂に『強風』の化け身しんを使わせた事実からも明白だ。さすが太た刀ちの媛ひめ巫み女こというべき剛ごう胆たんさだった。

「これ、神様というより、神様がこの世に遺のこした意思の一

部……そんな気がする。実体はないようだから、恵那が取り憑つかれないかぎり、変なことにはならないと思うよ」

　恵那の言葉に、護堂は大きくうなずいた。

　秘術・神がかりの使い手である彼女は、誰よりも神と接する経験が多い。そのうえ動物的な直感力の持ち主。きっと当たっているはずだ。

　しかし、護堂も恵那もすぐに驚きよう愕がくで目を見ひらいた。

　すでに陽ひは暮れており、頭上は満天の星空。その夜空より、きらきらと明滅する青い光の玉が落ちてきたのである。

　それは舞い降りる雪のような、ゆっくりとした降下だった。

　青い光の玉は三つの眼球の上に落ちる。

　次の瞬間、『三つ目』は背の高い青年の姿に変化を遂とげた。凜りゝりしくも端整な美び貌ぼうである。身につけた衣装は京きよう劇げきの舞台を思わせる、派手派手しい中国のもの。斉せい天てん大たい聖せいがまとっていた武将の衣ころもと似ていた。

　そして、当然のように彼は三つ目だった。縦に裂けた第三の目が額ひたいにある！

『玉ぎよく皇こう大たい帝ていが甥おいにして天地両軍の将、二じ郎ろう顕けん聖せい真しん君くんの名を見知りおけ。草くさ薙なぎ護堂、悪あしき魔王たる君は我わが誅ちゆう伐ばつの対象である。覚悟したまえ』

　美青年は名乗ると同時に、さわやかに微ほほ笑えんだ。

　その笑顔には自みずからを無む謬びゆうと信じる者特有の輝きが満ちている。

　だが、名乗りの声は颯さつ爽そうとはしていなかった。ささやき声だった。本来なら聞こえるはずのない音量は、あやしい神力によって護堂と恵那の耳元に届けられた——。

「神様に……なった？」

「神の遺い志しだか思い残しだかに体がくっついたってことかよ……」

　いきなりの変化にふたりはいぶかしむ。しかし、詮せん索さくしている暇ひまはない。

　二郎真君の手に刀が顕あらわれたからだ。刃の先端が三つ叉またに分かれた——三さん尖せん刀とうが！

「王様、あぶない！」

　三尖刀を振りあげながら、二郎真君が護堂めがけて斬きりかかってくる。

　その前に恵那が立ちはだかった。守ってくれるつもりなのだ。しかし、彼女が手にした得え物ものは只ただの木刀——護堂はとっさに叫んだ。

「天あまの叢むら雲くも！　清秋院を頼む！」

　これを聞いて恵那の方も事情を呑のみ込み、とっさに木刀を捨てた。

　空になった手のなかに忽こつ然ぜんと顕れるのは天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。日本刀風の拵こしらえと、ゆるく反そった黒き刀身を持つ神刀だ。相棒というべき刀で恵那は二郎真君に斬り込んでいった。

　神と媛巫女それぞれの刀が真っ向からぶつかりあう。

　そのまま両者は二合、三合と斬り合いを行い——護堂と恵那はふたたび目をみはった。

　恵那の太刀さばきをいなしきれなくなり、二郎真君が大きく跳びすさったからだ。恵那はたしかに剣の名手。しかし、武神・闘神とされる神々を圧倒するほどの技ぎ倆りようはないはず。それなのに、どうして退さがる……？

『——ふふ。やっつけの体だけあって、なかなか動かすのがむずかしい。暫しばし待て。この身に今すこし慣れてから、出直して参るゆえ……』

　神のささやき声だった。直後、三つ目の美青年は煙のように消えうせてしまった。



「あー。あれ、恵那たちが原因で出てきた神様なんだ。ごめんごめん」

「べつに責める気はないけど、『ごめん』はもうすこし殊しゅ勝しような感じの方がいいぞ……」

　一連の事情を語ったあと、能天気な謝罪に意見を唱える護堂だった。

　恵那いわく、この山は奥おく秩ちち父ぶの一隅なのだという。例によって山に籠もり、深しん山ざん幽ゆう谷こくの霊れい気きで心身を清めていたらしい。

「だったら、あの妙な神様（？）はここで迎え撃とう。どうせ俺を狙ねらって向こうから来るだろうし、山のなかなら人や街に迷惑かけずにすむ」

「うん、了解。その線でいこう」

　にたりと恵那が笑って、あっさり賛成の意思を示す。

　実は草薙護堂と清秋院恵那、似たもの同士である。どちらも動物的に勘かんがいいうえ、悩むより先に体が動く性分。緊急時には即断即決で事を進めていく。

　このふたりの組み合わせで、作戦会議が長びくことはまずありえなかった。

「あとの問題は、やつをどこで待つかだな。このままここにいてもいいんだけど、だいぶ冷え込んできたしなあ」

　さっきまで護堂がいたのは、東京の都心部である。

　だというのに、今は秋が深まりつつある奥秩父の山中。標高もだいぶ高くなった。着ているのはあくまで街用の上着で、しかも夜。空気も風もだいぶ冷たく感じる。

「じゃあ、いいところに案内するよ。ちょっと歩いていくと山小屋があるんだ」

　すかさず恵那が言ってくれた。

「知り合いのじいちゃんが山菜採とりや猟でこの辺に来たとき使ってるやつでさ。恵那も非常用の米とか味み噌そを置かせてもらってるんだ。だから晩御飯も作れるよ」

「晩飯か。そりゃいいな」

　すでに早めの夕食をすませていたが、ボリューム的にはやや物足りなかった。また、冷えた体にあたたかい食事はありがたい。護堂は目を輝かせた。

　かくして、ふたりは山道を進みはじめたのである。

　ちなみに恵那は出発前、持っていたメモ紙と油性ペンで手紙をしたためた。

　四つ折りにたたんで宙に投げると、手紙は忽然と消えうせる。遠方に書状を届ける『投とう函かん』の呪じゅ術じゅつだ。送った先は沙さ耶やの宮みや家け別邸だった。

　馨かおるや祐ゆ理り、リリアナに状況を報しらせるため、護堂が頼んだのだ。こんな山中では携帯電話もつながらないからと。とはいえ、この術は相手の所在地がはっきりしていないと使えない。だから、向こうからの連絡を受けとることはできない……。

　最低限の連絡義務を果たしたあと、恵那の案内で山道を登っていく。

　渓流の岸辺を上流の方へ歩き、木立をかき分け、ときには獣けもの道みちを進む。

　これを夜の山中で行うのである。もちろん街灯などない。空が見える場所なら、月と星空が照明代わりになってくれる。夜の天幕をいろどる天体たちは意外に明るい光源なのだ。

　しかし、鬱うつ蒼そうと茂る木々の間を進むときはその恩恵もない。

　そういうときは、ねっとりと体に絡からみつくような闇やみのなかをさまよう。道しるべは前を行く恵那の背中だけ。慣れた登山家でも前進を躊ちゅう躇ちょするシチュエーションだろう。

　だが、草薙護堂はカンピオーネである。

　実は神を殺あやめた者の〝特異体質〟で、かなり夜目が利きく。

　まあ、一筋の光すらない真の暗黒を見とおすことはさすがにできない。しかし、〝この程度の闇〟であれば、さほど苦にならないのだ。護堂は夜に活動する獣のように、恵那を追いかけていくことができた。

　そういえば、誰かが護堂たちを『神殺しの獣』と呼んでいたような――。

「まあ、夜目が利いても山道が得意なわけじゃないけどな……」

　つぶやきつつ、護堂は恵那のあとについていく。

　山籠もりをなかば日常とする自然児だけあって、恵那は夜の山道でも軽快だ。背中には荷物を入れるための箱――山伏の世界でいう『笈おい』を背負っているのに。

　気合いを入れて追いかけないと、すぐ引き離されてしまう。

　とはいえ、身軽さでは負けても息を切らせたりはしていない。体力自慢としては、なんとか最低限の面目を保てているところか。恵那が〝素人しろうと〟に合わせてペースを抑えている可能性はかなり高そうだが……。

　結構歩いたところで、ふたたび渓流沿いにもどってきた。

　さっきよりも上流の地点らしい。ここで護堂はふと思いついた。

「晩飯にするなら、この川で魚を釣ってみるのも面白いかもな」

「ああ。あんまり釣れないから、やめといた方がいいよ」

「そうなのか？　水もきれいだし、魚には結構住みやすそうに見えるけど」

　恵那にあっさり言われて、首をかしげたら。

　先を行く太刀の媛巫女はふりかえり、にたりと笑いかけてきた。

「ここから下流へちょっといくと、急な滝があってさ。あそこ、イ

ワナも昇ってこられない魚さかな止どめの滝なんだ。だから、このあたりには魚がすくないんだよ」

「……本当に山奥なんだなあ」

　目の前の流れ、渓流ではなく『源流』と呼ぶべき上流地帯だったようだ。

　感心して護堂はうなずいた。

　体育会系のアウトドア派である。キャンプや登山の経験はそれなりにある。しかし、ここまでの奥地に踏み込んだことはあまりない。恵那の先導がなければ、すみやかに遭難する可能性が大だろう。

　同時に、こんな山中まで瞬間移動させた『強風』のデタラメさにも呆あきれた。

　何しろ『幽かく世りよと現うつし世よの境』すら飛び越えてしまう化身だ。条件さえ満たせば、地球の裏側にだって飛んでいける気がする……。

　そのまま護堂たちは渓流沿いを歩き、ついに山小屋の前までやってきた。

　川から程近い場所に建つ、簡素な木造の小屋だった。

　街ならとっくに取り壊されている年代物だ。薄汚れているうえにガタもきている。

　だが屋根があり、うすい木板とはいえ壁もある。今の状況では三つ星以上の宿だろう。我わが家へ上がりこむような恵那に続いて、護堂もありがたく入らせてもらった。

　初めて会ったとき、恵那は抹まつ茶ちやを振る舞ってくれた。

　一見、無造作なくせに深いたしなみを感じさせる手つきで点たてたお茶は、かなりの美味だった。そして今、恵那は黒くすすけた囲い炉ろ裏りで火を起こし、その上に鍋をつるして湯を沸わかしたところであった。

「たいしたものじゃない、正しよう真しん正しよう銘めいの粗茶だけど……王様どうぞ」

　例によって闊かつ達たつな手つきで恵那がいれてくれた番茶は、やはり美う味まかった。

　この小屋にあった保存状態のあまりよくなさそうな茶葉と、どこにでもある急きゆう須すを使ったのがウソのように深みのある味だ。

　しかし、このあとで護堂は「あれ？」と首をかしげた。

　お茶に使った湯へ、ビニール袋に入れておいた生米をざざっと投入する恵那の手つき。これがひどく雑に見えたのである。『深いたしなみに裏打ちされた自由闊達さ』という雰囲気ではなく、単純に雑であり、適当な感じだった。

「先に断っておくけどさ。恵那の手料理に味を期待したらダメだからね」

「でも、清秋院がいれてくれるお茶はいつも美う味まいと思うぞ」

「そこはほら。茶の湯は昔から武将の心得だったわけだし」

　先祖には戦国武将もいるという武家の娘は、訳知り顔で言った。

　もとの性格はともかく、大和やまと撫なでし子ことして然しかるべき教育はひととおり受けているらしい清秋院家の跡取り娘。しかし、もしかしたら料理は苦手分野なのだろうか？

　疑問に思いつつも、護堂はべつの話題を持ちかけた。

「あの三つ目のやつだけど……神様って呼んでもいいと思うか？」

　さっきの小こ競ぜり合い以来、山歩きしながらも考えつづけていた疑問だった。

　あの三つ目と、それが変化した美青年——。

　どちらと対たい峙じしたときも、護堂の心身には戦うための力がみなぎってきた。だから、神であるはずだとは思う。しかし、それにしては恵那との斬り合いを避けたりと、『まつろわぬ神』らしか

らぬところが目立つような……。

「んー。やっぱり神様なんだろうとは思うよ。顕けん聖せい之の符ふにゆかりの神、孫悟空退治の英雄・二郎真君ってところはまちがいなさそうだし」

　やや適当な口ぶりではあったが、恵那があいづちを打ってくれた。

「何かの事情で力を全開にできないのかもね。よくわかんないけど」

「清秋院もか。じゃあ、俺なんかがあれこれ考えても仕方ないな。万ま里り谷やもいないことだし、この件はひとまず棚たな上あげしよう」

　相手の素性がどうであれ、どうせ迎え撃たなければいけないのだ。

　割り切ることにした護堂は、恵那とうなずき合った。

　理性よりも直感と野性こそを本領とする大おお雑ざつ把ぱなコンビなので、このあたりは阿あ吽うんの呼吸である。エリカがいれば『理屈っぽいことを口ではさんざん言うくせに、最後はいつもそうなのよね、護堂って……』と皮肉をつぶやいたかもしれないが――。

「気になるんだったら、おじいちゃまに訊きいてみようか？」

　いきなり恵那が言った。

「顕聖之符……あれの出所、幽世のおじいちゃまたちなんだよね。日につ光こうに竜退治の英雄・孫悟空を封じるために、どこかから悟空を抑えられる神様の霊符を調達したみたい」

「スサノオたちか。まあ、やめとこう」

　正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの『元老院』にあたるという古老たち。その長老格であるスサノオ――幽世に隠居した暴風神のことを思い出しながら、護堂は即答した。

「あいつが素直に教えてくれるわけない」

「まあね。うん、実は恵那もそう思ってた」

　我が意を得たりという感じで恵那がうなずく。なぜか満面の笑顔だった。

「どうした、清秋院？　にやにやして」

「ふふっ。王様とは気が合うし、恵那と似たようなことを考えてるときが多いから、やりやすいなあって思って。なかなか——ううん、全然いないんだよね。頭のなかが恵那とおんなじふうな感じの人は」

「お、俺はさすがに清秋院ほど破は天てん荒こうじゃないと思うぞ……」

「何言ってんの。王様の方が恵那より一〇〇倍増しくらいでデタラメだよ」

　清秋院恵那は巫女としても大和撫子としても、最高に型破りな少女である。

　その彼女に言われて、思わず反論したくなる護堂だった。とはいえ、我が身の行ぎよう状じようを思いかえしてみると、言葉をぐっと呑みこまざるをえないわけで——。

　そんな内心を見すかしたか、恵那が励ますようにポンポン肩をたたいてくれた。

「元気出してよ。大丈夫、王様がどんなに無茶苦茶な人だって、みんなでちゃんとついてくからさ。恵那たちのことは気にせず、どんどん突っ走っちゃって！」

「むしろ、走り出す前に止めて欲しいくらいだよ……」

「それは面白くないからヤだ。大体、止めたって走るのをやめないでしょ、王様は」

　自信たっぷりに草薙護堂の人格を語ってから、恵那は話題を変えた。

「ところでさ……。王様はもう戦う気になってるんだよね？」

「まあな。二郎なんとかの狙ねらいは俺みたいだし。それにあいつが『まつろわぬ神』なら、でかい揉めごとを引きおこす前におとなしくさせたいだろ、やっぱり」

「じゃあ……あれ。もちろん必要だよね？」

　護堂はきょとんとした。あれとは何だろうと。すると恵那がささやく。

「二郎真君を切り裂くための剣。あの神様の霊符をいじりまわしたくらいだからね。どういう神かを教えるくらい、かんたんだよ。言ってくれたら、すぐに用意してあげる」

「ええっ!?」

　いきなり持ちかけられて、護堂は絶句した。

　そして気づいた。いつのまにか恵那が恥じらいながら、こちらの顔色を探るような上うわ目め遣づかいでうかがっていることに。

「に、日光でいっしょに戦ったときさ。恵那も王様の女だって認めてくれたでしょ……？」

「みみみ認めたというか勢いがつきすぎたというか俺って人間はどこまでダメなヤツなんだと自分で自分に文句を言いたくなったというか！」

「とにかく、王様公認の女だもんね。だから、いいよ……」

「い――!?」

「いくらでも王様に……キスしてあげる。ううん、キスしたい」

　おいおい。キスじゃなくて神と戦うための知識を教えてもらう行為なんだぞ。

　とは、言いたくても言えない護堂だった。やはり、そのための手段が口うつしという衝撃的すぎる行為だからであろう。

「あのときはみんなもいっしょだったし……。恵那もさ、やっぱり王様と一対一でちゃんとしてみたいな……」

　ささやく恵那の唇くちびるが微妙にふるえている。緊張しているのだ。

　こういうことに不慣れな少女が精一杯の勇気を出して、〝おねだり〟をしている。また神と戦うのであれば、やはり切り札となる『剣の言こと霊だま』は作っておきたい。

　それらの想おもいがぐるぐると脳内を渦うず巻まき、そのまま十数秒。

　短い逡しゆん巡じゆん。しかし、それを乗り越えて、護堂はついに思い定めた。手をのばし、スリムなくせに然しかるべき箇か所しょは肉づきのよい恵那の体を抱きよせる。

「頼む。俺に二郎真君とかいう神様のことを教えてくれ」

「あ……」

　ささやきかけながら、恵那の唇を己おのれの唇でふさぎ、奪ってしまう。

　くちゅ。粘膜と粘膜が重なり合い、睦むつみ合う音が護堂の心と勢いに火をつけた。

　一瞬、恵那の唇から口をはなす。いつも遠慮知らずの少女が別離を惜しんで、切ない顔をする。懇こん願がんするような瞳ひとみで護堂を見つめる。しかし、何も訴えられない。

　恥じらっているのだ。ふだんの恵那からは想像もできない表情と態度だった。

　その姿を愛いとおしく思いながら、護堂はふたたび唇を近づけた。

　恵那がパッと表情を明るくする。ふたりの唇が合わさる。あらためてキスをする。幸せそうにうっとりしている恵那の唇を吸いながら、護堂は充足感に満たされた。

「王様。もっと……しよう？」

　恵那の方から誘いの言葉を口にしてきた。

　はあはあと息を荒くする彼女の唇をさらに強く吸い、護堂はキスを激しいものにする。

　一方、恵那は自分で言った言葉を裏切るように、ずっと受け身だった。ただ護堂を受けとめるばかりだった。エリカあたりとちがって、慣れていないのだ。こういうときの振る舞い方をよくわかっていないのだろう。

　そんな恵那を可か愛わいく感じつつ、護堂は舌を差し入れる。恵那の口内へ、である。

「ん……あっ！」

　驚いて恵那がうめく。しかし、護堂はかまわず恵那の舌を探った。

　舌と舌が絡からみ合う。深くつながり合う。ふたりは唾だ液えきでたがいの唇のまわりをびちょびちょに濡ぬらしながら睦み合う。

　十分にキスを重ねたあと、護堂は唇を三み度たびはなした。

　恵那は陶とう然ぜんとして頰ほおを赤らめながら、こちらにうなずきかけてくる。そろそろ『儀式』をはじめようという意思表示だった。護堂は彼女の口に唇をかぶせ、答えの代わりにする。

「け、顕聖二郎真君は古い中国の神。その本領はやっぱり魔物退治にあるんだけど……」

　唇を合わせながら、息も絶え絶えにささやく恵那が愛おしい。

「彼の原型は秦しん代や隋ずい代の武将で、治ち水すい事業で功績をあげた人じゃないかとも言われてる。でも、結局は斉天大聖と同じで、そういう史実やいろんな民間伝承が複雑に混じり合って、二郎真君の伝説は今の形に定着していったんだ……」

　合わせた唇同士が言霊を受け渡し、ふたりの間に呪術の絆きずなが構築される。



　護堂のなかに顕聖二郎真君にまつわる知識が流れ込んできた。全て恵那が言霊を紡つむぎ、送りこんでくれたものだ。そのまま何度もキスを重ね、知識の授受を繰りかえす。

　やがて護堂は大きくうなずいた。

　敵とする神についての知識こそ、ウルスラグナ第一〇の化身『戦士』を使う条件。

　これが万全にととのい、あの武器を使えるという確信を得たのだ。最後に感謝の気持ちを込めて、やさしく恵那へ口づけする。

「ふふっ。王様のお役に立てて、すごくうれしいよ……」

　恵那が可愛らしく微笑んでから、いきなりハッとした。

　そそくさと護堂からはなれていく。行為の最中、ふたりは心の昂たかぶりにまかせて強く抱きしめ合っていたのだ。それが急に恥ずかしくなったらしい。

　護堂を正視しないよう目をそらし、うつむいて、もじもじしている。

　ふだんの大胆さがウソのような恵那の姿であった。そんな彼女を愛おしく思った護堂は、これ以上恥ずかしがらせるのも気の毒なので、ひとまず声をかけないことにする。

　そのまま、ふたりともしばらく無言。

　しかし、気まずさはない。むしろ言葉がなくとも通じ合っているという気さえする。

　護堂がなんとなく顔を上げると、恵那と目が合った。気恥ずかしさを覚えながら、彼女の様子をうかがう。恵那も探るように護堂を見ていて、結果、ふたりは同時に照れ笑いを浮かべる形になった。

　やがて気を取りなおしたか、火にかけていた鍋を見て恵那が言った。

「あ。そろそろいいみたい」

　生米をずっと弱火で煮こみ、おかゆを作っていたのである。

　塩と味噌を入れてあるという小さな壺つぼふたつを恵那は取りあげた。料理が苦手と思われる媛巫女に気を遣い、護堂は声をかけた。

「よかったら、続きは俺がやろうか？」

「大丈夫。知り合いのおっちゃんから教わった料理の秘ひ訣けつを試してみるから」

「秘訣？　なんかすごそうだな」

「結構かんたんだったよ。たしか鍋で何かを煮こむときの話。入れすぎさえしなけりゃあとは味噌がなんとか食える味にしてくれる、みたいに言ってた」

「……ああ。ふつうは割とそうだよなあ」

　エリカ・ブランデッリのメイド兼助手をつとめる女性に思いを馳はせつつ、護堂は少女の仕事ぶりを見守ることにした。恵那は例のぞんざいな手つきで塩を振り、味噌を放りこんでいき、味見をして「こんなものかな」と作業を終了する。

　ふたりはおかゆをお茶碗に盛り、すぐに食べはじめた。

　結論から言うと、かなり満足できる食事だった。

　体を動かしたあとで空腹だった胃袋に大雑把な味噌味がしみわたったのと、熱々のおかゆが冷えた体をあたためてくれたおかげだ。しかし、いちばんの調味料は、こんな場所で気心の知れた仲間とアウトドア料理というシチュエーションだったのかもしれない。

　武器の用意をすませ、食事も終えてから数時間がすぎて——。

　すでに準備万端の護堂はいきなりハッとした。体に力がみなぎり、心がかすかに昂ぶってきたのである。これは戦闘準備だった。

　カンピオーネの心身は、神々に接近すると勝手に戦闘態勢をととのえるのだ。

恵那に目くばせする。太刀の媛巫女はすぐにうなずいてくれた。ふたりいっしょに立ちあがり、小屋の外へ出ていく。

近くに敵が——正体不詳の美神・顕聖二郎真君がいるはずだった。

「やっぱりか……」

予想どおり、小屋の外に派手な衣装の美青年がたたずんでいた。

うなずく護堂の隣で、すかさず恵那が一歩踏み出す。参戦するつもりなのだ。

「王様。天あまの叢むら雲くもをおねがい」

護堂は右手の掌てのひらをゆるく開き、神刀の使用権を太刀の媛巫女に託たくした。

これでいつでも、恵那は〝相棒〟を呼び出せる。しかし、戦闘態勢の少女に対して、二郎真君はあの謎なぞめいたささやき声で言う。

『邪悪ならざる人の子よ。私が誅伐するのは悪あしき魔物のみ。そなたのような罪なき娘に手荒な真ま似ねはしたくない』

風に乗って遠方より運ばれてきたような声。ふつうに聞けるのなら、みごとなほど涼やかで男らしく耳に届くのではないか。

そう思わせる声こわ音ねで二郎真君（？）は語りかける。

『ここは顕聖神君たる二郎の顔を立て、引き下がってはくれまいか……？』

「まさか。恵那は王様の女で、相棒で……剣を預かるお役目なんだから。この身に代えても、王様を守ってみせるつもりだよ」

うそぶく恵那の手に、忽然と黒き神刀が顕れた。さらに天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの神気が媛巫女の体にみなぎっていく。神がかりを使ったのだ。

これで恵那は、神々にはおよばぬまでも神獣たちと互する戦闘力を得たことになる。

　すると、二郎真君は完かん爾じと微笑んだ。

『その意気や良し。仕つかえる主あるじをまちがえた愚おろかさはべつとして、その忠義を讃たたえぬのは楊よう二じ郎ろうの名折れ。ならば、私はそなたに傷ひとつ付けず、草薙護堂に勝利すると誓おう』

　背後に後光でも見えてきそうな『正義の味方』ぶりだった。

　いかにも善の神・破邪の神らしい言いぐさ。しかし、護堂は驚いた。最初に出会った『まつろわぬ神』、ウルスラグナを思い出したのである。

　考えてみれば、あの少年も正義の守護神だったはずだ。

　だが、地上を放浪するうちにまつろわぬ身の狂気に呑みこまれ、本来の神性に微妙な歪ゆがみが生じ、しまいにはサルデーニャ島の住民を脅おびやかす存在となってしまった。

　対して、顕聖二郎真君はこんなにも輝かしいままで——。

　不可解だった。しかし、護堂は疑問をしばらく棚上げすることにした。今はひとまず、この三つ目の神と戦わねばならない。

「顕聖二郎真君は道どう教きようの最高神・天帝の甥として生まれた！」

　護堂は言霊をささやき、『戦士』の化身となった。

　この善なる神に仇あだなす刃やいばを生み出すため、さらに言霊を吐き出す。

「その昔、地上に降こう臨りんした天帝の妹と人間の間に生まれた子供。それが二郎真君だ。武人でもある彼は、本当なら天界で伯お父じに仕えるべき立場だった」

　護堂の周囲に光の玉がひとつ、またひとつと出現しはじめる。

「でも、彼のエピソードの多くは人界を舞台にするものばかりだ。孫悟空退治もそうだった。神でありながら中国の灌かん州しゆうに住んでいた二郎真君は、下界で暴れる悟空を倒せという勅ちよく命めいを受けて、猿退治に乗り出す」

　わずかな間に光球は数百以上もの数にふくれあがっていった。

　夜空にまたたく星雲のごとき輝きの全てが二郎真君を切り裂くための刃であり、護堂のイメージしたとおりに動く武器である。

　必殺の剣陣をととのえて、護堂は敵を鋭く見すえた。

「高貴な天てん上じよう人びとが人の世をさまよいつつ戦い、善行を為なす。つまり貴き種しゆ流りゆう離り譚たん。単純な戦いの神ではなく、典型的とさえいえる貴種流離譚の主人公でもある——その点こそが二郎真君の特徴であり、民衆が彼を持てはやす理由なんだ！」

　攻撃の意志を宿した言霊に応こたえて、数十ほどの光球が二郎真君めがけて飛ぶ。

　一方、標的たる三つ目の美青年は涼やかに微笑んでいた。余裕すらただよわせて。

『ふ——っ。実を言えば、君の剣のことはよく知っている』

　微笑みながら申告されて、護堂は目をみはった。

『我ら神々を切り裂く剣の言霊。なかなかに厄介な武器だ……が。からくりさえ知っていれば、いくつか返し技も思いつくというもの』

「返し技!?」

　驚く護堂の前で、唐突に二郎真君の姿形が変わった。

　今までは三つ目の美青年だった。しかし、これが一瞬にして猿の姿に変わったのである。身の丈たけは一六〇センチほど。黄色い京劇の衣装をまとい、手には如によ意い金きん箍こ棒ぼうを持つ——斉天大聖・孫悟空のなつかしい姿に！

『我われ、顕聖真君にあらず。我が姓は孫、名は悟空……斉天大聖、推すい参さんなり！』

　飛んでいった剣の言霊が全て悟空／二郎真君に命中する。

　しかし、いつもどおりなら敵の神格を切り裂くはずの光球は、孫

悟空の肉体にただ当たっただけ。一筋の傷も付けられない！

「変へん化げの術だよ、王様！　二郎真君は孫悟空と同じで変身が得意な神様だから！」

「べつの神様に変身して、俺の『剣』が通用しない体になったのか！」

　二郎真君を切るための言霊では、斉天大聖を切ることはできない。恵那の警告、そして敵の性質を見抜く『戦士』の目によって、護堂はからくりを見抜いた。

　しかも、さらにもうひとつ。ある事実に気づいた。

　いま使えるウルスラグナの化身が『戦士』以外にない。『雄お牛うし』や『鳳おおとり』はもちろん、ある意味で『戦士』以上に切り札として重ちよう宝ほうしてきた『白はく馬ば』を使うことが——できない。

　護堂は眉まゆをひそめた。

　まつろわぬ神々やカンピオーネはその多くが世に仇なす存在である。

　だから、民衆の敵を滅ぼすための化身『白馬』は、多くの戦いで決定打として機能してきたのである。しかし、二郎真君の場合は——。

　リリアナ、祐理、恵那を傷つけないよう彼が示してきた配慮。

　つまり、二郎真君はそういう振る舞いができるほど『完璧な善の神』であり、『邪悪のみを討つ存在』なのだ。だから『白馬』の標的にできない。

「いつもの戦い方がまるで通じない……万里谷が言ってた『天敵』はこいつか」

　思った以上に攻略がむずかしい敵と知り、護堂はつぶやいた。

　しかし、無意識に唇の形をゆがめてもいた。獰どう猛もうとさえいえる微笑の形に。

　まあいい。剣の言霊や太陽の力が使えなくても、戦いようはある。何としてでも勝機を作りだしてみせる。どのみち、今までもずっとそうだった。

　勝ち目が到底なさそうな敵との絶望的な戦い——。

　そういう厄介な局面に、草薙護堂は不本意ながら慣れているのだ！

（ふぃふぃふぃふぃ。よい目をしている。神に仇なす魔王たる者、やはりそうでなくては）

　護堂の闘志に応えるように、二郎真君の声がささやく。

　すると、孫悟空の体が変身をはじめた。類人猿めいた体型の軍神から、長身で逞たくましい老人へと、あっというまに早変わりしてみせる。

　それは護堂も知っている人物——否、神の姿であった。

「おじいちゃま!?」

　恵那が叫ぶ。二郎真君は孫悟空に続き、スサノオに変化してみせたのだ。

4

　川辺の小屋の前ではじまった、草くさ薙なぎ護ご堂どうと顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くんの戦い。

　それは軍神ウルスラグナが振るった神殺しの剣と、中国の高貴なる破は邪じやの神が駆使する変へん化げ術じゆつの競い合いとなった。

「我われは言こと霊だまの技をもって、世に義を顕あらわす！」

　聖なる軍神の呪じゆ文もんを唱えて、護堂は『剣』たちの一部を加速させる。

　護堂のまわりや頭上で、夜空の星々さながらにまたたいている千以上の光球たち。

　そのなかの十数個が二郎真君めがけて飛んでいった。本来、これを受けるはずなのは三つ目の美青年。しかし今、彼の姿は逞たくましい老人だった。

　護堂とも旧知の隠居した『まつろわぬ神』、スサノオに変へん化げしていたのである。

『ふふ。君が使う剣の言霊とやらを破るための工夫だ。見るがいい』

　飛ばした『剣』たちは全てスサノオ／二郎真君に命中する。

　しかし、護堂は眉まゆをひそめた。当たっただけなのだ。標的にあたえたダメージは皆無。『剣』が何の役にも立っていない！

『その言霊は顕聖二郎真君を切るための刃やいば……。ならば、異なる神に〝なりきる〟ことで多少は凌しのげるのではないかと考えたのだよ。どうやら正解だったらしい』

「みたいだな。けど、なりきりにも限界があるんじゃないか？」

　縁もゆかりもない神格に〝なりきる〟のである。

　いくら変身術の達人でも、長時間ボロを出さないでいられるとは思わない。護堂は目をすがめた。見つめる。老神スサノオとうりふたつの男を凝ぎよう視しする。

　言霊の剣を操る化け身しん『戦士』には、敵の性質・本質を見抜く能力がある。

　今の二郎真君は、いわば変身術で編みあげた〝スサノオという神格の衣ころも〟をまとっているようなものだ。短時間なら、ウルスラグナの『剣』すらあざむく出来映ばえのようだが――。

　護堂は見つけた。この衣にある、糸のほつれた部分を。

　わずかな隙すき間まから、二郎真君本来の神格がかすかにのぞいている。

　これだけ見えていれば――必ず斬きれる！

「我は最強にして、あらゆる敵を打ち破る者なり！　全ての邪悪よ、我を畏おそれよ！」

　確信にまかせて言霊を唱えると、一〇個近い光球が加速をはじめた。

　そのままスサノオ／二郎真君へ殺到し、彼の逞しい体を貫つらぬく――寸前で。

『疾チツ！　顕けん化か無む限げんの大だい神じん通つう、かくあれかし！』

　スサノオの口が動き、二郎真君のささやき声をつむぐ。こちらも言霊だった。

　途端に暴風神の外見が変化をはじめ、ほんの数秒で新たな姿に変へん貌ぼうしてしまった。

「また俺の知り合いかよ！」

　護堂は吠ほえるように言った。

　今回、二郎真君が変じたのは黒コートを着た目つきの鋭い老人である。知的な風ふう貌ぼうと虎の瞳ひとみもかくやというエメラルド色の眼光――旧敵デヤンスタール・ヴォバンのものだった。

　そして、〝ヴォバンという魔王の衣〟を二郎真君がまとった瞬間。

　護堂は糸のほつれた部分を見失った。変化した姿の下にひそんでいる二郎神本来の神格が、またも見えなくなったのである。

「――!?」

　驚きよう愕がくする護堂の前で、『剣』たちはヴォバンの肉体にぶつかっていった。

　またも命中。またも効果なし。護堂がほつれを見失ったため、『剣』は隠された二郎真君の神格まで届かなかったようだ。

　これが剣の言霊を封じるための対策……！

　こんな小細工に負けてたまるかと護堂が視線を鋭くすると、ヴォバンの顔は彼らしからぬ涼やかさで微ほほ笑えんだ。あの老人らしくない、実にさわやかな笑みだった。

　これこそ、あくまで中身は二郎真君だという証あかし。

　ならばと護堂は目をすがめる。糸のほつれにも似た変身術の破は綻たんを見つけるためだ。

　しかし、その前に二郎真君が手を打ってきた。

『疾チツ！』

　短い言霊と共に、またも変身を遂とげる。

　今度の姿はカンピオーネではなかった。またしても神である。

　護堂はハッとした。なつかしい銀髪の童女。衣服こそ現代風だが、その身に女王のごとき支配者のオーラをまとっている。かつて護堂と戦った闇やみの蛇へび女め神がみである。

　二郎真君はまつろわぬアテナに変化したのだ。しかも。

『照しよう魔まの光、ここにあれ。破邪顕けん正せい・外げ道どう焼しよう身しんの霊れい験げんよ、邪悪を弱めよ！』

　幼いアテナの額ひたいが縦たてに割れた。第三の目の出現だ。この目がいきなり光った。

　その瞬間、護堂は体から呪力が抜けていくのを感じた。

「く――！」

　第三の目には、カンピオーネから力を奪う霊験があるらしい。

　護堂は夕方のことを思い出した。

　二郎真君とはじめて対たい峙じしたときも、こうして呪力を抜かれた。

　ならばと、とっさに体内の呪力を高める。『目』の霊験に抗あら

がうためだ。本来、カンピオーネの肉体には魔術・権けん能のうに対する強い耐性がある。隙さえ突かれなければ、ごっそり呪力を抜かれることはない。だが、それでも護堂は舌打ちした。

　体内の呪力が少量ずつ、じわじわ抜けていくのを感じたからだ。

　さすが『天敵』。完全に防ぎ切ることはできないらしい。呪力の流出に合わせて、護堂のまわりで輝く『剣』の光球がひとつ、またひとつと消滅していく。

　そのうえ、敵の反撃はまだあった。

『ふふふ。そろそろ、こちらより攻め込ませてもらおう』

　つぶやくなり、三つ目となったアテナが肉迫してくる。

　まさに閃せん電でんの速さで、アテナ／二郎真君は護堂の目の前に飛び込んできた。女神の右手に顕れるのは、刀身の先端が三つに分かれた刀――。

　二郎真君の武具・三さん尖せん刀とうである。これを護堂の心臓へ突き込んでくる！

　必殺の突き。すさまじい速さだった。

　護堂はぎりぎりのところで左に跳び、かろうじて避けた。戦闘中のカンピオーネは超常的な集中力を得る。そのおかげで護堂は野獣以上の反射神経で立ちまわりを演じられるのだ。

「ドニのアホとも互角に戦えそうな感じだな……」

　速いだけでなく、急所を正確無比に抉えぐり抜く剣技。

　その冴さえを目まの当たりにして、護堂はうめいた。剣魔・剣けん仙せんとでも呼ぶべき天才剣士にしてカンピオーネ、サルバトーレ・ドニ。二郎真君の腕前があの男に匹敵するレベルであると、認識できたからだ。

　神速を操る化身『鳳おおとり』での対抗は――やめておいた方がいいだろう。

　このレベルの達人は神速さえも見切ってしまう。あまり意味がな

いのだ。

『この体のあつかいにも慣れてきたゆえ、さきほどのような不ふ手て際ぎわはしないですみそうだ。さあ、いざ尋じん常じように勝負！』

「尋常にって言うなら、妙な変身はなしにして欲しいぞ！」

　護堂の訴えを微笑と共に無視して、二郎真君はまたも変身する。

　今度はアテナが乙女に成長した姿——『真のアテナ』への変貌だった。いきなり背と手足がのびて、衣装も古代風の簡素なものにあらたまる。

　ならばと、護堂があらためて変身術のほつれを見み出いだそうとしたとき。

　二郎真君がいきなり三尖刀を放り捨てた。

　伏ふく兵へいが現れたのは、それとまったく同時だった。アテナに変化した二郎真君へ、恵え那なが斬り込んでいったのである。今まで護堂が操る『剣』の動きを邪魔しないよう、すこしはなれて突入の機をうかがっていた媛ひめ巫み女こが、黒き神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎと共に。

「いやあああっ！」

　八はつ相そうの構えから恵那が神刀を振りおろす。渾こん身しんの一ひと太た刀ちだった。

　おそらく防御など何も考えず、ただ敵を討つことのみに集中した必殺の剣。しかも、恵那は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの神気をその身に呼びこんで、神がかりした状態である。

　これ以上ないという斬ざん撃げきだった。

　しかし、アテナ／二郎真君は軽く身をひねり、余裕でかわしてしまう。

　それどころか、恵那とすれちがった瞬間に右腕を鞭むちのように一いつ閃せん。手の甲で媛巫女の体を無造作に払いのけてみせた。

『おお。娘よ、ずいぶんと威勢がよいな！』

「く――っ！」

「大丈夫か、清せい秋しゆう院いん!?」

　神の一撃で吹っ飛び、倒れこんだ仲間に護堂は呼びかけた。

　答えるより先に恵那はすばやく立ちあがり、ふたたび神刀をかまえる。どうやらダメージはないようで、動きは軽く、表情にも覇は気きがみなぎっている。

「何の問題もないよ、王様。全然平気」

　けろりとした声で恵那が無事を報しらせる。

「二郎真君の神様もさっき言ってたでしょ。絶対に恵那を傷つけないで勝つって。だから、まずいことにはならないはずだし」

「やつの言うことを鵜う呑のみにするなよ。口約束なんていくらでも破れるだろ」

「まあね。でもさ、あの神様はたぶん破らない気がする。なんていうのかな、そういう道に外れたことは絶対にしなさそうっていうか……」

　恵那をたしなめたら、反論されてしまった。

　護堂は軽く目をみはる。実はひそかに同じ印象を持っていたからだ。

　たとえ神格の芯しんの部分が善であっても、まつろわぬ身として流る浪ろうを重ねるうちに歪ゆがみを増し、やがて災いを呼ぶ凶神となる。それが『まつろわぬ神』なのに――。

『ふっ。つまらぬことを気にする必要はないぞ』

　第三の目が開いた状態で、アテナ／二郎真君は微笑む。

『君たちの考えはまちがってはいない。この二郎、ひとたび立てた誓いを破るほど安い男ではない。娘よ、君に一筋の傷も付けぬとあらためて誓約しようではないか！』

　宣言のすぐあと、真君の手に新たな武器が顕あらわれた。

　まず左手に弓。そして、右手には拳こぶし大だいの鉄球。破邪顕聖の武神は鉄球を弓の弦つるにつがえ、ぎりぎりと引きしぼる。

　矢の代わりに鉄球を撃ち出す——弾だん弓きゆうという中国の飛び道具だった。

　ひゅん！　弓ゆ弦づるの音が鳴り、鉄球が飛んでくる。標的はもちろん護堂であった。しかも、この鉄球はバチバチと青白い雷を放電しつつ天あま翔かけてくる！

　これを迎え撃つべく、恵那と護堂が身がまえたときだった。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主しゆよ、なにゆえ我われを見捨て給たまう!?」

　今ではおなじみになった言霊を、護堂たちは聞いた。

「真昼に我わが呼べど、御おん身みは応こたえ給わず。夜もまた沈黙のみ——」

　これは『紅き悪魔デイアボロ・ロツソ』を名乗る少女が切り札とするゴルゴタの言霊！

　案の定、木立の陰から飛び出してきたエリカは、いつもの紅と黒ロツソネロのケープをまとい、獅し子しの魔剣クオレ・ディ・レオーネを手に持っていた。

「されど御身は聖なる御方、尊とうとき聖地にて諸もろ々もろの賛歌をうたわれし者なり！」

　今、この魔剣には憎悪と絶望の言霊が宿っている。

　ふつうの人間が間近で接すれば、即座に死ぬかもしれないという。その力を宿したクオレ・ディ・レオーネで、エリカは放電する鉄球を真正面から斬り落とした。

　びりびりと稲妻がはじけ、まっぷたつに割れた鉄球は地面を転がっていく。

　遅れてやってきた少女は晴れやかな笑顔で振りかえり、いつもの

華麗さで言った。

「待たせてしまったようね、護堂。それに恵那さんも」

「ずいぶんゆっくりだったな」

　ついに到着した〝相棒〟に、護堂はむしろのんびりと言った。

　いつもとちがうノリの戦いが、ようやく〝いつもどおり〟になるのでは――。ただエリカが来ただけで、そんな気がしてきたのだ。

「わたしだって人と会っていたのだもの。ダブルブッキングに万全の対応はしかねるわ。でも、いいじゃない。百万の援軍を連れてくることはできなかったけど……」

　エリカは不敵に、あの雌めす獅じ子しを思わせる勇ましさで言い切った。

「知ってのとおり、エリカ・ブランデッリにはひとりでその代わりがつとまるくらいの価値があるわよ。遅刻した分まで当てにしなさい、護堂！」

　たとえ遅れてきたときでも、その場の主役に収まってしまう。

　持ち前の特技をいかんなく披ひ露ろうする、エリカの登場だった。これに対して、今までアテナの姿だった武神がもとの姿にもどっていく。

　長身の美青年にして三つ目の武人、顕聖二郎真君の再登場だった。

『草薙護堂の直じき臣しんが勢ぞろいか。ならば、私もふたたび素顔を見せねばなるまいて』

「何？　勢ぞろいだって？」

「ええ。エリカだけに抜け駆けさせてなるものですか！」

　凜りんとした調子で答えたのは、数時間ぶりに聞くリリアナの声だった。

　ヨナタンの弓を手に、護堂のそばまで歩みよってきたのだ。

　そうかと護堂はすぐにうなずいた。数時間前に送った〝手紙〟を受けとって、エリカたちは急いで東京から奥おく秩ちち父ぶまで移動したのだろう。この山の近くについたら魔術で護堂の居場所を探し当て、あとはリリアナの飛ひ翔しよう術じゆつで——。

　となれば当然、彼女もいるはず。案の定、巫み女こ装しよう束ぞくの祐ゆ理りも小走りに駆けてきた。

「護堂さん！　二郎真君さまのことで大切なお話が……！」

　そばに来るなり、祐理が言った。

「あの御方の——真君の正体についてです」

　聞くなり護堂はハッとした。すぐにほかの仲間たちを見る。

　エリカ、リリアナ、そして恵那がうなずいてくれた。しばらく持ちこたえてみせるという力強い意思表示だ。

「やぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

　まずは恵那が天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを八相にかまえ、二郎真君に突進。

　火のような斬撃を放つ。これを真君がひらりと避けたところに、エリカがクオレ・ディ・レオーネで狙ねらいすました突き。しかも三連続で。

　この三段突きもことごとく避けられたが、二郎真君は体勢をすこし乱していた。

　即座にエリカは右へ跳び、開けたスペースにリリアナが矢を撃つ。ヨナタンの弓で放たれる青白き光の矢は、もちろんダヴィデの言霊を宿している！

『ふふふふ！　なかなかに手て強ごわいおなごどもだ！』

　二郎真君はさっと右腕を振るい、手しゆ刀とうで光の矢を払いのけた。

　まさに武神ならではの、文字どおりの神技。が、今度はそこに恵那がふたたび天叢雲劍で大上段からの斬撃。渾身の飛び込み面を打

ち込む。

　この神刀を二郎真君は両の手のひらで挟んでみせ、真剣白しら刃は取どりの秘技——。

　恵那・エリカ・リリアナはめまぐるしく、続けざまに攻撃を仕掛けていった。

　一方、二郎真君は神技の数々を駆使して、全て避け、かわし、払い、防ぎ切ってしまう。しかし、エリカたちを返り討ちにするまではいたらない。

　それは真君が防御一辺倒だからではあったが、仲間たちは時間稼かせぎに成功している。

　その間に護堂は、祐理の話を聞くことができた。

「あいつがどういう神様か、視みえたのか？」

「はい。今ここに顕けん現げんしている二郎真君さまは『まつろわぬ神』ではありません。あの御方はいわば……『真なる神』です」

　祐理の託たく宣せんを聞いて、護堂は瞠どう目もくした。真なる神。それは何者なのか。

「護堂さんもご存じの幽かく世りよは『生と不死の境界』とも呼ばれます。生の領域とは、この地上のこと。そして、不死の領域こそ神々が本来おわす世界……」

　世界の成り立ちを祐理は早口に語った。

「不死の領域に『まつろわぬ神』はいらっしゃいません。あの方々は地上に出てきたことがきっかけで歪み、本来在あるべき形と微妙に異なる『まつろわぬ神』となるのです。あそこに顕現している神は不死の領域にのみ存在する真君さまの——分身ではないかと」

「分身だって？　真なる二郎真君ってやつの？」

「はい。なんとなくですが、不死の領域にいる真君さまが神力を地上に送りこみ、あの分身を動かしている……そのようにも思えます」

「そういや、やっつけの体がどうとか言ってたな……」

　祐理の〝なんとなく〟が外れているとは思えない。護堂はうなずいた。

　なるほど。『悪しき魔を討つ善なる武神』という在り方を完璧に体現できるわけだ。

「そうなると、絶対に『白はく馬ば』とかの標的にはならないよなあ……」

　今まで感じていた疑惑に裏づけが取れた。

　護堂はため息をついた。実はほんのすこしだけ期待していたのだ。あの二枚目の神様がそのうち『まつろわぬ神』の本性を出してくれるのではないかと。

　そうなれば、いろいろと戦いやすくなっただろうに。

「やはり、前に感じた護堂さんの『天敵』とは——」

「あいつみたいだな。たしかに戦いにくいやつだよ、本当に」

「あの、護堂さん？　そうおっしゃるわりにすごくさっぱりしたお顔ですけど……」

「ん、ああ。たぶん万ま里り谷やのおかげで踏ん切りがついたからだな」

　不思議そうな顔の媛ひめ巫み女こに訊きかれて、護堂は苦笑した。

「できれば試ためしたくない手を使う決心がついたというか。こればっかりは本当にやりたくないんだけどなあ」

「でも、おやめにならないのでしょう？」

　今度は祐理がため息まじりなので、護堂は頭をかいた。『本当にしようがない人ですね』と言外に言われた気までした。

「でしたら、私としてはこう申し上げるしかありません。お気をつけて……！」

「ああ。なるべく無事な体で帰ってこようと思う。じゃあ！」

　無謀な勝負に出ようとするダメ亭主を見送る賢けん妻さいめいた、祐理の言葉。

　彼女の瞳に宿るやさしさへ感謝しつつ、護堂は神と仲間たちのもとへ駆けていく。

　さっきまで恵那とこもっていた小屋の前を通りすぎ、夜の山歩きのときも川辺を歩いた渓けい流りゅうの岸辺へやってきた。

　エリカ・恵那・リリアナが二郎真君を包囲している。

　さすがに防御一辺倒ではしのぎきれなくなったか。少女たちが繰りだす魔剣・神刀・光の矢をかわしつつ、真君はついに攻撃もするようになっていた。

　まずは例の「哈ハ！」という気合い声を放って、リリアナを金かな縛しばりに。

　ついで、恵那の背中を中指で一突き。これで太た刀ちの媛巫女はへなへなと膝ひざを折る。

　最後に腕を鞭のようにしならせ、手の甲でエリカを打ちのめした。

　金髪の美少女はクオレ・ディ・レオーネでガードしたものの持ちこたえることができず、大きくふっとばされた。

　ちょうど駆けてくる護堂の前に飛んでくる。護堂はとっさに抱きとめた。

「大丈夫か、エリカ？」

「ええ、どうにか。あなたの方はもういいの？」

　抱きとめたエリカは無傷だった。さすが真なる善の武神。二郎真君はさっきの誓約を恵那以外にも適用し、最後までまっとうするつもりなのだ。

「ああ。これから勝負をかけるつもりだ。それでおまえに頼みがある」

　二郎真君がフッと微笑み、護堂をまっすぐ見すえている。

　仲間たちに足止めする余裕はもうない。だから護堂は短く、簡潔に言った。

「例によっていろいろやばくなるから……あとは頼む。できれば死にたくないから、いいようにやってくれ」

「大おお雑ざつ把ぱすぎる指示だけど、エリカ・ブランデッリに感謝しなさい」

　エリカが浮かべる微笑には、雌獅子の猛たけ々だけしさと女王の誇りが同居していた。

「わたしは必ず期待に応える女だって、見せてあげるわ！」

「ああ、頼む！」

　短すぎるミーティングを終え、護堂は二郎真君の前へ出た。

　ついに一対一で向き合う。最終局面の到来に、麗うるわしき武神はにやっと微笑んだ。

『ふふ。私の正体を知ったか』

「ここにいるのは分身で、本物のあんたはよそに隠れているんだろう？」

『隠れるとは心外だな。真なる神は決して地上には出てこぬものだ。いや、出てきた時点でまつろわぬ身となってしまうのだな……』

　二郎真君の分身は例の不思議なささやき声で言う。

　この声も出所はおそらく、不死の領域とやらなのだろう。

『私の旧知と縁ができた君を面白く思い、すこしちょっかいを出してみた。折りよく巫女たちも我が符ふをいじりまわしていたしな』

「ったく。そういうことなら、俺以外の人間を巻きこむなよ！」

　言いながら、護堂は空に意識を向けた。

　さっき作り出した『剣』の光球がまだ、上空に数十個ほど浮いていたのだ。

「やれ！」

　短い言霊で『剣』たちをいっせいに動かす。

　狙ねらうはもちろん二郎真君。次々と命中していく。しかし、真君は成長したアテナの姿を取っているので通じない。

　剣の言霊に打ちのめされながら、二郎真君はアテナの顔で微笑んだ。

『草薙護堂。これで私に勝てないことは……』

「わかってるよ。だから——清秋院、頼む！」

　まだ膝を折ったままの媛巫女へ要請する。恵那はすぐに察してくれた。

「うんっ。天あまの叢むら雲くも、王様のところへ行って！」

　黒き神刀が恵那の手から消え、代わって護堂の手に顕れた。

　神殺しの〝相棒〟を自称する剣の姿をした神。その日本刀ふうの柄つかを握りしめつつ、護堂はアテナ／二郎真君をにらみつける。

　善なる武神はついに『剣』をしのぎきり、弾弓をかまえざまに撃つ！

　放たれる鉄球。その軌道から察するに、狙いは草薙護堂の額。風を切って飛来する。しかし、護堂は落ちついて回避した。

　鉄球に額を割られる寸前、『鳳おおとり』の化身を行使したのだ。

　高速の攻撃を受けたときのみ使える。使用中、己おのれ以外の全てが減速し、護堂だけが圧倒的な加速を得て、身も軽くなる神速跳躍の化身——。

　こちらへ飛来する鉄球も一気に減速し、かんたんにかわせてしまう。

　だが、これをしばらく使うと護堂の心臓を激痛がさいなみ、やがて身動き取れなくなる。

『ふふ。君に残された時間で私を打ち倒せるかな？』

　制限時間が生まれた護堂を見て、二郎真君は笑う。

　アテナの姿から本来の美青年へと姿をもどしながら。護堂が『剣』を失ったので、もう変化の必要はないと見たのだろう。

　彼が言うとおり、残された時間はすくない。

　だから、護堂は一気に勝負をしかけた。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを腰だめにかまえ、切っ先を二郎真君に向けて、まっすぐに突っこむ。『鳳』の神速で一直線に！

『ふ――っ。いかに閃電神速といえども、見えぬわけではないぞ！』

　しかし、二郎真君は豪語して右拳を繰りだしてきた。

　神速すら見切り、武術の一手を叩たたき込む。これはかつてサルバトーレ・ドニや羅ら濠ごう教主がやってのけた秘技である。だが、やはり〝やっつけ〟の体ゆえか――。

　二郎真君の拳はカウンターにはならなかった。相打ちとなった。

　護堂と天叢雲劍は、二郎真君の左脇わき腹ばらをつらぬいた。

　二郎真君が放ったボディフックは、護堂の左肋ろつ骨こつに突き刺さった。

「ぐはっ！」

　すさまじい一撃を受けて、護堂は悶もん絶ぜつした。

　稲妻に打たれた気分だった。打たれたのは肋骨のあたりだが、すさまじい衝撃が全身を駆けめぐったのだ。だが、なんとか生きている。

　一方、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎによって、二郎真君も脇腹を深々と抉えぐられている。

　神刀が根元まで刺さっているのに、一滴も出血なしというのはあきれた話だったが。

『ふむ……なかなか上う手まくいかぬことよ』

　二郎真君のささやき声はのんきだった。やはり本体ではないからだろう。

　対して、護堂は獰猛に笑う。これで『例の策』に取りかかれる……。

　そのまま痛む体に鞭打ち、地を蹴けって跳躍する。

『む——!?』

　驚く二郎真君をつらぬいたまま、護堂は跳んだ。

　神速で動くだけが『鳳』の化身ではない。跳躍力と身軽さも大いに増す。この能力にまかせて、護堂は渓流のなかへ神速で跳んだのだ。

　水面は流れが速く、岩ばかりでごつごつしている。かなり高い山を流れる源流というべき川なので、水深は深くない。せいぜい膝ひざか腰まで水につかる程度だろう。

　渓流のなかにある岩のひとつに着地するなり、護堂はもう一度跳んだ。

　今度は川の流れる方向に合わせて、高々と、できうるかぎり遠くをめざして——。

『何をするつもりだ、草薙護堂!?』

『鳳』の大跳躍のおかげで、眼下を流れる源流の渓けい相そうが俯ふ瞰かんできる。

　護堂たちが休憩した小屋から三〇メートルほど下流にかなり急な滝があった。

　水の流れは細く、名めい瀑ばくとされるほどの雄大さはないが、滝たき壺つぼまでの距離は長い。落差四、五〇メートルはありそうだ。

あれが魚うお止どめの滝か。護堂はうなずく。恵那から聞いていたとおりだ。

『ここから下流へちょっといくと、急な滝があってさ。あそこ、イワナも昇ってこられない魚止めの滝なんだ。だから、このあたりには魚がすくないんだよ』

高く遠くへ存分に跳び、ついに滝の上空まで到達したところで――。

護堂はついに切り札を出した。禁じ手である。できれば本当にやりたくなかった。

「我がもとに来きたれ、勝利のために……」

跳躍の勢いは劣え、ついに自由落下しながら言霊をささやく。

空中にいる護堂たちの下では滝壺に落ちる水が轟ごう々ごうと音を立てている。

「不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

民衆を苦しめる大罪人のみを標的と設定できる。それが『白馬』の化身である。

そして、今回の標的は――草薙護堂だった。自分自身である。

『ふ、ははははは！　自身をまきぞえにしてでも、私を討たんと欲ほつするか！』

夜だというのに、東の空から暁あかつきの曙しよ光こうが差しこんでくる。

その光で護堂と共に薔ば薇ら色に染まりながら、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎでつらぬかれながら、なんと二郎真君は愉ゆ快かいそうに呵か々か大たい笑しようしていた。

『き、君にも自分が民たみの敵であるという自覚、ちゃんとあったのだな！』

「う、うるさいっ。だから、この手は使いたくなかったんだ！」

『しかし、このままでは私ごときと心中することになってしまうぞ？』

　遥はるか眼下の滝へ自由落下しながら、二郎真君は言う。

　抵抗する気をなくしたのか、実におとなしい。その瞬間、分ふん銅どう付きの鉄の鎖くさりが地上より飛んできて、護堂の右足にぐるぐるとからみつく。

　二郎真君は『む!?』と瞠目し、護堂はほっと一息ついた。

「エリカのやつ、なんとかしてくれたか……」

　つぶやいた瞬間、鎖がぐっと護堂の体をうしろに引いてくれた。

　エリカが錬れん鉄てつ術じゆつという魔術で鎖を造り、地上から投げ、ひっぱっているのだ。

　そして、東の空より太陽光のフレアが飛来してくる。護堂はひたすら念じた。破壊の規模をなるべく小さく、小さく、小さくせばめるんだ——と。

　考えなしに『白馬』を撃って、パレルモ港をまるまる灰にした過去がある。

　しかし、威力を最小にしぼればヨット二、三艘そう分くらいに破壊範囲をせばめられるのだ。最大限の破壊規模は試すつもりもないので不明だが……。

　途中から威力をしぼったので、フレアの大きさが一気に小さくなった。

　プラス、鎖に引かれたおかげで本来の標的・草薙護堂の位置は大きくずれ、空中を駆け抜けるフレアの洗礼をやりすごすことができた。

　かくして、二郎真君のみが光と熱に呑のまれていく……。

『ふふふ。なかなかに充実した夜であったぞ、草薙護堂。いずれ逆ぎやく縁えんあらば、本腰を据すえて一戦交まじえるのも悪くない。さらばだ！』

麗しき武神が遺のこした言葉、護堂はほとんど聞いていなかった。

今の一幕で運を使い切ったのだろう。窮きゆう地ちを救ってくれた鎖がほどけてしまい、そのまま眼下の滝へ落下していったからだ。墜落である。

唯ゆい一いつの救いは、一直線に滝壺へ向かっていることだろうか——。

数秒後。すさまじい衝撃を全身で味わいながら、護堂は水中に沈んでいった。

しかも、心臓がぎりぎりと痛む。体の硬直がはじまりつつあるのだ。どれも『鳳』使用後の副作用だった。

もしかしたら、今度こそ死ぬのだろうか？　死の恐怖が護堂を襲う。

まあカンピオーネになって以来、似たような恐怖体験を何十回と繰りかえしている。

もはや慣れっこだとも言えるイベントだった。

それにしても——しみじみと護堂は思う。たまには一〇もある化身を適当に使いまわすだけで勝てるような敵に出てきてほしいものだと。そんなのが相手だったら、毎度ここまで苦労せずともいいものを……。

心から切実に願いながら、今日も死にそうな目に遭あう護堂であった。

「大丈夫ですか、草薙護堂⁉」

そして、救いの手がさしのべられた。

神殺しを助けてくれるのはもちろん救いの女神ではなく、仲間の献けん身しんである。

リリアナがいち早く滝壺に飛びこみ、水中より引きあげてくれた

のだ。やはり、こういうときは空も飛べる銀髪の女騎士がいちばん早いようだ。

　滝壺のほとりでリリアナに支えられながら、護堂はどうにか腰をおろした。

　もうすぐ完全な金縛り状態になる。あのままだと絶対に溺おぼれたはずだ。しかも、全身ぐしょ濡ぬれ。さんざんなありさまだが、護堂は必死に舌を動かす。

「な、なんとか生きてるよ……。助かった、ありがとう。でも……」

　溺れかけて水を呑んだのと例の硬直のせいで、上手くしゃべれない。

　それでもなんとか礼を告げ、さらにこう言った。

「お、溺れた人間を助けようとして、まきぞえ喰うことも多いんだぞ……気をつけろ……」

「ご心配にはおよびません。私は魔女です。水に溺れないための魔術なら、いくつも心得があります。魔女は空だけでなく、水とたわむれることも得意なのです」

　ふふっとリリアナが微笑むので、護堂もつられて笑う。

　そういえば、水中での泳ぎぶりは人魚かと見まごうほどのみごとさだった。

　おかげで九死に一生を得たらしい。感謝の想おもいをこめてリリアナにうなずきかけて——護堂は気づいた。あわてて目をそらそうとする。

　リリアナはなんと下着姿だった。華きや奢しやな肢し体たいを隠すのは紫色の上下のみだ。

「も、申し訳ありませんっ。あなたを救助しやすいようにと思って、水に入る前、とっさに脱いでしまいました……」

「ば、バカ……。ここは俺が礼を言うところで……あやまる必要はな、ないだろ」

　リリアナは恥ずかしがって、両腕でうすい胸を隠していた。

　一方、護堂は体が硬直しはじめている。上手く視線をそらせられない。このため、銀髪の女騎士は精一杯に身をすくませて、護堂の目をやりすごそうとしていたのだが。

　不意にハッとして、逆に護堂へ顔をよせてきた。

「あ、あの。ご提案があるのですが……」

　それだけの問いかけなのに、妙に声がつやっぽい。

　ふだんの凜々しさがうそのようだ。護堂はごくりと息を呑んだ。

「草薙護堂。あなたはお体の具合がすぐれない様子。……治ち癒ゆの魔術をかけてさしあげたいと思うのですが」

「え……っ!?」

「こ、これは治療行為ですからっ。是ぜ非ひお受けいただきたいと思います！」

「い、いきなりそう言われても……」

　護堂が渋しぶっているのに、リリアナはゆっくりと唇くちびるをよせてくる。

　口うつしで魔術をかけるつもりなのだ。避けようにも体が上手く動かない。さらにいうと、潤うるんだ瞳でこちらを見つめるリリアナの美び貌ぼうに惹ひきつけられたのもたしかで——

　そのまま騎士の要望を受けいれかけたときだった。

「待ちなさい、リリィ。みんなそろっているのに、抜け駆けはないでしょう？」

「ぬ、抜け駆けなどとは心外な。私は主君のお体を案じているだけだ」

　貴婦人の優美さでエリカが意見し、リリアナは多少あわてながらも騎士の凜々しさで反論する。上流の方から、いつのまにかみんなが降りていたのだ。

　エリカに恵那、それに苦労したのか祐理まで肩で息をしながら、近づいてくる。

「大体、抜け駆けを言うなら清秋院恵那の方が先だと思うぞ」

　ちらりと恵那の能天気顔を見て、リリアナが言った。

「いつのまにか草薙護堂は二郎真君の知識を得ていた。教授役をつとめられたのは、あなた以外にいないはずだな」

「うん。だから全然、抜け駆けとかじゃないよ」

　女騎士の糾きゅう弾だんを、恵那はむしろさわやかに受け流した。

「恵那しかできる人がいないなら、恵那がやるしかないもんね」

「しかしだな」

「あ、あの、みなさんっ。今はそのことを棚たな上あげするべきですっ。護堂さんはあんな高いところから落ちて、しかも溺れかけたんですよ!?」

　祐理が口をはさんできた。すこし怒っている口調だ。

「まず護堂さんを介かい抱ほうすることが先では――」

「それは正論だけど、この際、順序にこだわらなくてもいいんじゃないかしら？」

　一方、こちらは余裕の笑顔でエリカが応じる。

「この人――草薙護堂はいろいろデタラメすぎる人だけど、特にデタラメなのが『殺されたくらいじゃ死なない』ってところだし」

「それはたしかにそうですけど、エリカさん！」

　憤ふん然ぜんとみんなをさとしてくれる祐理の気遣いが、護堂にはうれしい。

　まあ、良識派の彼女も『たしかにそうですけど』とか口走るくらい、この面子メンツのノリに毒されているのだが……。

　ともあれ、ずぶ濡れの護堂は寒い思いをしつつも、肩の力を抜いた。

　かしましい騒ぎも、おかしな神様との戦いも、こうして死にかけたことも、全てよくある出来事。取りたてて大騒ぎするイベントではないのだ。

　護堂は深く息を吸いこみ、女子たちのかしましさを妙にうれしく思った。

　そして、幽世の一隅では――。

　嵐吹く深み山やまの庵いおりで、ふたりの貴人が向き合っていた。片方はスサノオとも呼ばれる老神、元まつろわぬ神・須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト。

　日本の王権と深く結びついた嵐の神であり、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの正当なる所有者だ。

「で、真君。あんたはあの小僧をどう見た？」

「粗そ忽こつ者もので未熟者ですな。が、杜ず撰さんではあるが最後に帳ちよう尻じりを合わせる強引さ、さすが神殺しというところ。とはいえ――」

　スサノオの問いに答えるのは、麗しき武神・顕聖二郎真君その人だった。

「かの眠れる御子……魔王殺しの勇者殿に打ち勝てる器うつわかというと、私にはいささか判断がむずかしい」

「そうかい。あのガキとあんたは半分くらい同族みてえなもんだからなあ」

　顕聖二郎真君が持つ《高貴なる流る浪ろうの英雄》の相。

　これは、『最後の王』の異名で知られる英雄神も所有する相であった。

「何か感じるものがあるかと期待したんだがよ」

「ははは。まあ、彼奴きやつの暴れん坊ぶり、斉せい天てん大たい聖せいめと張り合うだけのことはあるとおかしくは思いましたな。いずれ機会があれば、じっくり退治してやりたいところです」

　二郎真君は軽やかに笑ってから、スサノオに告げた。

「しからば、私はこのあたりでおいとまを」

「おお。いろいろ面倒をかけたな。かたじけねえ」

　言うのとほぼ同時に、庵から消え去っている。

　真なる二郎真君、その本体はあくまで『不死の領域』にある。今回は顕けん聖せい之の符ふに呼ばれて、御み霊たまの一部をほんのひとときだけ地上へ降こう臨りんさせたにすぎない。

　そして、この幽世は不死の領域にいたる帰り道。

　スサノオは帰路についた二郎真君を招き、話しかけたのだ。

　真君が消えたあとを眺めてスサノオはにやりと笑い、酒杯を満たすべく徳とつく利りをかたむけるのだった。

第７話　英雄たちの鼓動

1

　思いがけず、二か月近い長期滞在となった時間旅行。

　古代ガリアでの大騒動を経へて、草くさ薙なぎ護ご堂どうと仲間たちはついに現代へ帰ってきた。

　あの時代と行き来するための『通つう廊ろう』はイタリア中部トスカーナ州の東端、カゼンティーノ地方にある。ここは国立自然公園に指定されるほど緑豊かな一帯だった。

　その一角におい茂しげる森のなかに出入り口はあった。

　帰還したとき、ちょうど東の空から太陽が昇りつつあった。季節は冬である。森には深雪が降りつもり、木々の緑よりも純白の雪の方が遥はるかに目立つ。

　こんな世界を朝焼けの光が薔ば薇ら色に染めている——。

　なんとも幻想的な景色を眺めたあとで、一行は人里めざして移動をはじめた。

　草薙護堂、サルバトーレ・ドニ、アイーシャ夫人、エリカ・ブランデッリ、万ま里り谷や祐ゆ理り、リリアナ・クラニチャール、清せい秋しゅう院いん恵え那なの顔ぶれだった。

「やっぱり、こっちの方が便利だよなあ」

　ホテルで一休みしたのち、護堂はつぶやいたものだ。

　古代へ旅立つ前、ドニがイタリアの騎士たちを召集した古城ホテルである。

　屋内は暖房であたたかく、蛇じや口ぐちをひねるだけでお湯も出てくる。シャワーもある。自動車もある。コーヒーもあれば、ピッツァだってある。中世の古城をリフォームしたホテルはクラシカルな見た目に反して、快適性もそこそこ充実しているのだ。

「うんうん。ようやく帰ってきたって感じだよねえ」

　とは、シャワーでさっぱりしたあと、ホテルのバーでビールをぐびぐび呑のみながら、ピッツァ三枚をがつがつ食べていたドニの言葉だった。

　護堂の方もすみやかに帰国して、日本食を食べにいくことはできた。

　しかし、いくつかの理由から、このホテルにしばらく滞在することにした。

「申し訳ありません、護堂さん。私のためにわざわざ……」

「べつにあやまるようなことじゃないって。まだ当分は試験休みだし、時間は十分にある。万里谷もゆっくり休んでくれよ」

　古代からの帰還後、急に発熱した祐理へ護堂は言ったものだ。

　原因はおそらく風か邪ぜではない。長旅の疲れだろう。そして日本を出る前から、祐理の体調にはやや不安な面があった。人の多い場所に来ると疲れやすい、めまいがする――そうした不穏な兆ちよう候こうがあったのだ。用心するに越したことはない。

　また、もうひとつ。

「ふふふふ。なんだかんだで現代もやっぱり楽しいですね！」

　無む邪じや気きに微ほほ笑えむ女性も理由にふくまれていた。

　ホテルのロビーでソファにすわり、にこにこと笑うアイーシャ夫人。

　彼女はついに古代の衣装を脱ぎ、ネイビーブルーのアンサンブルニットに白のロングスカートへと衣装をあらためていた。

　そんな夫人のそばには、渋しぶい顔の女性と真剣な面おも持もちの青年がいる。

　ポニーテールの女聖騎士にしてドニの師し匠しよう、聖ラファエロ。そしてエリカの叔お父じであるパオロ・ブランデッリの両名だった。

「ったく、こっちの苦労も知らないで気軽に言ってくれるよなあ」

「夫人。当地に滞在中、何かご希望があれば全て私と、我わが結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》にお命じください。パオロ・ブランデッリ、しばらくはあなたに仕つかえる騎士となり、あなたの手足となる所存です」

「まあ！　エリカさんのおじさまは紳士なのですね！」

　うやうやしいパオロの申し出にアイーシャ夫人は感動していた。

　もっとも、これは騎士道精神の発はつ露ろではなく、『危険人物のそばに張りつき、監視するための方便』と見なすべきだろう。

　実際、夫人がこのホテルに腰を落ちつけそうな気配なので、護堂も思ったのだ。

（俺もしばらくの間、ここでこの人を見張るべきかなあ）

　などと。せめて試験休みの間くらいは、と。

　日本を出る前、護堂たちの城じよう楠なん学がく院いんでは三学期の試験が行われた。その後の試験休みと連休を利用して、はるばるイタリアまで来たのである。

　一方、アイーシャ夫人から見えない物陰でひそひそ話をする者たちもいた。

「このホテルの人間は大丈夫なのか？　アイーシャ夫人の権けん能のうに魅み了りようされてしまう危険、十分にあるはずだろう？」

「ここはもともと《百ゆ合りの都》が経営するところだから」

　のほほんと微笑む夫人を遠目に見ながら、リリアナとエリカがささやき合う。

　ちなみに《百合の都》とは、トスカーナの古都フィレンツェを本拠とする魔術結社だ。

「実はほとんどの従業員に魔術の心得があるそうよ。あと念のため、彼らの脳と精神を護ご身しんの魔術でガードしていると聞いたわ。……まあ、気休め程度にはなるかしら」

「恵那たちだって、アイーシャさんの権能にはがっつりやられたもんねえ……」

　エリカのコメントに恵那もしみじみと賛同していた。

　ともあれ、今回の旅は約二か月にもおよぶ大遠征となった。しかし、現代にもどってみれば、カレンダーの日付はわずか二日しか進んでいない。

　護堂たちは結局、出発した日の翌々日に帰還したのである。

「さすがタイムスリップと言うべきなのでしょうか。いいかげんすぎます」

　リリアナがあきれ気味につぶやくのも納得だった。

　当座の落ち着き先となったトスカーナの古城ホテルでは、聖ラファエロやパオロだけでなく、ドニの執しつ事じアンドレア・リベラも待っていた。

　ホテル到着時、彼は所用で外出していたのだが。

　もどってきて痴しれ者の主あるじと再会するなり、

「さてサルバトーレ・ドニ。重量三〇万トンのタンカーでも道連れにしてマリアナ海かい溝こうの奥深くへと旅立つ覚悟、すでにすませているのだろうな？　今度こそ貴様を地上から永久追放すべきタイミングかもしれん。この問題についてじっくり話し合おう」

　騒動の張本人となった男の首根っこをつかみ、別室にひきずっていった……。

　尚なお、護堂たちを迎えてくれたのは彼らだけではなかった。

「お兄さま！　それにお姉ちゃんもみなさんも、ご無事で何よりです！」

「緊急事態の発生と聞いて、日本から飛んできたのですがね。ここに来るまでの間に問題は解決されたようで、何よりですよ」

　護堂たちが帰還した日の午後、ホテルに日本人ふたりがやってきたのだ。

　祐理の妹・万里谷ひかりと正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのエージェント・甘あま粕かす冬とう馬まだった。『日本のカンピオーネ一行がタイムスリップ⁉』の報を聞いて、甘粕が急きゅう遽きょイタリアへ赴おもむくことになったのだという。そして、ひかりも同行を志願したのだとか。

「お兄さまのご帰還をお手伝いできればと思っていたんですけど、結果的に只ただのイタリア旅行になっちゃいました」

　事情を語ってから、ひかりは悪戯いたずらっぽく付け足した。

　万里谷家の次女はまだ一二歳だが、媛ひめ巫み女こ見習いでもある。だからこそ、今回の派は遣けん志願も認められたのだろう。護堂は心から礼を言った。

「その気持ちだけで十分だよ。わざわざ悪いなあ」

「あ、そうだ。お祝いというわけではありませんが、プレゼントがあるんです。あとでお渡ししますね！」

　と、小学六年生とは思えないほど気配り上手の少女は朗ほがらかに笑った。

　ちなみに、予期せぬ出迎えは日本人だけではなかった。ひかり・甘粕との再会から一時間後、ふらりとアメリカ人女性もホテルのロビーに現れた。

「おひさしぶりね、草薙護堂」

「アニーさん！」

なつかしい知ち己き、アニー・チャールトンだった。

ロサンゼルスの魔王ジョン・プルートー・スミスの協力者である。燃えるような赤毛のクールビューティはトレンチコートにグレーのパンツを合わせて、真冬の装よそおいであった。

十数分後、護堂はホテルのラウンジでアニーと向き合った。

ふたりの間にはテーブルと、湯気を立てるエスプレッソ二杯が配置されている。

「五世紀のガリアでは、ずいぶんと好き勝手していたそうね」

「俺はどちらかと言うと、好き勝手するドニとアイーシャさんを抑える方でしたが……」

皮肉っぽい言葉に、護堂はささやかな反論を返した。

だが、アニー・チャールトンはフンと鼻で笑い、冷ややかに言う。

「アストラル界プレーンにある〝プルタルコスの館やかた〟……あそこの老人からスミスが聞いたそうよ。草薙護堂氏は五世紀ガリアの地でも華やかな後こう宮きゅうを築き、大勢の美女にかこまれて遊ゆう興きょうの日々を謳おう歌かしていたと」

「あ、あれはみんな勝手に俺のところへ集まってきただけです！」

最終的に護堂一行の本拠地となったローマ植民市、コロニア・アグリッピナ。

周辺の実力者が要いらぬ気き遣づかいをして、草薙護堂——あの一帯で最強の武力と影響力を持つにいたった男のもとへ、幾人もの美女を次々と送りこんできたのである。

あの頃、護堂はコロニア・アグリッピナの領主のような立ち位置であった。

古代旅行の事情を知っているとは、さすがスミスの協力者。そして、アニーがここに来たのは、ガリアの戦いで切り札となった魔ま銃じゅうを受け取るためだ。

　そう。あの旅でリリアナに託たくされたジョン・プルートー・スミスの武器を。

　魔銃を返還したのち、護堂は話題を変えた。

「ところで俺たちが帰ったあと、あの時代の歴史はどうなったんでしょうね？　なんとかの館にいるっていうお年寄り、スミスに何か言ってましたか？」

「特に伝言はなかったそうよ。ということは、おそらく」

　突然の質問にも、アニーはすらすらと答える。いかにも『できる女』という風ふ情ぜいのクールビューティぶりにふさわしい、怜れい悧りさと有能さであった。

「歴史の大筋は何も変わらなかったのではないかしら？　歴史の流れを守る修正力や、あなたたちの尽じん力りよくのおかげで」

「ってことは、ウルディンのやつも『最後の王』に殺されたのか……？」

　古代ガリアで巡り会った、あの時代のカンピオーネ。

　その名をつぶやいて、護堂は考えこんだ。おそろしく強大で、しぶとく、殺しても死ななそうな男。戦士のなかの戦士。野や蛮ばんにして狡こう猾かつなる魔王。

　想像しづらいが、あの男もついには『最後の王』に敗れたのだろうか？

　重くなった空気をやりすごすように護堂がエスプレッソを口に運ぶと、アニーも同じことをする。ここで気づいた。ほかにも言っておくべきことがある。

「そうだアニーさん。ありがとうございます」

　腰かけたままではあったが、護堂はきっちりと頭を下げた。

「わざわざアメリカからイタリアまで、あの銃の回収に来ていただいて……。本当なら、俺の方がロサンゼルスまで行かなきゃいけないところなのに」

「気にしないで。只のついでだから」

　アニーは肩をすくめて、鷹おう揚ように受けながす。

「私は——私やスミスは《蠅はえの王》との抗争があったから、長くロスを離れるわけにいかなかったの。今回はひさしぶりに息抜きの観光旅行でもしようと思って、ヨーロッパをあちこち回るつもりで来たの。ここに寄ったのもそのついでよ」

「それでも助かりました。本当にありがとうございます」

　日につ光こう東とう照しよう宮ぐうにも現れた神しん祖そアーシェラひきいる邪じや術じゆつ師し集団《蠅の王》。

　ここ数年、ジョン・プルートー・スミスの宿敵だったという。その名を出したクールビューティのそっけなさは気を遣わせまいという心配りか、それとも生せい来らいの性格ゆえか。

　いずれであっても感謝の気持ちは変わらない。

　護堂は重ねて礼を言ってから、にやっと笑って付け加えた。

「あとスミスのやつにも伝えておいてください。『世話になった。そのうち借りは返す。俺の方は横おう着ちやくしないで、あんたのいるところまで出かけてやる』って」

「彼が聞いたら、きっとこう答えるでしょうね」

　伝言を託たくされて、アニーは打てば響くように言った。

「『了解した。ならば、できるだけ高く返してもらう。利子の高さへの苦情は一切受けつけないので、そのつもりでいるように——』。こんなところかしら」

　アニーの表情は硬く、いつもと変わらぬ生き真ま面じ目めさだった。

　しかし、仮面の神殺しが使いそうな気取った文句を、微妙に声こわ色いろを変えて口にする。その意外な茶ちや目めっ気けに護堂は口元をほころばせた。

　結局、アニーはエスプレッソをさっと飲み干して、足早にホテル

を出ていった。

「ところでアイーシャさん。ちょっと質問があるんだけど、いいかな？」

「はい、なんでしょうドニさん？」

　忠実な執事との心あたたまる対話を四時間で切り抜けた青年魔王と、一〇代の少女にしか見えない可か憐れんさの女魔王（年齢不詳）が肩をならべている。

　古城ホテルの一角に設もうけられたバーである。

　サルバトーレ・ドニとアイーシャ夫人はカウンターの前にすわっていた。

「ほら。アイーシャさんは長い間あちこち旅してきて、いろいろ物知りじゃない？」

「そんな。とんでもないです。わたくし程度の知恵なんて、本当にたいしたことないんですから……ふふふふ。それで、何をお知りになりたいんですか？」

　持ちあげられて、夫人は謙けん遜そんしつつもまんざらでもなさそうであった。

　ウイスキーの水割りを口へ運ぶドニに、無邪気な微笑を向ける。彼女の前にはフレッシュオレンジジュースが置かれていた。

　一方、隅のテーブル席から魔王ふたりを見つめる騎士が二名いた。

　エリカとリリアナである。超危険人物二名の動向をさりげなく警戒中なのだ。

「この間、ガリアで会った『最後の王』。ほかの時代でもあの神様を見たことある？　彼についての話を聞いたこととかもないかな？」

「いえ、特には……。あ、ただ」

即答しかけてから、夫人は思し案あん顔がおになった。

「唐とう代の中国を旅していたとき、〝末まつ法ぽうの世に顕あらわれる英雄〟が神殺しの羅ら刹せつ王おうを追って東の果て——日本国へ旅立った、みたいなうわさを聞いた気もします。ええ、たしか長ちよう安あんのえらいお坊様とおしゃべりしたときに」

「なるほどなるほど」

昔語りにドニがうんうんとうなずいている。

そのやりとりに聞き耳を立てながら、エリカとリリアナは目配せを交わした。

サルバトーレ・ドニは己おのれの欲求を満足させるためなら、火薬庫でライターを持ったままタップダンスを踊ることもいとわない魔王。そして、彼がいつも求めてやまないのは偉大な雄ゆう敵てきである。そんな男が『最後の王』の情報を集め出した……。

おそらく、古代ガリアで見た英雄の力が忘れられないのだろう。

これはもちろん不吉な兆候であった。時の旅を終えたばかりだというのに、魔王たちのまわりでは危険の火種がすでにくすぶりはじめているのだ。

2

「あれ、甘あま粕かすさんはどうしたんだ？」

アニーを見送ったあと、護ご堂どうは万ま里り谷や姉妹の部屋を訪ねた。

発熱したためベッドで横になっている祐ゆ理り、その枕まくら元もとであれこれと世話をしている妹のひかり、のんびり椅い子すにすわる清せい秋しゆう院いん恵え那なの三人がいた。

しかし、甘粕冬とう馬まの姿はない。ここにいると思っていたのに。

「もしかして、スキーでもしに外へ行ったとか？」

　最初に思いついた想像を護堂は口にしてみた。緑豊かなカゼンティーノの森と山々はすこし前にたっぷりと大雪が降ったばかり。現在は一面の銀世界なのである。

　となれば、ウインタースポーツのひとつでもやってみたくなるところだ。

　まあ、昼ひる行あん灯どんかつインドア派の甘粕ならば、そんな選択はしないようにも思えるが……。

　だが、スキー以上に予想外の返答が待っていた。

「ああ、甘粕さんならホテルのエステに行くって言ってたよ」

　恵那があっけらかんと答えたので、護堂は仰ぎよう天てんした。

「あの人がエステに⁉」

「はい。なんでもオイルマッサージをしてもらうそうです」

　補足する祐理はベッドの上で背中にクッションを当て、上体を起こしていた。意外と元気そうなので護堂は安心した。

　また、姉のそばではひかりが笑っている。

「飛行機のシートにすわりっぱなしだったダメージと、フィレンツェの空港から車を運転してきた疲れを癒いやすんだーって、予約を入れてました」

「そういえば、ああいうところって男が出入りしてもべつに悪くはないんだよな」

　美容ではなくリラクゼーションが目的らしい。

　前に犬いぬ吠ぼう埼ざきへ行ったときも、甘粕は各種マッサージを堪たん能のうしていた。もしかしたら、そういう場所をまわるのが趣味なのかもしれない。護堂は納得した。

「ま、いいんじゃないかな」

　能天気に笑いながら、恵那がベッドサイドに手をのばした。

　そこに置かれた小皿には、切り分けられたリンゴがならんでいた。一切れつまんで、しゃくりとかじってから、恵那はさらに言う。

「忍びの者の仕事は今回、イタリアの人たちがやってくれているんだし。あの人も今回は慰い安あん旅行ってことでさ」

「いろいろ忙しい人だもんなあ」

「ところでお兄さま。ひとつ報告があります！」

　うなずく護堂へ、唐突にひかりが笑いかけてくる。

「私、この春から城じよう楠なん学がく院いんの中等部へ通うことが決まりましたっ」

「実は先月、入試を受けていて……無事に合格できたんです。四月からは私たちの後輩ということになります。よろしくお願いしますね、護堂さん」

　元気な報告に続いて、ベッドの上で祐理がしっとりと頭を下げてくれる。

　護堂は「へえ」と感心した。自分たちが通う私立城楠学院。公立校ではないので、中学から通うには入学試験をパスする必要がある。

「そりゃめでたいけど、うちの学校でよかったのか？」

「はい。お姉ちゃんだけじゃなくて、お兄さまたちもいらっしゃいますし。……で、それとはべつにもうひとつ報告です。さっき申し上げた、プレゼントの件」

「ああ、ここに着いたとき言ってたやつか」

「まだ何日か早いですけど、お兄さまに当日お会いできるかもわかりませんし、今ここでお渡ししてしまいます。どうぞ！」

「…………？」

　ひかりが自分のバッグから取り出した、四角い包み。きれいに包装されている。細長い箱型だった。かわいらしくリボンまで巻かれ

ていた。

　これは何なのだろう？　いぶかしむ護堂へ、ひかりが笑顔で言う。

「ほら。もうすぐバレンタインデーですよ、お兄さま！」

「……ああ、そうか」

　中身はチョコレートなのだろう。種明かしされて、護堂は苦笑した。

　二か月近くも五世紀初頭のガリアにいたため、暦こよみの感覚がすっかりなくなっていた。しかし、現代のカレンダーは二月上旬の日付をはっきりと示している。

「まだ学校もちがうわけだし、たしかに当日会えるか微妙だもんなあ」

　そもそも、二月一四日までに帰国するかもまだ決めてない。

　その辺を考慮すれば、ひかりが幾日かフライングしても問題ないだろう。

　護堂はありがたく包みを受け取り、小学六年生の贈り主に笑顔を向け、その頭を思わず撫なでてしまった。実の妹に同じことをすれば『子供あつかいしないでよね！』とクレームが付くところだが、ひかりはうれしそうに笑顔を返してくれる。

　ちなみに、姉である祐理は愕がく然ぜんとしていた。恵那も意表を突かれた表情だ。

「そ、そういえば、すっかり忘れていました……」

「こっちのカレンダーとか全然気にしてなかったもんねえ。それにしてもバレンタインか。風のうわさに聞いたことがあるよ。チョコレートを差し入れする日だっけ……」

「じゃあ、ホワイトデーと入学祝い、何か考えないとダメだな」

　せっかくの心こころ遣づかいにせめてお返しでもと、護堂はつぶやいた。

「ひかりは何か欲しいものとか、あるか？」

「特にはありません。でも、もし〝おねだり〟してもいいなら——お兄さまといっしょに遊びにいきたいです！　遊園地みたいなテーマパークとか、水族館とか」

「え？　俺なんかといっしょに？」

　できるだけ要望には応こたえてやりたいが。護堂はとまどった。

　女子と連れだって、どこかのレジャースポットに出かける。そこがちょっと気恥ずかしいため、ふたつ返事で承しよう諾だくとはいかず、すこし口ごもってしまった。もちろん、これはデートなどではない。相手は妹のような年齢の女の子なのだ。

　しかし、女子とふたりきりというのは、やはり気恥ずかしいものがある——。

　言葉を探す護堂を見て、すかさずひかりが言った。

「お願いします、お兄さま。私と、うちのお姉ちゃんと、恵那姉さま、エリカ姉さま、リリアナ姉さまもいっしょに、是ぜ非ひどこかへ！」

「あ、みんなも連れていくのか？」

「はい、もちろんです！」

　女子の集団にひとりだけ男がいる。それはそれで照れくさい。だが、これを拒こばむのも年長者として、いかがなものかとも思う。護堂は苦笑いして、鷹おう揚ように言った。

「ああ、わかった。じゃあ、日本に帰ったら予定を組んでみるか」

「本当ですか？　うれしいです！」

「当日はやっぱり、ひかりを主しゆ賓ひんとして接待しなくちゃだなあ」

「ふふふふ。そんなに気を遣わないでください。いつもどおりでいいんです」

素直なひかりと言葉を交わしながら、ふと護堂は不思議に思った。

今の流れを間近で聞いていた祐理がびっくりした様子で妹を見つめており、恵那は「ひかりもやるもんだなあ。末恐ろしいや」と小声でささやいていたように思えたのだ。

「やはり、万里谷ひかりのポテンシャルにはあなどれないものがあるな……」

事情を聞いて、リリアナは感かん慨がい深げにコメントした。

現代に帰還した日の翌日。車を出してもらい、宿泊先の古城ホテルからも近いポッピという町に来ているところだった。まだ昼前である。

清秋院恵那と、熱の下がった万里谷祐理が同行している。

今、三人はスーパーで買い物中だった。といってもヨーロッパの小さな田舎いなか町まち、店の大きさも日本のコンビニと大差ない程度。たいした品しな揃ぞろえではない。

そんな店内の菓子コーナーで、彼女たちはチョコを物色中だった。

やはり、この時期の日本の売り場ほどの彩いろどりと品数はない。それでも目を凝こらして吟ぎん味みしつつ、リリアナはつぶやいた。

「草薙護堂の救援を第一目的にしつつも、彼が自力で生還する可能性も考慮して、荷物にチョコレートも用意しておく。イタリア滞在中に渡すことができれば、自分の印象が最も強くなると当て込んで……」

「ひ、ひかりはそこまで考えていたんでしょうか？」

「雌め狐ぎつねのエリカのように全て計算ずくという線はないと思うが、『そうなったらいいかもしれない』くらいには考えて、準備だけはしていた——そういう気がするな。あと、もうひとつ見過ごせないのは謝礼の件だろう」

姉である祐理がとまどうそばで、銀髪の女騎士は語る。

「入学祝いとチョコのお返しも合わせて、草薙護堂とふたりだけのデートを望むこともできたはずなのに、あえてわたしたちもいっしょにという流れにした。その方が草薙護堂を誘いやすいし、何より風当たりも弱まる」

「風当たりって……もしかして、恵那たちからの？」

「ああ」

「べつにその程度のことでひかりをいじめたりはしないのに……。まあ、でも、たしかにすこしはうらやましく思っちゃうかもしれないけど」

やや心外そうにコメントしてから、恵那が付け足す。リリアナはうなずいた。

「つまり、そういうことだ。万里谷ひかりは『チョコレートを渡す』というイベントでささやかな勝利を得た。だが、彼女は勝ちすぎることを注意深く、もしくは無意識に避けた。逆にわたしたちとも楽しみを分け合う形にして、摩ま擦さつを起こすまいとしたんだ」

「たしかに、ひかりにはそういうところがあるかもしれません」

妹の人となりを振り返ったらしく、祐理がつぶやいた。

「まわりの人と波風を起こさないように自分の意見を言うのが昔から上手な子なんです。ときどきうらやましくなるくらい……」

「駆け引き……いや、処しよ世せい術じゆつの勘かんが鋭いのだろうな」

「それはそれでいいのかもね。ほら、王様ってああいう人じゃない？　これからも身近に女の人が増える可能性はあるし、ひかりみたいな子がひとりいてくれると、いろいろ上う手まくまわるかもよ。人間関係ってやつが」

諦てい観かんに満ちた恵那の言葉に、リリアナも祐理もうなずいてしまった。

彼女たちの中心に座す人物は〝いつのまにか親密な人間を増やす〟という特技をひそかに持っているのだ。基本的に男女問わない気性だが、なぜか女性との縁が頻ひん繁ぱんに多くなる星まわりも持ち合わせている——。

「ともかく、そういう諸事情がある以上」

リリアナは軽く肩をすくめて、割り切るように言った。

「今日のところは万里谷ひかりに譲っておくべきだろう」

「王様とふたりで散歩に出かけてるんだっけ？」

「あ、はい。ひかりが町を見てまわりたいと護堂さんにおねだりして、それで」

「まあ、なんだかんだ理由をつけて、ついていくこともできるわけだが。ここは気を利きかせておくことにしよう」

「恵那たちもチョコ買っておかなきゃいけないしねえ」

「どうもすみません……」

おしゃべりしながら三人はそれぞれ品物を選び、会計も済ませてスーパーを出た。

自然がゆたかな土地柄がらである以上、このあたりはもちろん田舎いなかである。近代的なビルなど一軒も建っていない。鉄筋コンクリートよりも煉れん瓦が造りの建造物の方が遥はるかに目に付く。

欧おう州しゆうの古き良き街並みの雰囲気が充みち満みちていた。

しかも、そこかしこに雪がたっぷりとつもり、白い冬化粧をととのえている。そのうえ雪景色ではあるものの、空は青く晴れ渡っている。

雪に足を取られることさえのぞけば、ある意味で散歩日和びよりだった。

ただ歩きまわるだけでも、東洋から来た日本人には十分以上の楽

しみとなる。

「あ、そうだ。エリカさんって今、サルバトーレの王様を見張ってるんだよね？」

　先頭に立って歩き出しながら、恵那が訊たずねた。

「ああ。アンドレア卿きようやエリカの叔お父じ上うえとも相談して、あの御方の監視態勢を緊急ででっちあげたからな。ふつうの相手であれば、これでなんとでも抑え込めるはずなんだが」

　リリアナの説明はため息まじりであった。

「もちろん、あの御方はふつうじゃない。頭の痛いところだ……」

「まあ、サルバトーレの王様が『最後の王』を気にするのもわかるけど。あの神様、とんでもなく強そうだもんね」

「この世の最後に顕あらわれる王——」

　恵那のつぶやいた名を聞いて、不意に祐理がささやいた。

「前に申し上げたとおり、あの御方の真ま名なはまったく視みえなかったのですが……ただ、なんとなく感じることがあります」

「もしかして何か視えたの？　さすが祐理！」

「というほどでは……。本当に漠ばく然ぜんと感じただけなんです。もしかしたら、あの御方のご素性を解き明かす鍵かぎは意外な形で日本に——私たちの身近にあるのではないかと」

　万里谷祐理は卓越した霊れい視し力りよく者しやである。

　もしかすると、この分野では世界最さい高こう峰ほうであるかもしれないほどに。麗うるわしき媛ひめ巫み女こが口にする啓けい示じに、恵那とリリアナは興味深げに聞き入っていた。

護ご堂どうたちが訪ねたポッピは、ごく小規模な田舎いなか町まちである。

人口はせいぜい六、七千人というところだ。だが町の起源は古く、古代ローマの時代だという。また中世の頃にはこの近辺を治める領主の城が建てられ、城下町も造られた。

この小さな町の歴史地区には、今も中世の街並みがそのまま残されている。

さらに当時の建築である礼拝堂、教会、前述した領主の城なども健在であった。

そんな古い街並みが今、雪化粧を施ほどこされているのだ。ただ散歩するだけで、日本では経験できない異国情じよう緒ちよを満まん喫きつできる。

寒さを堪こらえながらも徒歩で見てまわる価値は十分にあった。

「といっても、そろそろ熱いコーヒーでも飲みたいところだけどな」

「どこかでお昼をいただくのもいいですよ、お兄さま！」

雪道をそぞろ歩きすること、すでに一時間半。

護堂の体はすっかり冷え切っていた。ひかりも同じだろう。

とはいえ、食事を提案する少女の声と表情は明るい。楽しんでくれているようだ。ちなみに、ふたりとも防寒の準備はばっちりだった。護堂はウインタースポーツでも使えるポリエステル素材のやわらかなジャケット、ひかりは白いダッフルコートを着ていた。

さらに毛糸の帽子、手袋も着用済みで、ひかりの方はマフラーまで首に巻いている。

「食堂みたいなところ、あるといいんだけどなあ」

ひかりを連れて歩きながら、護堂はつぶやいた。

実はこの町、前にも訪ねたことがある。

　去年の三月、カゼンティーノに出没する謎なぞの神獣を追いかけたときだ。五世紀ガリアから来たウルディンの竜がここにも現れたのだ。

　しかし、滞在時間はごくわずかであった。当然、町の事情など把握していない。

　きょろきょろとあちこち見まわしながらの道行きとなる。

「そういえば、静しず花かからメールが届いてたんだよな」

　歳下の少女といっしょにいるからか、護堂はふと妹のことを思い出した。

　今朝、出かける前にメールの着信に気づいたのだ。

「お兄さまの妹さんから、ですか？」

「ああ。口の悪いやつだから、メールでも人に文句つけてきたよ。まあ、行き先も教えないまま家をずっと留守にしている俺が悪いんだけど」

　万まま里り谷や姉妹の妹とちがい、草くさ薙なぎ兄妹きょうだいの妹は少々きつめの性格なのだ。

　苦笑してから、護堂は思い出した。時候の挨あい拶さつ代わりに『一体どこほっつき歩いてんのよ、バカ兄貴！』ではじまるメールのことを。

　鉄砲玉よろしく帰ってこない兄への批判精神に満ちた文面だったのだが。

「ちょっと気になることも書いてたんだよな。クリスマスのパーティーで会った男の子と新宿でばったり出くわしたとか、なんとか……」

「クリスマスの男の子——ということは、香港ホンコンの陸りくさんですよね」

　あのとき『男の子』に該がい当とうする出席者は一名しかいなかった。

　察しよく見当をつけたひかりにうなずきかけてから、護堂はしみじみと言った。

「静花のやつ、鷹よう化かに迷惑かけてないといいな……。前にあいつ、ちょっと変なことを口走っていたぞ」

　たしか『あの子、生意気そうだけど舎しや弟てい根性が身についてそう』だったか。

　そして、静花は生まれついての姉あね御ご肌はだ。いずれは母に似て〝職業・女王様〟の道を歩みかねない草薙家の女――。

　女運がきわめて悪い義理の甥おいのため、遅ればせながら祈る護堂だった。

　一方、隣を歩くひかりはべつの問題を気にしていた。

「私、まだ静花さんとも陸さんとも仲よくなれていないんです。次にお目にかかったときはもうちょっと親密になれるよう、がんばってみます！」

「えっ？　そんなふうに気を遣つかわなくてもいいんだぞ」

「いえいえ。お兄さまのおそばにひかえる者としては当然の心がけです。それに私がそういうことに気を遣うと、それだけお姉ちゃんのためにもなるでしょうし――」

「…………」

「私たち、お兄さまのご家族とも万里谷家の姉妹として良好なおつきあいをしなくちゃいけないと思うんです。これからも姉妹ともどもよろしくおねがいしますね♪」

　あいかわらず小学六年生とは思えないほど、気配り屋の少女だった。

　また、護堂はひそかに面白く思った。

　姉の祐理は良くも悪くも浮き世離れしていて、高こう潔けつなお嬢さまである。対してひかりは世俗のつきあいに万事抜かりがない。少々気を回しすぎるほどに。

性格的には、決して似た者同士ではない姉妹。

だが、そうであるからこそバランスのよい組み合わせなのかもしれない——。

「ん？」

このとき、護堂たちは大通り沿いの歩道を進んでいたのだが。

一〇メートルほど先に見覚えのある青年がいた。金髪、一八五センチ前後とおぼしき長身、へらへらと締まりのない顔つき。サルバトーレ・ドニだった。

灰色のコートを着て、細長い円筒型のケースを肩から提さげている。

ドニは歩道の脇わきに停車していたライトバンに近づいていく。そのまま断りもなしにドアを開けて、乗りこんでしまった。

すぐさまエンジン始動。ライトバンは軽快に走りはじめた。

「あいつ、どこかへ出かけるのか……？」

護堂は首をかしげた。リリアナから報告を受けている。

あの軽率なトラブルメーカーが『最後の王』に興味を持っているらしいと。

草薙護堂の侍じ従じゆう長ちようにあたる女騎士は、こう報告してくれた。

『もちろん、最後の王はもう千年近く休眠している神格。神しん祖そたちが長年かけて探索しても、いまだ正体のわからない存在です。サルバトーレ卿きようがすこし事を起こした程度で復活する可能性は皆無でしょうが……。念のため、しばらく卿を監視することになりました』

アンドレア・リベラ、パオロ・ブランデッリ、聖ラファエロといった重じゆう鎮ちんたちの意見が一致したらしい。彼らは熟じゆく知ちしているのだ。カンピオーネがしばしば確率論を無視して、成功率一％以下の難題を能天気にクリアする種族だという事実を……。

　走り去るライトバンを見送りながら、護堂は迷った。

　自分も『念のため』に参加すべきだろうか。だが、この土地にはもう一名の要監視者・アイーシャ夫人がいる。どちらを重視すべきだろう。

「い、今のはサルバトーレ卿ですよね？」

　護堂の視線に気づいたらしく、ひかりも同じライトバンを見つめていた。

「お兄さまの大親友で、宿命のライバルだっていう！」

「そのめちゃくちゃ不正確なプロフィール、誰から教わったんだ!?」

「ち、ちがうんですか？　昨日の夜、ホテルで偶然お会いしたサルバトーレ卿にごあいさつしたとき、卿ご自身がおっしゃっていたんですが——」

　ひかりの釈しやく明めいを聞いて、護堂はがくりと脱力した。

　この場合、天下のカンピオーネが相手でもきちんと初対面のあいさつをした小学六年生に非はないだろう。問題はまちがいだらけの自己紹介をした年長者サイドにある。

「やっぱり、あのバカを追いかけるか……！」

　理性ではなく、瞬間的な腹立ちにまかせて決断した直後だった。

「護堂、ちょうどよかったわ！」

「……エリカか!?」

　颯さつ爽そうたる美声で呼びかけられて、護堂は驚いた。

　車道からの声だったのだ。見れば、中型バイクにまたがった女性ライダーが歩道にいる護堂たちへ寄ってきて、路肩で駐車するところだった。

　バイクの塗装はあざやかな真しん紅く。まとうレザースーツは漆しつ黒こくだった。

紅と黒ロツソネロの組み合わせである。女性ライダーがヘルメットを脱ぐと、エリカの美び貌ぼうと金髪があらわになる。

「わたしはこの町から出ようとしているサルバトーレ卿を追跡中なの。そうそう万一の事態にはならないと思うけど、あなたもよかったらついてくる？」

「ああ。あいつを野放しにするのもいろいろ不安だからな！」

護堂は即答してから、ひかりに目を向けた。

幼い媛ひめ巫み女こ見習いは即座にこくんとうなずいてくれた。

ひとりでホテルまで帰るという意思表示。まだ一二歳とはいえ海外旅行も何度か経験しているという。何より彼女は賢い。護堂は安心した。

バイクにまたがるエリカのうしろにさっそく乗りこみ、ふたり乗りタンデムの態勢になる。

「待ってください、お兄さま！　これをどうぞ！」

エリカがエンジンをかける直前、とっさにひかりが駆けよってきた。

自分の首に巻いていたマフラーを手早く外し、護堂の首にきつく巻きつけてくれる。

只ただでさえ極寒の冷風が吹いている。その風のなかでバイクを駆れば、さらに強烈な寒風を全身で受け止めなければいけない。

それを心配して、ひかりは防寒具を分けてくれたのだろう。

「ありがとうな。やってくれ、エリカ！」

少女の気遣いに感謝してから、護堂は腰のうしろに両手を回した。

シート後部のタンデム用グリップをつかみ、体重を支える。ふたり乗り時の安全性を高めるためのバーだった。

金髪の相棒はすぐさまアクセルを吹かし、真紅のバイクを発進さ

せた。

　ぐんぐんスピードが上がっていく。あっという間にひかりの前から走り去った。

　車道の上は除雪作業が終わっているため、走行に支障はない。

　さらに交通量もすくない。サルバトーレ・ドニを乗せたライトバンに遅れること数百メートル。エリカが駆るバイクは危なげなくスピードを上げ、じりじりと距離を詰めていった。

　あざやかな運転ぶりに護堂は感心した。

「おまえ馬だけじゃなくて、こっちもいけたんだな！」

「ええ。斉せい天てん大たい聖せいの事件のときに必要だと感じて、いろいろ学んだの！　今のわたしはあのときとはちがうわよ！」

　ふたりを乗せて、排気量四〇〇ＣＣの中型バイクは風を切って快走する。

　風の音に負けないよう、大声で会話する必要があった。エリカが言う斉天大聖の事件が起きたとき、彼女が乗りまわしたのは四輪自動車だ。二輪のバイクではない。

　だが、イタリア人少女の背後で、護堂は納得した。

　たしかにちがう。あのときもエリカは持ち前のセンスと器用さで初めて（！）乗る自動車を巧たくみに操ってみせた。

　しかし、明らかに交通法規や運転マナー等は知らない様子だった。

　そして今回、エリカはあざやかな身のこなしと目配りで中型バイクを操るだけでなく、周囲を走る車両にまったく迷惑をかけることがない。

　車の流れに乗り、自然に走行している。まったく危なげない運転だった。

　学んだというのは、一般道を実走するための知識と経験なのだろ

う。

「さすがはエリカ・ブランデッリ——。そう賞賛してもいいのよ、護堂？」

「たしかにな。いろいろ忙しいのにたいしたもんだよ。あのときから半年しか経たってないのに、ちゃんとイタリアで使える免許を取ってるんだから……」

「え、免許？」

「…………おいエリカ」

「そういえば、運転免許証の取得は後まわしにしていたわね」

「って無免許運転かよ!?　前言撤てつ回かいだ！」

「いいじゃない。操車技術も運転マナーもまったく問題ないのだし。仮に免許証が必要な状況になったとしても、わたしには魔術があるわ」

　まったく悪びれずにエリカは言った。

　いざとなったら、催眠系の魔術で警察関係者を眩げん惑わくするつもりなのだろう。《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の筆ひつ頭とう騎士は華麗なライディングフォームを一瞬たりとも崩すことなく、前方を走行中のライトバンに鋭いまなざしをそそいでいた。

　あいかわらず、一般常識をリスペクトする意識は希薄であるらしい。

「それより護堂！　しっかりつかまっていなさい！」

「こうなったら仕方ないか……。ドニのバカを見失わないでくれよ！」

「ええ、まかせて！」

　時速七、八〇キロで冬の風を切り裂いて、疾しつ走そう——。

　当然、歩いていたとき以上に全身が冷えていく。ひかりに巻いて

もらったマフラーのぬくもりをありがたく思う護堂だった。

４

　ドニの乗車したライトバンは西をめざして、トスカーナ州の州道をひた走った。

　峠とうげ道みちばかりの山間部を抜けると、次はフィレンツェ県の県道へ入って州都フィレンツェ付近へ到着。しかし市内には入らず、さらに西へと向かう。

　ドニ一行が使った県道は、そのまま進めばイタリア半島西岸部に到達するという。

「護堂。この辺でそろそろ遅めのお昼をいただきましょう」

　エリカの駆るバイクは一定の距離を置いたまま、ドニが乗るライトバンを一時間半ほど追跡し続けてきたのだが。

　フィレンツェ近郊で急に速度を落とし、路肩に駐車してしまった。

　ずっと追いかけてきたライトバンは走り去っていく。こんなところでエリカが失態を犯おかすはずもない。護ご堂どうは確信にまかせて訊たずねた。

「ここで追跡役を交代するってことか？」

「ええ、正解。実はね、サルバトーレ卿きようを追ってきたのはわたしたちだけじゃないわ。ほかにもう二組、カゼンティーノから尾行を継続中よ。そして、わたしはもともとフィレンツェ近辺でほかの《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》メンバーと交代する予定だったの」

「やっぱりか」

　その道のプロフェッショナルが尾行を行う際は、複数の班に分かれて事に当たる。

　そういう話を護堂も聞いたことがあった。エリカたちイタリア陣営の手配に抜かりはないようだ。しかし、金髪の女騎士は眉まゆをひそめた。

「本当は魔術を使って追跡するのがいちばんまちがいないのだけど。サルバトーレ卿は鋭いから、逆に気づかれてしまう危険があるのよね」

　ちなみに、ドニは愛用の携帯電話を自室に放置したまま出発したという。

　そのため通話記録やＧＰＳ等で位置を確認することもできない。現代人のくせにこの手の小道具への愛着がうすいのと、音信を絶つためだろう。

「あとは卿を迎えに来たグループがわたしたちを出し抜けるほどの手て練だれかどうか――」

「あいつら、ドニの手下ってことでいいのか？」

「そうではないと思うわ。あの方の個人的なスタッフは全員、執しつ事じのアンドレア卿が指示してトスカーナ州から退去させてしまったの。『王の執事』の厳命に逆らう愚おろか者は、あの陣営にはいないはずよ」

「じゃあ、アンドレアさんも知らない秘密の配下を外から呼びよせたのか……」

「そうと見て、まちがいないでしょうね」

　エリカはふたたびバイクを発進させて、フィレンツェ市内へ向かう。

　ほどなく適当な教会を見つけて、ここに隣接する駐車場にバイクを駐とめた。観光のためではない。近場の食堂トラットリアに入るためだった。

　ふたりはようやく腰を落ちつけて、遅めのランチに取りかかった。

「ドニのやつ、どこに行くつもりなんだろうな？」

「たぶんトスカーナを出る予定なのはまちがいないでしょうね。あの道をまっすぐアルノ川に沿って進んでいくと、ピサに行きつくから」

　アルノ川。トスカーナ州を東西に横切る大河だとエリカから前に聞いた。

　そして、もうひとつの名前にも聞き覚えがあった。

「ピサって『ピサの斜しや塔とう』で有名な街だよな」

「ええ。あそこにはガリレオ・ガリレイも学んだピサ大学もあるし、空港だってあるわ。そこから車を三〇分も飛ばせばリヴォルノ——リグリア海に面した港街よ」

「空港に港かあ」

　つまり、空と海の玄関口である。

　食堂のテーブルでエリカの推測を聞いて、護堂はうなった。

　ちなみにひよこ豆入りのサラダ、羊肉の煮込みソースをからめた円筒型パスタ、牛肉のステーキビステツカ、フィレンツェ風モツの煮込み、塩気のないトスカーナ州独特のパンなどを食べ進めながらの会話である。

　ふたりがあらかた食べ終え、食後のコーヒーを飲んでいた頃。

　エリカの携帯電話が短く着信音を発した。液晶画面を一いち瞥べつして、通信装置の麗うるわしき女主人はかすかに肩をすくめる。

「残念なお知らせよ。追跡チームは健闘の甲か斐いなく、尾行対象を見失ったみたい。サルバトーレ卿が呼んだ人たち、この手の仕事にずいぶんと慣れていたようね」

　メールで報告が届いたのだろう。エリカはため息をついた。

「卿が『最後の王』の影を追うつもりなら、行き先は限られてくるけど……。でも、手がかりもないまま特定することはむずかしいわ。どうしたものかしらね？」

　考えこむエリカを見て、護堂はふと思い出した。

　古代ガリアへ旅立つ直前に知った、ドニの意外な人間関係。あの男にはたしか、後ろ暗い仕事ばかりを頼む旧知の連中がいるのではなかったか――。

　今度は護堂が携帯電話を取り出した。

　時間旅行中はずっとご無ぶ沙さ汰たただった道具で、ひさしぶりに通話を試こころみる。

　コール五回目で国際電話はつながった。

『おひさしぶりですね、叔お父じ上うえ。アイーシャ夫人の抜け穴から帰還を遂とげたニュースは聞いておりますよ。ご無事で何よりです』

「まあ、いろいろあったけど、どうにかな」

　香港ホンコン陸りく家けの御おん曹ぞう司しにして若わか頭がしら、陸鷹よう化かが電話の相手だった。

　草くさ薙なぎ護堂にとっては〝義理の姉〟となる羅ら翠すい蓮れんより武術を授けられた――唯ゆい一いつの直じき弟で子しだった。そのため、鷹化は護堂を師し叔しゆく（師の弟、つまり叔父）として崇あがめている……。

「おまえの方はどうだ？　元気にやってたか？」

『ええ。叔父上のおかげをもちまして、万事つつがなく過ごしておりますよ。今日はもう寝ね床どこに入って、ぐっすり寝るだけですしね』

「え？　そっちはまだ夜の一〇時くらいだろ？　ちょっと早くないか？」

　イタリアと日本の間には約八時間の時差がある。こちらの時計は午後の二時頃を示しているから、日本はまだ深夜とは言いがたい時

刻のはずだった。護堂は首をかしげた。

　一四歳の少年が就寝するには、いささか早すぎはしないだろうか？

『特に用事がないときは、さっさと寝ることにしてるんですよ。僕は毎朝、夜明け前に起きるのが日課なもので』

「結構……いや、ずいぶんと早起きなんだな」

『よく意外に思われますが、実はそうなんです』

　香港系ヤクザ組織をたばねる若頭。プロフィールのイメージだけで言えば、むしろ夜よ更ふかし・夜遊びの専門家であるように思える。さらに言えば、彼のねぐらは新しん宿じゆく歌か舞ぶ伎き町ちよう。日本有数の繁華街なのだ。

　しかし、陸鷹化はしんみりとした口調で語った。

『羅翠蓮の武術には〝昇る朝日を拝おがみながら内ない功こうを修練する〟って練れん功こうがありまして。三歳の頃から毎朝毎朝こいつを強要され——じゃない、修練してきた結果、いつのまにか八〇歳の御老人並みに早起きする習慣が身についたんですよ』

「あー……それも姐ねえさんのせいなんだな」

『最も清浄な陽ようの気を取り込んで、内功の充実を図る行ぎようなんですけどね』

　またしても過酷な幼児期を想起させる告白だった。

　内功。日本でいう『気功』の意味だと、今の護堂は知っている。

　羅翠蓮のもとで幼い頃から修行してきた陸鷹化は、女嫌い・美び貌ぼうの女戦士への嗜し虐ぎやく心しん・一四歳にしてプロ顔負けの調理技術といった負ふの財産をいくつも抱かかえこんでいた……。

「ところで、うちの静しず花かと会ったんだって？」

『もうお耳に入りましたか。ええ、何日か前、新宿でばったりと』

「……あいつ、何か迷惑をかけなかったか？」

　傲ごう岸がん不ふ遜そんな甥おいの声にやや苛いら立だちの響きがまざったことに、護堂は気づいた。念のため訊たずねてみたら、かすかなため息と共に鷹化は言った。

『取り立てて面倒なことは何も。ただ、まあ、やっぱり叔父上の妹をやってるだけの器うつわはあるなと痛感させられましたがね』

「なんていうか、悪いな……」

『いや、かまいませんよ。本当に面倒事は何もなかったので。それに』

「それに？」

『次に会ったときは必ず逃げおおせてやろうって、ちょっと気合いも入りましたしね』

「そうだな。あいつが何か言ってきそうな雰囲気になったら、遠慮なく逃げてくれ。兄の俺もそいつが賢いと思う」

『了解です。それはそうと叔父上、もしかして僕に何かご用命でも？』

　さすがは鷹化だった。本題がほかにあるとすでに見抜いていたようだ。

「実はイタリアでちょっと厄やつ介かいなことが起きているんだ」

　護堂はサルバトーレ・ドニの不穏な動きを手短に語り、最後に付け加えた。

「ほら。前におまえ、言ってただろ？　こっちの中華街にはドニのバカに手を貸す連中がいるって。今回もその人たちが一枚嚙かんでる気がしてさ」

　古代ガリアに旅立つ直前、鷹化から聞いた話であった。

『たしかにありそうな話です。では、僕の方でそちらから情報を引き出しましょう』

「いいや。連絡先を教えてくれるだけでいい。その辺はこっちでやるよ」

　護堂の返答を聞いて、鷹化は人の悪い笑い声をあげた。

『ははっ。たしかにそっちの方が手っ取り早い。委い細さい、承知しました』

　そのまま電話は切れて、数分が経過。

　護堂の携帯電話にメールが届いた。送り主はもちろん陸鷹化。住所・電話番号などが表示された液晶画面をエリカに見せる。

　紅き悪魔デイアボロ・ロツソとも呼ばれる美少女は、異い名みようにふさわしい意地悪な笑みをこぼした。

「あとはわたしの出番というわけね。ふふっ、まかせて。草薙護堂の威い名めいとエリカ・ブランデッリの弁べん舌ぜつがあれば、一〇分で済ませられるわよ」

　実際には八分で事足りた。古都ローマの中華街を本拠地とする《王おう商しよう会かい》なる怪あやしげなグループに連絡を取ったエリカは、日本のカンピオーネの代理人だと名乗り、商会の代表から必要な情報をすみやかに引き出した。

　護堂と《赤銅黒十字》の名前を出して脅迫しつつ、甘い言葉で懐かい柔じゆうも図る。

いつもどおり、みごとな交渉人ぶりであった。

「卿の行き先の目星が付いたところで、ちょっと仕掛けてみようかしら？」

「仕掛け？」

「ええ。サルバトーレ卿に追いつくためのちょっとした悪だくみ」

食堂のテーブルに載のせていた、護堂の携帯電話。

これを指さしながら、エリカが愉たのしげな口調で持ちかけてきた。

「ねえ護堂。もうひとり、連絡を取って欲しい人物がいるのだけど」

そして数時間後。陽ひはほとんど沈み、夜がはじまりかけた頃。

護堂とエリカの現在位置は、イタリア中部のトスカーナ州から一変していた。

ピサのガリレオ・ガリレイ空港より一時間ほど南西に飛び、地ち中ちゆう海かいを渡ってサルデーニャ島――イタリアで最も西に位置する自治州へ到着していたのである。

島といっても、面積では日本の四国を若じやつ干かん上まわる。

護堂だけでなくエリカにとっても、全てのはじまりとなった場所だ。

ふたりはこの島の州都カリアリの空港を出ると、待っていた案内人（かっちりした黒いスーツを着ているくせに、あきらかに『堅かた気ぎ』ではない強こわ面もての白人男性）に連れられて、白いＢＭＷに乗りこんだ。

向かった先は、カリアリ市内の高級ホテルだった。

そして、ホテル内のレストランで歓談する男ふたりの席までやってきたのである。

　どちらも護堂の知り合いだった。

　ひとりは軽薄そうな金髪のハンサム、サルバトーレ・ドニその人。

　もうひとりは太った老人だ。仕立てのよい高級スーツを伊だ達てに着こなし、太い葉巻をすぱすぱ吹かし、威厳とヤクザくささの双方を併あわせ持つ——。

　シチリア島を本拠とするシチリアンマフィアのボスが表の顔。

　裏の顔は魔術結社《パノルモス》の総そう帥すい、ワルテル・ザンパリーニであった。

「おお、草薙護堂！　サルバトーレ卿と共にお待ちしておりましたぞ！」

「まったく……君も悪い男だなあ、護堂」

　ザンパリーニ老人は目を輝かせて護堂を迎え、ドニは肩をすくめてみせた。

「こちらのお年寄りに命じて、僕の仲間を空港で拘束させてさ。『俺が追いつくまで待ってろ』なんて伝言させるだなんて」

「携帯電話を置いたまま出かけた、おまえが悪い」

　じろりとドニをにらんでから、護堂は付け加えた。

「まあ、持ったままでもどうせ電源切りっぱなしで音信不通になったんだろうけど」

「ははははは、いいじゃないか。一ひと月つきや二ふた月つきくらい連絡が途絶えたって、アンドレアが上う手まくやってくれるはずだし」

「そのアンドレアさんから逃げてきた男が開き直るなっ」

　ここでウェイターが席まで来て、エリカのために椅い子すをひいてくれた。

　金髪のイタリア人少女はすっと自然に腰かける。ドニとザンパ

リーニだけでなく、あと二名分の椅子がすでに用意されていたのだ。

　残った最後の椅子に護堂もすわり、晩ばん餐さんの準備はととのった。

　ちなみに、エリカは衣装を改めている。丈たけの短い紅あか色のワンピースの上に黒いレースのカーディガン、やはり黒のストッキングという装よそおいだ。

「ザンパリーニのおじさま。お手間を取らせて、申し訳ございません」

「かまわんよ、ブランデッリ。ひさしぶりに草薙護堂とお目にかかれる好機、私の方でも無駄にはしたくなかった。幸いサルバトーレ卿にもご理解を賜たまわり、この老おいぼれとの世間話におつきあいいただけたしな」

　ふてぶてしくザンパリーニ老人は笑い、葉巻を吹かした。

　剣のカンピオーネは《王商会》の手引きでサルデーニャ島をめざしている。

　それを知ったエリカの提案で、護堂はザンパリーニと連絡を取った。『カリアリの空港に到着したドニ一行をつかまえて、足止めして欲しい。今晩、サルバトーレ・ドニとカンピオーネ同士で話がしたい』と要請するために。

　必要なら、多少手荒な手段を使ってもかまわないからと付け加えて。

　ザンパリーニはふたつ返事で承しよう諾だくしてくれた。

　シチリアンマフィアのボスにして大富豪の老人は自家用セスナを飛ばして、わずか一時間でシチリア島からサルデーニャ島へ急行。ドニ一行よりも先に空港へ到着し、みごと護堂の要請どおりに事を運んでくれたのである。

　もちろん、サルデーニャ島の魔術師に同じ要請をすることもできた。

　しかし、イタリアの魔王であるドニになかばたてつき、この痴し

れ者に『すこしの間、その辺でお話でも』と迫ることのできる胆たん力りよくとキャラクターの持ち主はいなかった。

　だから、エリカはシチリア島のザンパリーニを指名したのだ。

　サルデーニャ島に比較的近い場所に住む、最も豪ごう放ほう磊らい落らくな重要人物を。

　かつて神王メルカルトとの戦いにも加勢した老人は、護堂の後ろ楯だてがあるとはいえ、みごと期待に応こたえてくれた——。

「ま、護堂に行き先がばれたのなら、遅かれ早かれ追っ手が来るだろうし」

　ドニはサルデーニャ産の赤ワインをがぶっと飲み干して、へらへらと笑った。

「君が追いつくのを待ってもいいかなって思ったんだ」

「この島に来たってことは、やっぱりあの人——ルクレチアさんに会うつもりか？」

　護堂は懐なつかしい名前を口にした。

　ルクレチア・ゾラ。またの名をサルデーニャの魔女。かつて神しん祖そグィネヴィアと共に『最後の王』の正体を追いかけた研究者である。

「ご名答。前にどこかで聞いたよ。古こ今こん東とう西ざいの軍神たちと『最後の王』について、イタリア界かい隈わいでいちばんくわしいのは彼女だって」

　裏表のないバカ者のくせに、ときどき要所要所で抜け目なさを発揮する。

　ドニはウインクしながら、おなじみの特技を披ひ露ろうした。

「ガリアで会った軍神、今も地球のどこかで眠っているんだろう？　ちょっと甦よみがえらせてみるのも面白そうだし、ヒントだけでも聞き出せないかなーと思ってね」

「あんな物騒な神様、ちょっとだけでも甦らせるな！」

　バカげた発言に怒鳴り散らしてから、護堂はつぶやいた。

「大体、イギリスのガスコインが何年も調査してるのに、正体もわかっていないんだぞ。あんた程度の手に負えるわけないだろ」

「やってみなくちゃわからないさ。……ところで、君は飲まないのかい？」

「日本じゃ二〇歳未満は飲酒禁止なんだよ」

「でも、エリカ・ブランデッリは飲んでるじゃないか」

「お、おまえ、いつのまに……」

「わたしはもう一六歳。イタリアでは飲酒可能な年齢ですもの。ねえ護堂、郷ごうに入いっては郷に従うのも礼儀じゃなくって？」

「では、御おん身みの分も用意させましょう。——おい。ここからここまでを全部だ」

　護堂以外の三人は、みんな酒杯を片手に歓談している。

　さらにザンパリーニはソムリエを呼びつけ、ワインリスト先頭ページの一列——高級ワインばかりを記した列を指して、『全部持ってこい』と無茶な注文までしてみせる。

　すかさず護堂は叫んだ。

「そんなに飲みきれるわけないでしょう!?　いや、そもそも一滴だって飲むつもりはありませんけど！」

「そう堅いことをおっしゃらずに。今夜は心ゆくまで痛つう飲いんいたしましょう！」

　カンピオーネの拒絶を平然と受けながし、豪快かつヤクザくさく笑ってみせる。

　やはり、必要以上に肝きもの据すわった老人なのだ。上じょう機き嫌げんのザンパリーニはくいっと赤ワインのグラスを空あけた。

「おお、そうだ。草薙護堂、私には二歳になる孫娘がおりましてな」

「お孫さんが？　じゃあ、ものすごく可か愛わいいんでしょうね」

　無論、ザンパリーニ老人の孫娘と会ったことはない。

　しかし、祖父にとっては地上の誰よりも可愛い存在であるはず。一般的な先入観にまかせて、護堂は無難に話を合わせたのだが。

「ふふ。さすがに勘かんが鋭い。ええ。御身のおっしゃるとおり、我が孫ながら絶世の美女と言っても過か言ごんではない娘です。……で、どうでしょう？」

「どういう意味です？」

「ですから、御身の愛人にいかがかと。草薙護堂が身のまわりに幾人もの美び姫きを侍はべらせ、壮そう麗れいな後こう宮きゅうを築いている旨むね、私も聞きおよんでおりますぞ。ふふふ、さすがはこのザンパリーニが見こんだ若きカンピオーネ。ご立派な魔王ぶりでいらっしゃる」

「ち、ちょっと待ってくださいよ！　それは誤解です！」

「謙けん遜そんされますな。孫は祖父の私が見ても御身にふさわしい美女。是ぜ非ひご一考を！」

「そもそも二歳児の赤ん坊じゃ美女とか美男はわかりませんって！」

　ひさしぶりに再会したシチリア島の老人も交まじえて、夜はにぎやかに更けていった。

5

　しつこく勧すすめられたものの、護ご堂どうはどうにか一滴のアルコールも口にしないまま食事を終えることができた。

　エリカの方は数杯のワインを飲み干したが、まったく酔った様子はなかった。

大量の酒さか壜びんを豪快に開けていったのはもっぱらドニとザンパリーニ、ふたりの成人男性である。このようにして、レストランでの宴席が終了したあと。

「ルクレチアさんに会うだけなら、ドニのやつを放置しても問題ないかもな」

護堂はぼそりとつぶやいた。今はホテルの個室にいる。

レストランがあるホテルのなかに、ザンパリーニが宿泊用の部屋も取ってくれたのだ。護堂はその配慮をありがたく受けることにした。

明日、ドニの監視も兼ねて、ルクレチアの屋敷を訪ねる予定だった。

「今さらルクレチアさんにいろいろ聞きにいくぐらいなら、『最後の王』については本当に何も知らないんだろうし。放置しても大丈夫そうだ」

今日の昼間、サルバトーレ・ドニが姿を消したとき。

護堂たちは危き惧ぐした。もしかして、剣のカンピオーネは古代ガリアで『最後の王』にまつわる重要情報をひそかに得ていたのではないかと。その知識を活用して、魔王殺しの英雄を現代に甦よみがえらせるつもりではないか、と。

しかし、隣にいたエリカは思し慮りよ深げに眉まゆをひそめた。

「決めつけは危険かもしれないわよ。ほら、あなたたちってたまにとんでもない揉もめ事の根を掘りおこす人種じゃない？　サルバトーレ卿きようがビギナーズラックで『最後の王』の重要情報をいきなり手に入れる可能性、皆無とは思えないのよね……」

「まあな。そこであいつと俺をひとくくりにして欲しくないけど」

さりげなく抗議してから、護堂は言った。

「とりあえず、もうしばらくはドニの見張りをしておくか。俺もひさしぶりにルクレチアさんと会いたいし」

「さっき電話をしたら、すごくイヤそうだったわ。来て欲しくな

いって」

「どうしてだよ⁉」

「当たり前じゃない。カンピオーネふたりに自宅まで来られるなんて、災難もいいところですもの。かといって居い留る守すを使うわけにもいかないし」

　エリカにくすくす笑われて、護堂は憮ぶ然ぜんとした。

　自分の身近にいる人々はいつも草くさ薙なぎ護堂を『典型的カンピオーネのひとり』として吹ふい聴ちょうし、災さい厄やくの申し子のようにあつかう。まあ、たしかにそう受け取られても仕方のない部分は若じゃっ干かんあるのだが、せめてドニと同じくくりにするな——。

　そう訴えたい護堂だった。しかし、その主張よりも先につっこむべき事こと柄がらがある。

「なあエリカ……おまえ、ちょっとくつろぎすぎじゃないか？」

「あら、どうして？」

　さっきシャワールームから出てきたエリカは、バスローブ姿だった。

　そう。なぜか護堂の部屋でシャワーを浴びたあと、濡ぬれた髪を乾かして、こんな無防備な格好で室内をうろついていたのである。

　白いバスローブ一枚だけなので、エリカの豪ごう奢しゃな体のラインがよくわかる。

　胸元の谷間まで視認できてしまうため、あわてて目をそらしたものだ。

　とっとと自分の部屋に帰ればよいものを……変な気分になるじゃないかと、恨うらめしく思う護堂だった。

　エリカはこちらの想おもいも知らずにベッドのひとつに腰かけ、足まで組む。

　すらりとした白い美脚までがあらわになる。

　胸がどきどきするのを自覚して、護堂はふたたび目を背そむけた。

　が、ここである事実に気づいた。エリカが腰をおろすのはベッドのひとつ。そして護堂も今、もうひとつあるベッドに腰かけている……。

　そう、この部屋にはベッドが計二個もあるのだ。

　ここはもしや、二名で宿泊するためのツインルーム……？

「……エリカ。そろそろ自分の部屋に帰ったら——」

「あのね護堂。あなたもうすうす気づいているのでしょう？　ここはわたしが泊まるための部屋でもあるって」

「つまり、俺たちは同じ部屋に泊まると……？」

「今さらすぎる確認ね。ここを手配したのはザンパリーニよ。彼の屋敷に泊まったときも、わたしたちはひとつの部屋に泊まったじゃない」

「…………」

「彼はもともとモナコの王族も宿泊したスイートルームを予約するつもりだったの。でも、きっと護堂がいやがると思って、ここに変えてもらったのよ」

「まあ、高校生には分ぶん不ふ相そう応おうもいいところだしな……」

　今いる部屋はそれなりに広いが、標準的なツインルームの範囲内だった。

　草薙護堂の考え方をさすがにエリカはよくわかっている。

　彼女との縁ができてから、まだ一年も経たってない。しかし、数々の修しゅ羅ら場ばをいっしょにくぐり抜け、互いの気性を知り尽くした仲間である。そして、特別な相棒だった。

　とはいえ、女子と同じ部屋で一夜を過ごすというのは——いうのは——

　はたと護堂は気づいた。そういえば、こういうことがもう何回もあったなと。

「ねえ護堂」

　さらに、いつのまにかエリカが目の前にいた。

　向こうのベッドから降りてきて、護堂の顔をのぞき込んでいる。

「あなたってば、わたし以外にも何人かの女の子とこういうことを繰りかえし経験しているはずよね？　そろそろ慣れてきてもいい頃じゃないかしら？」

「…………」

「何か反論は？」

「ない……な」

「よろしい。それでこそ草薙護堂。このエリカ・ブランデッリをもてあそぶだけでは飽き足らず、次々と女の子たちを毒どく牙がにかける魔王陛へい下かだわ」

　エリカがすぐ隣に腰かけた。ふたりならんでベッドにすわる形となった。

「護堂には何度も驚かされてきたけど……いちばんはやっぱりこれよね。女の子に不慣れな朴ぼく念ねん仁じんだったくせに、いつのまにか祐ゆ理りやリリィ、恵え那なさんまで手中に収めて」

　はあとため息をついて、エリカは肩をすくめた。

「ここで『わたしの気持ちも知らないで——』とか言ってもいいけど、それはエリカ・ブランデッリの流儀に反するわ。今さらすぎるし、みっともないし。わたし、ほんのすこしだけ見み栄えっ張ぱりな方だけど、こういうときは損な性格かもしれないわね」

　もちろん、エリカをはじめとする女性陣に刃物で刺されたとしても、草薙護堂には文句を言う資格はない。粛しゆく々しゆくと拝はい聴ちようする以外の選択肢はなかった。

　いや、もしかしたら土下座でもした方がよいのだろうか……？

思わず考えこんだ護堂の頬ほおに、ちゅっとふれるものがあった。エリカが軽く、じゃれつくように接せつ吻ぷんしたのだ。

「この話はここでおしまいにしてあげる。でも、その代わりに約束して。いいかげん、形だけでもわたし——わたしたちの気持ちから逃げるようなことを言わないって」

「エリカ……」

「それだけ約束してくれたら、たいていの狼ろう藉ぜきには目をつぶってあげる。どう？」

諦てい念ねんと冷静さという形で情愛を示してくれた少女に、護堂は答えなかった。

代わりに顔を寄せ、エリカの唇くちびるをふさいだ。エリカは従順に受け入れてくれた。今まで数え切れないほど激しいキスを繰りかえしてきたふたりだが、今回は唇をむさぼり合うことも舌を搦からめることもなかった。

ただ互いの唇を合わせるだけの、静かな接せつ吻ぷん。

だが、いつも以上に感情がこもっていたかもしれない。護堂もエリカも。

「わたし、このままここにいてもいい……？」

「あ、ああ」

いつになく可か愛わいらしくエリカが問えば、護堂もややぎこちなくうなずく。

彼女の上うわ目め遣づかいなど、もしかしたら初めて見たかもしれない。どきどきする護堂をよそに、エリカはベッドサイドに手をのばした。

細長い板状の品を取りあげて、包装紙と銀紙をはがす。

「護堂にプレゼントがあるの。口を開けて」

「……ああ」

　すでに相手の意図はわかっていたので、おとなしくしたがう。

　エリカは板状の品を口でくわえ、そのままパキッと割ってしまう。彼女の唇には〝板〟の三分の一ほどが残された。そして、護堂が知るかぎり誰よりも華麗な美少女はふたたび顔を近づけて――

　キスすることで護堂の口に板状の品を差しこんだ。

　口のなかにチョコレートの甘みが広がる。エリカは板チョコを口移しで食べさせてくれたのだ。しかも、ただキスで砂糖菓子を運ぶだけではない。

　エリカはチョコレートといっしょに舌を差し入れてきた。

　ねっとりとした丁てい寧ねいな舌使いで、護堂の口内にあるチョコを探し当てる。この甘すぎる菓子といっしょに護堂の舌まで丹念に舐なめて、じっくりと味わう。

　護堂の方もチョコと共にエリカの舌を味わった。

　ふたりはそのままキスを交わしながら、いっしょに食べはじめた。

　舌を使ってチョコを押しやり、移動させるのだ。護堂の口からエリカの口へ。エリカの口から護堂の口へ。ふたりが舌と唾だ液えきを絡からませるたびにチョコレートはすこしずつ溶けて、ふたりの口のなかを汚していく。

　護堂はエリカのなかの甘味をたっぷりと味わい、舐め取っていった。

　エリカも同じように舌と唇を蠢うごめかせて、護堂のなかの甘味を舐め取っていった。

　もちろん唇のまわりもチョコで汚れてしまったが、ふたりはそれさえも共に味わい、きれいに拭ぬぐい去ってみせた。

　結局、たっぷり三分ほどかけて、チョコのかけらは消滅した。

「ねえ護堂……よかったら、もっと食べる……？」

　間近でエリカのささやき声を聞き、護堂の心は大いに昂たかぶっ

た。

「ふふふふ。日本ではこの時期にチョコレートを男の子にあげるとは知っていたけど、特に渡すつもりはなかったの。そういうのにあまり興味はなかったし。でも、ひかりが上う手まくやってのけたと聞いて、心変わりしたわ」

　いつも才気煥かん発ぱつな美少女が目の前で幸せそうに微笑んでいる。

　護堂に心を許しきっている証あかしだ。エリカを愛いとしく思う気持ちがさらに熱くなった。

「ひかりは可愛い後輩だけど、出し抜かれるばかりじゃエリカ・ブランデッリの名折れだものね。どう、護堂……？　これなら、あの子にも勝てる気がするのだけど」

　おそらく、その辺の売店で買ったとおぼしき平凡な板チョコ一枚。

　しかし、脳天がしびれるような思いで護堂はこれを味わった。エリカも同じ思いだったはずだ。ふたりは互いの目をのぞき込み、今度はチョコレート抜きのキスを交わした。

「エリカ……」

「まだ食べさせてあげてもいいのよ？　それとも、お菓子の次はこのままわたしと愛し合ってみる？　あなたさえよければ、わたし──」

「エリカ！」

　そこまで言われては、さすがに抑えが効かなくなる。

　ふたりはもともとベッドの上にすわっていたのだ。護堂は激情にまかせてエリカの体を押し倒した。バスローブがはだけて、胸の谷間がさらけ出される。



「護堂……！」

　押し倒されたエリカはそのまま護堂の首に両腕をからめ、しがみついてきた。

　彼女の体のぬくもりを感じるだけではない。量感と弾力を併あわせ持つ乳ち房ぶさの感触までが護堂の体に密着し、さらなる昂ぶりを呼び起こす。

　護堂はすぐさま彼女の唇を奪った。エリカも激しく護堂のキスを受け入れた。

　結果、ふたりは抱き合った体勢のまま何度も狂おしく唇を重ね、互いの口を吸い、舌と舌による愛あい撫ぶを重ねる。耳たぶを軽く噛かみ、首筋に吸い付きさえした。

　そうして、たっぷり五、六分は行為を繰りかえしたところで——

　ようやく護堂は身を起こした。

　エリカから体を離し、抱ほう擁ようを中断したのである。我われに返ったというより、なんとか踏みとどまったという心境だった。本当なら、エリカと抱き合ったまま行くところまで行きつきたい気持ちだったのだが。

「ここでやめるの、護堂？」

「い、今の俺にはまだ早い気がするからな……」

　かつて清せい秋しゅう院いん恵那の申し出にも、同じ理由で謝絶した。

　本当に草薙護堂は果か報ほう者ものだと思うし、彼女たちはたまらなく愛おしい。だが、今の段階で受け入れてしまうと、自分自身の牙きばが鈍にぶってしまうような——。

　その不安ゆえのわがままであり、身勝手だった。

「もう。わたしの方はいつでもいいのに……」

　ある意味で礼を失する護堂の行動にもかかわらず、エリカは微笑

んでいた。

　さっきも見せた、どこか幸せそうな笑顔だ。護堂の不思議そうな視線に気づいて、彼女はうっとりとした口調で言った。

「もちろん、護堂には最後まで燃えあがって欲しかったけど。でも、今晩はこれで許してあげるわ。あなたもちゃんとわたしを欲ほつしているとわかって、うれしかったから」

「エリカ……」

「そうだわ。罰として、今夜はいっしょのベッドで眠って頂ちよう戴だいね」

　幸せそうな微笑を保ったまま言われて、護堂は「!?」と愕がく然ぜんとした。こちらの狼ろう狽ばいを見てエリカはくすっと笑い、さらにいたずらっぽく告げる。

「だって、わたしのわがままを聞いてくれないのだもの。あなたと深い仲になりたい、身も心も護堂のものになりたいって本気で願っているのに」

「…………」

「これくらいの埋め合わせはしてくれなくちゃ、納得いかないわ」

「お、おまえといっしょに寝たりしたら、俺の方が我慢できなくなるかもしれないだろ！」

「そのときは遠慮なく、わたしの耳に愛をささやいて頂戴。わたし、すぐにあなたを受け入れてあげる。ふふっ、今夜は同じ夢を見られるといいわね、護堂！」

　いつになく上じよう機き嫌げんなエリカからの宣告。

　しかし、この通達まで拒否することはさすがにできず——。愕然としつつも、それ以上の反論をできない護堂だった。

「なるほど。サルバトーレ卿きようもまた『最後の王』の謎なぞを探求されるおつもりか」

　ルクレチア・ゾラは例によって、超然たる口調でつぶやいた。

　サルデーニャ島内陸部の街、オリエーナ。護ご堂どうたちが昨日訪れたポッピと大差ない、規模の小さな自治体だった。

　ここの街はずれに建つ小さな家こそがサルデーニャの魔女の住まい。

　護堂、エリカ、そしてドニは居間のソファでくつろぐルクレチアと向き合っていた。

　ちなみに昨日はカリアリで一泊したが、あの都市からオリエーナの街まではずいぶんと距離がある。車での移動もかなりきつい。そこでザンパリーニはヘリ（！）をチャーターして、護堂たちをここまで飛ばしてくれたのである。

　尚なお、当の老人は用事があると言って、今朝早くにシチリア島へ帰還した……。

「かの英雄王の足跡を追うカンピオーネ殿がアレク王子に続いて現れるとは、この世界にとってはなんとも難なん儀ぎな話といえますな。まあ、卿が『最後の王』についてあらゆる知識を授けよとおっしゃるのであれば、一介の魔女に拒こばむ権利などないわけですが……」

「あ、いやいや。そんなことは言わないよ」

　皮肉っぽい物言いのルクレチアへ、ドニは手をひらひらと振った。

「謎とかはどうでもいいからさ。僕は手っとり早く『最後の王』を復活させる方法だけ教えて欲しいんだ。ダメかな？」

「「…………」」

「ダメというより、私も知らぬ最大の謎ゆえ。御要望にはお応こたえできかねますな」

　護堂を『少年』呼ばわりするルクレチアだが、ドニには敬語を使う。しかし今、彼女の気けだるげな視線には愚ぐ王おうへの遣い憾かんの意がはっきりと表れていた。

　ちなみに、横で聞いていた護堂とエリカは沈黙を貫つらぬくだけにとどめた。

　しゃしゃり出るのをひかえたというより、つっこむのも面倒だったのである。

「そうかあ。じゃ、『最後の王』についてまとめた資料とか入門本みたいなのがあったら、うちの執しつ事じのところに送っといてよ」

「……承知いたしました。取りはからいましょう」

「いやあ、ありがとう。助かるよ！」

「滅めつ相そうもない。御役に立てて何よりです」

「こ、この大バカ野郎……」

　能天気なドニの笑顔を護堂はにらみつけた。

「そんな電話一本で済むような話をするだけなら、ご大層に行方ゆくえをくらましたりするな！　どれだけの人間がおまえに振りまわされたと思ってるんだ!?」

「おいおい護堂。頼み事をするのに電話越しってのも礼儀に反するだろう？」

「くっ。こんなときだけ正論を言いやがって……」

「それに首しゆ尾びよく復活の方法とか教われたら、そのまま旅立つこともできたしね。うるさいアンドレアは抜きで♪」

　ウインクするドニの茶ちや目めっ気けがなんとも小憎らしい。

　愚行の裏に意外な抜け目なさが隠れているのも、またいつもどおりか。ともあれ、これでルクレチア邸訪問の目的は果たされてしまった。

「じゃあ、僕はこの辺で。また何かあったら、よろしく！」

　朗ほがらかに言い置いて、ドニは居間のドアへと歩いていく。

　二〇分前に来たばかりにもかかわらず、もう帰るつもりなのだ。性格・行動のどちらも軽薄で軽妙な剣の王らしい振る舞いだった。

　護堂はぺこりとルクレチアに頭を下げてから、ドニのあとを追った。

　エリカもそれに倣ならう。彼女はこの屋敷に入った直後から、一言も口を利きいていない。

　カンピオーネふたりの前なので、騎士としての領分を守ったのだろう。しかし、エリカはずっと控えめだったわけではない。ここに来る前、紅き悪魔デイアボロ・ロツソはすでに仕込みを終えていた。

　エリカがちらっと目配せをしてきたので、護堂はかすかにうなずいた。

　廊ろう下かへ出たあと、ドニは先頭に立って玄関へ向かう。

　エリカも続く。しかし、護堂はひとり逆方向へ——屋敷の奥へ向かった。

　トイレにでも立ちよるという足取りでふらふら。だが、ドニとエリカが外へ出たところで居間にもどる。ルクレチアがにやにや笑っていた。

「なつかしいな、少年」

「何がです？」

「覚えているか？　この家に初めて来たときも、君はエリカ嬢と共に私の前を去ったあと、ひとりで舞いもどってきた。私と一対一で話をするために」

「……そういえば、そうでしたね」

　ルクレチアに指摘されて、護堂も思い出した。

　あのときはエリカ・ブランデッリのいないところで話をする必要があったのだ。しかし、今回はエリカの手配でルクレチアと向き合っている。

　まさか、たった一年未満でここまで境遇の変化が起きるとは。

　護堂は苦笑した。初めてイタリアに来たときは想像だにしなかったことである。

　また、エリカとこういう関係になるとも――。

　今朝の一幕を護堂は思い出した。昨夜はエリカと同じベッドで就しゆう寝しんする羽目となり、もちろん悶もん々もんとしてしまい、眠れぬ夜を過ごすことになったわけだが。

　それでも、いつのまにか睡魔に襲われていた。

　そして、目覚めた直後。

　護堂は同じ寝ね床どこのなかにエリカの寝顔を見み出いだしたのである。

　誰よりも華麗な美少女は、その端整な顔立ちゆえに眠れる天使さながらの可か憐れんさだった。しばらく見み惚とれてしまうほどに。しかも、護堂が動く気配でエリカも目を覚ました。寝ぼけ眼まなこをこすりながら、それでも彼女はあどけなく微ほほ笑えみかけてきた……。

　いつもとまったくちがうエリカの表情に、朝からどきどきしたものだ。

「こんな形で君とエリカ嬢をふたたび迎える日が来るとはな。私もそれなりに長く生きてきたつもりだが、かつての友人の孫がカンピオーネになるとは夢にも思わなかったぞ」

　護堂を見つめるルクレチアのまなざし。

　それは珍しく柔にゆう和わで、祖母のようでもあり、また姉のようでもあった。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。エリカ嬢から電話で聞いた。君は『最後の王』にまつわる手がかりをひとつ得たらしいな？」

「ええ、まあ。とある女神様の遺ゆい言ごんなんですけど」

　今年のはじめ、マレーシアの南洋で対決した女神キルケー。

　彼女は死ぬ間ま際ぎわに言いのこしたのだ。

『ああ、最さい期ごに薄情なアレクサンドル殿への意い趣しゅ返がえしをいたしましょう。あの方が探していらした英雄殿。その真ま名なをお求めならば、アルゴー号の系けい譜ふにこそ着ちゃく目もくし、探索すべきなのですわ。草くさ薙なぎさまにだけ、ないしょで教えて差しあげます！』

　と、どんな美少女よりも可憐な笑顔で。

　彼女はアレクサンドル・ガスコインが求める謎の答えを承知していながら、あの男といっしょにいる間中、ずっと口をつぐんでいたのである。

　そして、このメッセージをついにルクレチアへ伝えることができた。

　かつて『最後の王』の研究に人生を捧ささげていた女性へ。

「……アルゴー号か。コルキス王国の秘宝・金きん羊ようの毛皮を手に入れるため、英雄イアソンが建造させた船——その名こそがアルゴー号。数十名もの英雄がこの船に乗り込み、苦難を乗り越えながらコルキスをめざした……」

　ギリシア神話のエピソードをルクレチアはぶつぶつとつぶやいた。

「しかし、女神は『アルゴー号の系譜』と言った。ということは、アルゴー号そのものと考えるべきかどうか……。ん？」

「どうしたんですか？」

　不意に口ごもったルクレチアへ、護堂は問いかけた。

　しかし、サルデーニャの魔女は答えない。口を開いたのは数十秒後だった。茫ぼう洋ようとしたまなざしで沈黙をしばらく続けたあと、おもむろにつぶやいたのだ。

「むかしむかし、あるところに――」

　それは日本語のささやき声だった。今までずっとイタリア語で会話していたのだが、ルクレチアは唐突に日本語を使ったのである。

　護堂はハッとした。まさか、霊れい視しによる啓けい示じを得たのかと。

　万ま里り谷や祐ゆ理りほどの素養はないが、ルクレチア・ゾラもまた霊視力者なのだ。

「…………」

　護堂はじっと魔女の美び貌ぼうを見つめ、続きを待った。しかし、ルクレチアは急にいつもの気だるげな表情を取りもどし、ふぅと息を吐いた。

「残念ながら、ここまでだな。しかし、初めてだぞ。『最後の王』にまつわる事こと柄がらで霊視を得ることができたのは……」

　それだけ『アルゴー号』という単語は、重要な鍵かぎなのか？

　古代ガリアで出会った蒼あおき髪の英雄――彼の真名を解き明かすための。

　そして、ルクレチアがささやいた言葉。昔々あるところに。A long time ago。これには一体、どういう意味が秘められているのか？

　見当もつかない。頭を悩ませている護堂へ、ルクレチアは言った。

「少年。今、なんとなく感じたことだが……もし『最後の王』と対決するときが来たら、ひとつだけ君に有利な要素があるかもしれない」

「何ですか、それは？」

「剣の言こと霊だま。ウルスラグナ最後の化け身しん『戦士』が操る武器だ」

　これも霊視の託たく宣せんなのだろう。ルクレチアはおごそかに

告げた。

「この世の最後に顕あらわれる王はかたくなに名を隠しつづける神。もし彼の真名と来歴を解き明かし、その知識を刃やいばに変えることができれば……剣の言霊は常よりも遥はるかに強大な威力をそなえるかもしれん」

「俺の……ウルスラグナの剣が？」

「ああ。名を隠す者にとっては、その名を言い当てることこそが最も痛烈な一撃となる。もちろん、只ただそれだけで勝てるほど単純な戦いにはならないだろうがな」

　そして、護堂もルクレチアの館やかたを辞じした。

　外で連れのふたりと合流する。しかし、護堂たちをここまで運んでくれたヘリはもうカリアリ方面に帰還している。

「帰りの足を調達しなくちゃいけないわね。わたし、《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の仲間と連絡を取って、誰かに車で来てもらうわ。あと、何か飲み物とか食べ物も買ってきましょう」

　護堂が合流するなり、エリカは携帯電話を片手に言った。

　ルクレチア邸は街のはずれの方にある。まわりには人家も店もない。小さなオリエーナの街の比較的にぎやかな方面をめざして、エリカは歩いていった。

　去り際に護堂へ目配せしたのは、ドニの監視を頼むという意味だろう。

　かくして、護堂とドニはふたりきりになった。

　頭上にはサルデーニャ島の青空が広がっている。今日は快晴だった。

　冬の風はそれなりに冷たいが、日差しのおかげで耐えがたいというほどではない。何より、このあたりに雪は積もっていないのだ。

　ルクレチアの家は雑ぞう木き林ばやしのすぐそばに建っている。

だが、この林をのぞけば、周囲はだだっぴろい野原であった。

春になれば、色とりどりの花々が咲きはじめるだろう。この野原のなかをドニがふらふらと散歩しはじめたので、護堂も仕方なく続いた。

「でも、探索ってのはなかなか上う手まくいかないもんだねえ」

「あんなのを探索とか言ったらガスコインが怒るぞ、たぶん」

ドニが口にした妄もう言げんを護堂は冷たくあしらった。

只の勘かんだが、切れ者のアレクサンドル・ガスコインはバカ者のサルバトーレ・ドニを嫌っているような気がする。そう、草薙護堂がこの男をバカ呼ばわりし、あの偏屈な貴公子とはウマが合わないように。

しかし——護堂は舌打ちしたい気持ちを堪こらえながら、ひそかに感心していた。

（こいつのやったことは結局、無駄じゃなかったんだよな……）

と。ドニに引きずられる形で今日、護堂はルクレチアを訪ねた。

結果、剣の王がビギナーズラックでまぐれ当たりをひくことはなかったが、護堂は女神キルケーの教えをサルデーニャの魔女に伝え、あの霊視が降りてきた——。

もしかしたら電話やメールで伝えても、ルクレチアは同じ啓示を得たかもしれない。

だが、得なかったかもしれない。

となると、愚おろかしくも思えたドニの行動が『最後の王』の謎に迫るヒントをひとつ導き出したことになる。ある意味で、これも〝エピメテウスの落とし子〟カンピオーネにふさわしいビギナーズラックかもしれない。

「あれ護堂？　何か僕に言いたいことでもあるのかい？」

「あるわけないだろ。変な言いがかりをつけるなよ」

「あ、そうそう。エリカ・ブランデッリもいないことだし、ちょっとふたりで逃げ出してみない？　わざわざサルデーニャまで来て収穫なしじゃ、面白くないだろ。僕らふたりと戦うにふさわしい神様を求めて、探索の旅にでも――」

「せっかく帰ってきたのに、ガリアにいたときと同じノリで揉め事を起こすな！」

「いやいや。それは順序が逆だよ。僕は現代でやってたとおりのノリで、あっちでも毎日暮らしていたんだから。君ならわかってくれるだろう？」

「そんなのどっちでもいい！」

「じゃあ、現代に帰ってきた記念に、僕と君の何戦目かを敢かん行こうするとか」

「誰がやるか。あんたとの勝負はもう十分だ。このまま一生、俺の勝ち逃げでいい」

「体調万全なサルバトーレ・ドニと戦わないままでいいって言うのかい？　ガリアでの決闘はアルティオに憑ひよう依いされたあとで、僕は結構くたびれていたんだよ」

「うるさいっ。勝負にそなえて体調をととのえるのも実力のうちだ！」

　魔王の威厳に欠ける会話を繰りひろげていたときだった。

　どちらともなしにふたりは口をつぐんだ。気配を――神殺したるカンピオーネのみが感じ取れる気配を同時に察知したからである。

　そして、ドニがにやっと笑った。

「今日の僕はツいているのかな？　どうやら、ここまで来た甲か斐いがありそうだ」

「この状況をラッキーに思えるあんたがうらやましいぞ、ちょっとだけ」

　ぼやいてから、護堂は風を感じた。

　こちらに向かって、冷たい冬風が吹いてきたのだ。この風が魔王ふたりの眼前でつむじを巻いて旋せん風ぷうとなり、さらに人型へと化け身しんしても驚きはしなかった。

　すでに『まつろわぬ神』の気配を察して、心身共に臨戦態勢となっていたからだ。

　だが、顕れた風神の姿を見て、護堂はハッとした。さすがのドニも驚きよう愕がくにまかせて、短く口笛を吹くほどだった。

　長身である。全身に白い布をぐるぐると巻きつけ、さらに革かわ鎧よろいをまとう。

　そして、顔を覆おおいかくす赤き仮面——。両目の部分だけ黒く塗りこまれていた。

「ガリアで会った風の神様か！」

「へえ。これって『一五〇〇年ぶり！』みたいに挨あい拶さつしてもいいのかねえ」

　護堂とドニの感覚では、彼と戦ったのはわずか二か月前だ。

　しかし、仮面の風神が五世紀ガリアから生き続けていたのであれば、たしかに一五〇〇年の時をへだてての再会となる。

　意外すぎる邂かい逅こうに護堂は唖あ然ぜんとした。

　だが、それを越える驚きよう愕がくが待ち受けていた。風神の背後から、ひとりの少女がすっと現れたのである。年齢は一二、三歳前後か。

　月より落ちてきた滴しずくを溶かしたかのような、みごとな銀髪だった。

　その漆しつ黒こくの瞳ひとみは闇やみよりもさらに黒く、純黒の宝玉さながらに輝いていた。

　身にまとうのは簡素なギリシア風の白衣。華きや奢しやな右手が持つ杖つえの先端は、『双頭の蛇へび』をかたどっている。

　しかし、何より護堂の目を惹ひいたのは——

「……アテナ、なのか」

　彼女の美貌だった。数か月前、日本で命を落とした蛇へび女め神がみと瓜うり二ふたつであった。

「否いな。妾わらわはアテナにあらず」

　銀髪の美少女は尊大につぶやく。口調までもがあの女神と同一だった。

「パラス・アテナと呼ぶがよい、我が逆ぎやく縁えんの担にない手よ」



7

「かつて、この地上にはグィネヴィアなる魔女王が存在したと聞く。妾わらわはその跡を継ぎ、当代の魔女王となった者である。以後、見知りおけ」

「つまり神しん祖そなのか……」

愕がく然ぜんとする護ご堂どうを見み据すえて、パラス・アテナはさらに言う。

「魔道の技を尽くして、手近にいる神殺しめを探してみれば……驚いたぞ。まさか、我わが逆ぎやく縁えんの担にない手とこれほど早く会えるとはな」

「逆縁？」

神祖は前世の——女神だった頃の記憶を持たないはずではなかったか。

だからこそグィネヴィアは『最後の王』の探索に失敗し続けたのだ。しかし、アテナと瓜うり二ふたつの神祖は草くさ薙なぎ護堂を覚えている……？

首をかしげながら、護堂は言った。

「あんたが死んだ原因は救世の神刀に命を吸われたことだろう？ それなのに、どうして『最後の王』の手先になるんだ？　『最後の王』は仇かたきみたいなものじゃないか！」

「たしかに……。だが、神祖とはそういうものだ」

護堂に追及されても尚なお、パラス・アテナは尊大に微ほほ笑えんでみせた。

「知っているか？　神祖とは全て、救世の剣に命を奪われた地じ母ぼ神しんの成れの果て……。かの神刀によって命数尽きた大地の女

神は神祖として生まれ変わり、この世の最後に顕あらわれる王を主人として崇あがめるにいたるのだ。だが、たしかに」

　パラス・アテナが皮肉っぽく唇くちびるをゆがめる。

　護堂はハッとした。彼女の微笑に宿る尊大さが雄お々おしさへと、わずかに変化した——そんな気がしたからだ。

「仇という言葉にはうなずかざるを得ぬやもしれぬな。……だが、まあ、今はひとまず置くとしよう。それよりもあなただ、東方の神殺しよ」

　今この場にはカンピオーネがふたりいる。

　しかし、パラス・アテナは軽薄なイタリア人を無視して、草くさ薙なぎ護堂のみをまっすぐに見つめていた。その双そう眸ぼうに宿る闘志、気け高だかさ、誇り高さは全て女神アテナと同じ——。

　護堂は静かに少女を見つめ返した。

　しゃしゃり出るつもりなのか、隣にいたドニが口を開きかける。

　が、仮面の風神がその瞬間にずいっと一歩踏み出した。ドニに向かって。まるで『汝なんじの相手は我われなり』と宣言するように。

　ドニはにやりと笑って風神を見つめ、無言のまま視線を固定する。

　このやりとりを尻しり目めに、パラス・アテナは妖あやしく微笑んだ。

「神祖は地上に生まれ変わるとき、前世の……神であった頃の記憶を失う。この妾わらわも例外ではない。だがな。我が魂たましいの奥底には燃えさかる激情がある」

「激情？」

「うむ。妾には倒すべき宿敵がいるという、な……。怠たい惰だなる英雄を覚醒させることが我が使命。だが、それすらも色あせて見える逆縁がここにある」

　パラス・アテナは己おのれのうすい胸に拳こぶしを当てて、つぶやいた。

「すなわち、あなたを倒すのは妾だという因いん縁ねんだ」

「……いいや。そいつはまちがってるぞ」

　唇くちびるを獰どう猛もうな微笑の形に歪ゆがませながら、護堂はささやいた。

　今の短いやりとりでわかった。たしかにアテナは『最後の王』の配下として甦よみがえったのかもしれない。だが、あの女神の本質と魂は神祖となってもおそらく変わっていない。

　ならば、草薙護堂が言うべきことはひとつしかなかった。

「逆だよ。俺の方があんたを倒しにいく。そういう約束なんだ。あんたには大きな借りがあって、俺はそいつを返さなくちゃいけないんだよ」

「ほう」

　パラス・アテナもまた獰猛に微笑み、目を細めた。

「そうであったか。あなたは妾に敗れた身なのだな」

「まあ、そうだと言えなくもない。いろいろあったんだ、俺たちの間には」

「承知した。つまり、我らは死と生すら越える逆縁の絆きずなで結ばれている。そういう理解でかまわぬのだな——。ならば問おう、神殺しよ。あなたの名は？」

「それくらい覚えておけ。草薙護堂だ」

　気高い戦いくさ女め神がみの貌かおそのもので問う神祖へ、護堂は答えた。

　パラス・アテナはその名を味わうようにうなずくと、高らかに叫ぶ。

「よかろう！　ならば草薙護堂よ。今ひとりの神殺しよ。神祖パラ

ス・アテナは魔王殲せん滅めつの英雄につらなる縁えん者じやとして、あなた方両名に開戦を告げに来た！」

　それは猛たけ々だけしい女王からの宣戦布告だった。

「さあ。我らよりの挑戦、受けるや否いなや⁉」

「……そうまではっきり言われちゃあ、否とは言えないなあ」

　護堂よりも先に、今度こそサルバトーレ・ドニが発言した。

　朗ほがらかな笑顔である。だが、ずっと肩から提さげていた円筒型ケースを開けて、隠していた長剣を抜き放つ。戦闘準備だった。

「最後の王を探しはじめた途端に彼の配下に会えるとはね。その挑戦、ありがたく受けさせてもらおうか。君たちの力を見せてもらうよ！」

　言い放つなり、金髪のカンピオーネは目の前の風神へと斬きりかかった。

　袈け裟さ懸がけの一刀。しかも、ドニの右腕は銀色に輝いている。魔剣の権けん能のうを使い、全てを一刀両断するつもりなのだ。

　対して、『風の王』と呼ばれた神の右手に大刀が忽こつ然ぜんと顕れる。

　仮面の神はこの刀でドニの斬ざん撃げきを払いのけた。受ければ大刀ごと両断されるのだから、賢明な対応である。そして、これではっきりした。

『風の王』はサルバトーレ・ドニの魔剣をしっかり覚えている！

「すごいな。一五〇〇年も前に戦った相手を忘れてないなんて、さすが神様だ」

　変な感心の仕方をするドニは、だらりと右腕を垂らした。

　剣の切っ先は地面を指している。もちろん戦闘放ほう棄きではなく、無む想そう剣けんの構えだった。この自じ堕だ落らくな立ち姿から、ドニは逆袈裟の一刀を繰り出す！

　斜め下より跳ねあがってくる魔剣に対して、風の王は大刀を――捨てた。

　からんと放り捨てたのである。

「!?」

　驚きよう愕がくしたのはドニではなく、護堂だった。

　敵てき手しゅが何を仕掛けてこようと無念無想で応じ、天てん然ねん自じ然ねんに剣を振るう。

　それこそが無想剣の真しん骨こつ頂ちよう。ゆえにドニは涼しい顔のまま魔剣を振り抜き、『風の王』の左脇わき腹ばらから胸、右肩にかけてを存分に切り裂こうとする。

　が、『風の王』は間かん一いつ髪ぱつ、左腕でドニの魔剣を受け止めた。

　ガキン！　鉄と鉄がぶつかる異音。そう、布と仮面で全身を覆おおいかくした彼ないし彼女は風神と剣神の混淆種ハイブリッドだという。ゆえに鋼はがねの肉体を持つ。

『風の王』の左前腕部はガキンとドニの魔剣を受け止めた。

　しかし、代償として左腕の三分の二ほどが切り裂かれてしまった。

　一五〇〇年前の古代ガリアでも同じ展開を護堂は見た。だが今回、『風の王』はすかさず右の手刀をドニの魔剣に叩たたきつける。

　がしゃん！　ガラスの砕けるような音が響く。

　それはドニの振るった長剣が砕け散り、無数の鉄片となって地面に落ちる音だった。

　鋼の硬度を持つ五体で繰り出せば、ただの拳こぶしや蹴けりでも必殺の聖剣代わりとなる。ある意味で、刀剣の化身である鋼の軍神らしい反撃法であった。

「前と同じじゃないってわけだ！」

ドニは柄つかだけになった剣を捨て、さっと後方へ跳びのく。

機敏な『風の王』はそれを追いかけ——ようとして、踏みとどまった。

その振る舞いを見て、にやっとドニが笑う。剣術だけでなく、あやしげな柔じゆう術じゆつをはじめとする格闘技全般も身につけた男なのだ。

剣がなくともうかつに追撃すれば、返り討ちに遭あう。

そうと見抜いて『風の王』は、ドニの誘いをひとまず無視したはずだ。

仮面の軍神もまた、サルバトーレ・ドニに勝るとも劣らない武芸の使い手なのだろう。そうとうかがわせる振る舞いだった。

共に武器を失った両者は数メートルの距離を置いて、対たい峙じする。

ドニはやや猫背になりながら、両手をだらりと下げてノーガード状態。

だが、この剣けん仙せんめいた男は変幻無む窮きゆうの武術を真骨頂とする。むしろ構えのないときの方が恐ろしいはずだった。

そして『風の王』は右の拳を握りしめ、その右手をドニに向けた。

それは拳をフェンシングの剣に見立てたような構えだった。拳法やボクシングに類する格闘術を見せるつもりなのか——。

即席の格闘家同士による、無手の攻防がはじまろうとしたとき。

「そろそろ控えよ、『風の王』。無論、そなたの輝かしい武勇は何にも勝る切り札だが……ほかにもまだ、神殺しめらに紹介すべき英えい傑けつがいる」

パラス・アテナの指示だった。『風の王』はすぐに拳を下げた。

次の瞬間、風と鋼の混交神は一陣のつむじ風に姿を変えて、消え失せてしまった。このあっさりとした退場に、護堂は逆にうなずい

た。

「そりゃそうだよな……。護衛役があいつひとりじゃ、俺たちの相手はできないもんな」

　パラス・アテナは神祖であり、超越の力を所有する魔女王である。

　だが、神々やカンピオーネに亙ごするほどの力はないはずだった。先代のグィネヴィアがそうであったように。

　無論、竜りゆう蛇だの封印を解いて地母神としての神性を取りもどせば、話はべつだ。

　しかし、それは命とひきかえに行使できる切り札。

　軽々しくは使わないだろう。——まあ、彼女がアテナの魂を持つ者ならば、真に使うべき場面では一瞬の躊ちゆう躇ちよもなしに竜蛇化するのだろうが……。

　ともあれ、その時はまだ〝今〟ではない。確信にまかせて護堂は言った。

「俺たちに見せたいやつってのは、どこにいるんだ？」

「ははははは！　すでに推すい参さんしているぞ！」

　快活で男らしい笑い声が天より降ってきた。

　その声を聞いた瞬間に、護堂は駆けだしていた。とっさに『ここにいたらまずい！』と勘かんが働いたのだ。パラス・アテナから遠ざかる形で全力疾しつ走そうする。

　直後、たった今まで立っていた場所へ、数十本の矢が降ってくる！

　地面に突き刺さる大量の矢を尻目に、間一髪で難を逃れた護堂。そして、それと同時にもうひとりのカンピオーネも奇妙な動きを見せた。

「おおっと!?」

　ドニがいきなり驚いて、すばやく跳びのいたのである。

　何者かの攻撃をかわすような動き。しかし、ドニの前には誰もいない——否。金髪の天才剣士は尚もひらりひらりと右に左に避け続け、何者かの襲撃を次々としのぐ。

　見えない敵と戦うシャドーボクシングめいた回避運動。

　しかし、護堂は知っている。サルバトーレ・ドニは神速すら見切る心しん眼がんの使い手だと。おそらく、今もその技を駆使しているのだろうと直感した。

　ドニを襲う敵は常人の目では視認できない——神速の使い手なのだ！

　実際、超高速で動きまわる人影めいた何かがドニのまわりで飛んだり跳ねたりして、跳ちよう梁りよう跋ばつ扈こしていた。

　しかもシルエットから察するに、長い棒状の武器を持っている感じだ。

「これを使え！」

「ははっ、ありがたい！」

　とっさに呼びかけると、ドニは笑顔で銀の右腕を護堂に向ける。

　護堂は舌打ちした。説明抜きでこちらの意図を読み取るドニが腹立たしかったのだ。べつに仲がいいわけでもないのにと。

　しかし、文句を言う余裕はない。代わりにこう叫ぶ。

「天あまの叢むら雲くも！　すこしの間、あいつのところで戦ってこい！」

『応おう！』

　草薙護堂の腕に宿る神刀に命じると、天あまの叢むら雲くもの剣つるぎは忽然とドニの右手に顕れた。

　ゆるく湾曲した刀身は三尺三寸五分。刃も拵こしらえも日本刀とよく似た形状だ。しかし、その刀身は漆しつ黒こくで禍まが々まが

しい妖よう気きすら放っている。

「これさえあれば、百人力だ！」

　護堂からの加勢をドニは両手で持ち直した。

　そのまま天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを横よこ薙なぎに振るう。すぐさま『キン！』と甲かん高だかい音が響いた。金属と金属がぶつかり合う音だった。

　さっき『風の王』との対決でも鳴りひびいた異音である。

　神速の人影が振りまわす棒状の武器を、天叢雲劍はみごと上から押さえつけていた。

　それに合わせて金属棒を持つ人影もようやく動きを止め、ついに護堂の目にも姿をさらしたのだが——パラス・アテナ登場に匹敵する驚きだった。

「斉せい天てん大たい聖せい！」

「いかにも。ひさしいのう、草薙の」

　ドニが受け止めた金属棒こそは、あの名高い如によ意い金きん箍こ棒ぼう。

　神速で電光さながらに跳ねまわっていた猴こう王おうこそは、斉天大聖・孫そん悟ご空くう。黄色い戦いくさ装しよう束ぞくの上に革製の胸当て、籠こ手て、脛すね当あてを身につけている。

　奥おく日につ光こうの戦せん場じようヶが原はらで死んだはずの『まつろわぬ神』はにやりと笑った。

　さらに大きな羽音と共に、有翼の白馬が空から舞い降りてきた。

　ギリシア神話でいうペガサスである。かつてナポリで目撃したことがある。そして、その乗り手のこともよく覚えていた——。

「ふふふふ。いささかばつが悪いものだな。一度は死した身でのこのこ舞いもどってくるというのは……」

　白い外がい套とうを着こんだペガサスの騎手は、長ちよう弓きゆ

うを手にしていた。

　さっき護堂を射いたのは彼なのだ。秀しゅう麗れいでありながら微み塵じんもひ弱さを感じさせない美び貌ぼうに、輝く山やま吹ぶき色の巻き毛。どちらもペルセウスのものだった。

　去年の夏、ナポリで死闘を繰りひろげた古代ローマの英雄である。

　そういえば以前、誰かから『ペルセウスは死んだ』と教えられた気もするが――。

「あれえ？　君ってたしか、あのときの！」

「ふふ。いつぞやは世話になったな、魔剣の神殺しよ。草薙護堂のみならず、貴公にも返礼をせねばなるまい」

　あのとき、早々とナポリから退場したはずのドニが目を丸くしている。

　それを尻目にペルセウスは羽ばたくペガサスを降下させ、ついにパラス・アテナの左側へと降り立った。

　すると斉天大聖もドニの前から『ぴょん』と跳びすさり、魔女王の右側に着地する。

「どうだ？　先代の魔女王が遺のこした剣の鋭さは？」

　二ふた柱はしらの軍神を右と左にしたがえて、パラス・アテナは言う。

　いつのまにか彼女の右手は黄色いメダルを手にしていた。それは鉄と黄金から造られる合金めいた色合いだった。

「最高の剣神たる『最後の王』にはな、目の前で斃たおれた同族を己おのれの武具に――矢の代わり、剣の代わりとする権能がある」

「「…………」」

　救世の神刀以外にもそんな権能があったとは。

　護堂だけでなくドニもさすがに唖あ然ぜんとして、魔女王の手元

を見つめた。鉄と黄金のメダルには、剣の形に似た刻印が三つ刻まれていた。

「この《鏃やじりの円盤》こそが剣神招来の権能を預かるための器うつわ。ふふふ、代々の魔女王がひそかに伝えてきた至し宝ほう、今こそ使わせてもらうとしよう」

　ほくそ笑むパラス・アテナを前にしながら、護堂は息を呑のんだ。

　そういえば、前に誰かから『鏃に気をつけろ』と言われなかったか。だからなのか、さっき矢を射かけられて以来、危険の兆ちよう候こうをずっと感じている。

　とてつもない脅きよう威いがすぐ間近に迫っているように思えて、仕方がないのだ。

　それが一体、何なのか。いぶかしんだ瞬間、護堂は気づいた。いつのまにか空に雷雲が広がり、そのなかに電光の燦きらめきがかいま見えたからだ。

　そうだった。ここまで役者がそろった以上、あいつも来るに決まっている！

「天あまの叢むら雲くも！」

　護堂が叫ぶのと、稲妻が落ちてくるのは同時だった。

　ドニの手元から漆黒の神刀が消え失せ、代わりに護堂の右手に顕れる。これをすぐさま天に向けてかかげ、さらにウルスラグナ第二の化け身しん『雄お牛うし』も行使する。

　人間を凌りよう駕がする剛ごう力りきの持ち主に対してしか、使用できない怪力無む双そうの化身である。

　もちろん、今回は問題なかった。

　電光の速度で急降下してくる敵は天あま翔かける突撃の騎士。その馬力と突破力がたやすく使用条件をクリアさせてくれた。護堂は『雄牛』の怪力で天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを頭上にかざしていた。

天より飛来してきた女騎士の槍やりを受けるために。

「だああああああああああっ！」

「会えてうれしいぞ、草薙護堂！　我が運命の男よ！」

稲妻と共に大地へ突撃してきた騎士は、蜂はち蜜みつ色の髪をなびかせる美少女だった。

シャギーを入れた髪の短さが涼やかだった。人馬一体で天より飛来した彼女は鎖くさり帷子かたびらをまとい、逆ぎやく棘とげ状じようの騎ラ兵ン槍スで武装している。

その穂ほ先さきで護堂の額ひたいを貫つらぬこうと、突き入れてきたのである。

これを天叢雲剣が受け止め得たのは『雄牛』の怪力があればこそ。漆黒の刃と槍の穂先がガキッとぶつかった瞬間、護堂は大きく神刀を横に振りまわした。

結果、槍と馬と女騎士は『ぶん！』と払いのけられる格好となった。

彼女たちは空中でバランスを立て直すと、そのままパラス・アテナの背後に降り立つ。

「フッ。余よの到来を見切っていたとは察しがいいな」

「ここまできたら、あんたも必ず生き返っていると思ったんだよ」

どうにか命を拾い、はあはあと息を荒らげながら護堂は言った。

天あま翔かける白馬にまたがる女騎士は、もちろんランスロット・デュ・ラックだった。

「さあ。どうだ、我が逆縁の担い手・草薙護堂よ。今ひとりの神殺しよ」

アマゾネスの女王までしたがえて、パラス・アテナは高らかに告げる。

「これなる軍神たちに加えて、『風の王』も妾の陣中に控えてい

る。当代の神殺しどもへ宣戦を布告するにあたり、十分な戦力だとは言えまいか？」

「いやいや。十分も十分、お礼を言いたくなるくらいの充実ぶりだよ」

　珍しく苦笑をこぼしたのはドニだった。

　いつも強敵・難敵を求めて苦労しているというのに、今回は文句のつけようもない相手ばかりが次々と現れてくれるのである。それゆえの苦笑なのだろう。

　この反応にパラス・アテナは微笑した。

「ならばよし。では、あなたたちの同族——残りの神殺しにも伝えるがよい。妾はこれより東方の果てへ向かい、『最後の王』復活の儀に取りかかる。異論があれば、儀式が終わる前に妾を倒してみせよ」

「なんだって!?」

　驚く護堂へ、アテナの生まれ変わりは鋭く告げた。

「ずっと迷っていたのだ。我が逆縁の相手を討ち果たすのが先か、我が主というべき英雄を甦らせるのが先か、いかにすべきかと。そして妾は決めた。全てを成り行きにまかすのもまた一いつ興きようであろうと」

「なんて適当なやつだよ……」

　護堂は呆あきれてから、気づいた。もともとアテナは気まぐれに放浪を続けていた女神。風の向くまま船を操り、気の向くままに歩みを重ねてきた存在なのだ。

　むしろ、これもアテナらしいと言えるかもしれない。

　実際、パラス・アテナが浮かべる笑みの剛ごう毅きさは、あの蛇女神と同じだった。

「さらばだ。東の果てであいまみえようぞ、神殺しども！」

　清らかな白い光がパラス・アテナと軍神たちをつつみこむ。

それはリリアナも使う飛ひ翔しよう術じゆつの輝きによく似ていた。果たして、光につつまれた一行はすぐに飛び立ち、東の空へと駆けあがっていった。

そう。『最後の王』が眠る土地――日本列島のある方角へ。

8

「……とまあ、草くさ薙なぎさんたちのサルデーニャ旅行、こういう顚てん末まつだったそうで」

スマートフォンを相手に甘あま粕かす冬とう馬まは事件の報告を行っていた。

聞き手は東京都千ち代よ田だ区くにいる沙さ耶やの宮みや馨かおる、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの幹部である。

『大おお盤ばん振ぶる舞まいだねえ。かつての強敵ばかりがずらり勢ぞろいなんて、特撮ヒーローものの映画版みたいだよ』

「ああいうのだと、集合するのはたいていヒーローたちの方ですよ」

『なら、合ってるじゃないか。護堂さんたち悪の大魔王軍団を退治するため、正義の英雄たちや元女神さまが集まってきたんだから』

「なるほど。たしかにそうですな」

軽口をたたいているくせに、甘粕の声に笑いの成分はない。

どちらかと言えば、ため息まじりに出すようなぼやき節ぶしである。また、電話越しに聞こえる馨の声もいつもより洒しゃ脱だつさが足りていなかった。

「ひとまず、草薙さんとエリカさんとはピサの空港で合流して、そのままみんなで日本へ帰る予定です。本当なら、あと一週間は休暇を楽しみたかったんですけどねえ」

『公費での出張中にその優雅な発言、さすがだよ甘粕さん』

「いえいえ。激務の合間にもきちんと心身をケアするプロ意識の賜たま物ものですよ」

　直属の上司との心あたたまる会話を終えて、甘粕は電話を切った。

　今いる場所は古城ホテルのロビーである。

　万ま里り谷や祐ゆ理り、ひかり、清せい秋しゅう院いん恵え那な、リリアナ・クラニチャールもいっしょにいる。それぞれ旅行用のキャリーケースを持参しており、帰国の準備は終わっていた。

「とんでもない事態になってきたな……」

　憂ゆう慮りよと共につぶやいたのは、リリアナだった。

　彼女たちも当然、エリカ・ブランデッリ経けい由ゆでもたらされたサルバトーレ・ドニ追跡行の顚末を知っている。旧敵たちがふたたび顕けん現げんしたことも。

「ペルセウス、斉せい天てん大たい聖せい、ランスロット、アテナ……。そのうえガリアで見た風の神と『最後の王』か。本当にこの世の最後が来そうな雰囲気だな」

「そんな……」

　リリアナの発言に、ひかりが表情を曇くもらせている。

　一方で恵那は、媛ひめ巫み女こ仲間の様子をじっと見つめていた。このロビーに来たときから万里谷家の長女はぼうっとした表情で、ずっと無言だったのである。

　彼女の幼なじみでもある太た刀ちの媛巫女は、おもむろに問いかけた。

「もしかして祐理さ。何か視みえたりしたの？」

「……一応、そう言ってもいいのかもしれません。ただ、これにどんな意味があるのか、私にはちっとも見当がつかないんです。だから申し上げていいのか、どうか——」

　自信なさげに考えこみながら、祐理はつぶやいた。

　対して、恵那はあっけらかんとした口調で朗ほがらかに頼み込む。

「でも、王様たちの話を聞いたあとで降りてきた霊視なんでしょ？　どんな内容でもいいからさ、とりあえず教えてよ！」

「視えたというより、よくわからない言葉が心に浮かんできただけなんです」

「言葉？」

「はい、こうです。『海に邪じや竜りゆうあり。竜は即すなわち風雲を興おこして以もつて天てん日じつを擁ようし、電でん燿ようは海に光れり。王は乃すなわち箭やを放ち、まさに竜の胸を破る――』」

「……竜退治のお話なのかな？　たしかに何なんだろうね？」

　巫女仲間の語った一節を聞き、恵那も首をかしげる。

　リリアナとひかりも興味深げにやりとりを聞いていた。そして、甘粕は「ん？」とひっかかりを覚えて、眉み間けんにしわを寄せた。

　祐理ではないが、今の言葉に〝なんとなく〟聞き覚えがあるような――。

　なんとなく、そう思ったのである。

あとがき

　みなさま、おひさしぶりです。丈たけ月づき城じようです。

　今回の一六巻、八巻以来となる短編集となります。……まあ、どちらの巻も短編というより中編が目立つ構成となってしまいましたが。

　僕は短編よりも、あれこれ事件を盛り込める中編の方が好きなのです。

　そのあたりの嗜し好こうがみごとに反映されてしまいました。

　また、今回の『魔王と騎士、現る』『ローマの休日・深夜版』『三人そろえば……？』『余話・顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くん』はアニメＤＶＤおよびブルーレイ一～七巻の初回特典としてブックレットに収録された作品となります。そして『囚とらわれのカンピオーネ』『うわさのカンピオーネ』はスーパーダッシュ文庫ホームページの特集コーナーに掲載された作品です。

　最後の中編『英雄たちの鼓動』は書き下ろし、一五巻直後のエピソードとなります。

　実はこの一六巻、あちこちで書いていた短・中編をまとめて収録し、さらに書き下ろし作品を加えて刊行しようという予定だったのですが。

　一五巻の作業終了後、原稿のストックを全部かき集めてみるとですね……。

「あれ？　これだけで単行本一冊分のページ数になっちゃうぞ!?」

　という事実が発覚しまして。

　書き下ろし分のページ数をこじ開けるべく、『草くさ薙なぎ護ご堂どうがカンピオーネになった年の春から秋にかけてのエピソードを時系列順にならべて収録』という形になりました。

　……そういえば、二〇一二年はアニメ用の特典小説を毎月書きためていたのですね。

　結果、僕の想像以上に書籍化されていない原稿がストックされた模様です（汗）。

　尚なお、すでに発表済みの作品は若じゃく干かんの修正を加えた以外の加筆はないのですが。

　アニメ版一巻特典の『魔王と騎士、現る』は例外的に一〇ページほど増量しています。

　これは加筆ではなく、逆に初しょ稿こうの状態へもどしたのです。

　というのも、初稿をアニメサイドでもろもろの事務作業にたずさわっていたスタッフへ提出したあと、要請されたのです。ページ数が多すぎるから減量できないだろうかと。僕は事情を推察しました。『あ、おまけペーパーみたいな折りたたんだ用紙一枚に収録するから、スペースの余裕がないんだね』と。

　というわけで、一〇ページ削けずったバージョンを渡した数か月後。

　アニメ版の一巻サンプルが僕の手元に届きました。で、ブックレットに掲載された特典小説を見て、思いました。「これなら紙面の余裕もあるはずだし、一ページあたりの行数と一行の文字数を増やせば初稿のバージョンでも収録できるじゃん！」と。

僕は担当スタッフに交渉を持ちかけました。

「これから書く特典小説はページ数とか気にしなくても問題ないですよね？　だって編集次第でいろいろ調整可能なはずだし」

　担当者は数か月前のページ制限云うん々ぬんをなかったことにして、快かい諾だくしてくれました。

……もしかしたら、直前に『このスタッフが発生させた洒しゃ落れにならないアクシデントをフォローするため、なぜか原作者の仕事が洒落にならないほど増えた一件』を話題にした影響もあったのかもしれません（苦笑）。

ともあれページ数フリーの権利を得た僕は、短編よりも中編好きな性分にまかせて『余話・顕聖二郎真君』を四回に分けて執筆したのです。

おかげで以前から考えていた『二郎真君 VS. 草薙護堂』を形にすることができました。

いや、バトルありの話の場合、ページの制限がシビアだと少々やりづらいのです。

さて。この巻の最後に収録された『英雄たちの鼓動』は一五巻終了直後のエピソードであり、次巻への前振りでもあります。

一七巻のタイトルは、おそらく『英雄の名』となるように思われます。

よろしければ、しばらくお待ちいただけると幸いです。


カンピオーネ！⑯
お買い上げありがとうございます♪
しこる

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XVI 英雄たちの鼓動

著者　丈月　城

２０１４年４月30日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！

XVI 英雄たちの鼓動」

２０１４年２月28日発行の第１刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１-８０５０

［電話］

０３-３２３０-６０８０（読者係）

制作所　トッパングラフィックコミュニケーションズ